

又彼れの推薦せる男石井菊次郎の佛國より歸りて就任するの段取となれり。海相の後任も亦、海軍充實案の暗礁横れるあれば、容易に其の人物を得る能はざるべしと思惟されたるに、八代の推薦せる中將加藤友三郎の條件付にて就任を諾せるに由り、其の改造案外速かに進行せり。其他は、別して難かしき事なく、文相一木喜徳郎は元老及び上院の緩和劑として内務に轉じ、其の後任には早稻田の才人高田早苗を擧げ、逓信の武富時敏は年來望める藏相に轉じ、其の後釜には政界の古老箕浦勝人の据るありて、新舊人物の顔觸茲に整然たり。子大浦、男加藤、若槻等の引退を見て、官僚の色彩漸く薄らげるを云ふも、一木の内相に頑張る以上は、官僚系の勢力衰へたりと斷ずべからず。黨人の頭數如何に多きも、其の中心勢力たる能はずんば、何の役にも立たざるなり。農相河野、逓相箕浦の如きは、内閣の肝煎役にて、朋黨軋轢の際の調和劑の觀あり。同志會の爲めに、大に氣を吐く者とは見るを得ず。首相大隈の大風呂敷を緊握するは無論法博一木なるべく、而して其の片脚たるは法博高田なるべし。今次の改造内閣を、前内閣に比すれば、伯大隈の自慢するに足る早稻田内閣なり。眞個の大隈内

閣なり。夫れだけ内容貧弱なるを免れず。とは云へ、斯の如く手ツ取早く改造し、破壊者をして乗するの機會なからしめたるは、流石に伯大隈の手腕也と思はざるを得ず。

三

隈板内閣の時、箕浦は逓信次官、高田は高等學務局長、肥塚龍は鑛山局長、尾崎は文相、武富は商工局長たり。爾後十數年大隈内閣成るや、尾崎は中正會を踏臺として法相となり、武富は不滿ながらも逓相に納りたるに、今次の改造あり、遂に宿望を達して大藏の椅子を占めたり。肥塚は惚け加減なれば、明日の人に非ずと思へるに、年の功にて同志會の總務に据れり。本人大に鼻息荒く、大臣志願の由なれど、疎雜の頭腦と、人格の疑問は、東京府知事にて既に行詰れるの觀あり。箕浦及び高田の拔擢は前官の關係よりするも順當なるべく、殊に箕浦は松隈内閣の時商務局長に任用されたれば、伯大隈とは淺からぬ因縁ありと見えたり。蓋し、口の人大隈の、無口の人箕浦を重用するは、其の性格の相反せるに由るか。高田は帝大の出、口の人、頭の人たると共に、手の人なり。其の學殖あり、才氣縱横なる點に於て、凡倉と見ゆるの箕浦と

全く其の趣を異にす。

箕浦は慶應義塾を出づるや、直ちに報知新聞に入り、編輯に従事せり。彼れに才筆の見るべきなしと雖も、一家の見を持して、屈せず動せざる所あり。有能なるか、無能なるかの輒く透見し得ざる所に、彼れの他を吸引し、他をして傾倒せしむるの福徳あり。生彩煥發せずと雖も、鈍重の裡、寡黙の間に、計畫を遂行し、事務を裁断するの力あり。年少早く斯の傾向ありて、今日もなほ斯の傾向に進みつつあるに似たり。依つて思ふに、彼れの一生涯は、黙々主義の連続にして、黙々として活動圏内を徐行するなり。「報知」退社後、仙臺に赴きて師範學校長となりたるも、年餘にして再び「報知」に舞戻りて國會開設を呼號し、明治十三年の交神戸及び岡山の商業講習所長となりたるも、是れ又大なる功績を擧ぐるに至らず。退いて大阪新報に據り、十五年に至りて三たび「報知」に入り、爾來拮据經營して其の基礎を築き、今日の隆盛を見るに至り。然れども、新聞經營は彼れの副業のみ、其の志は常に政界にあり。立憲改進黨組織以來政界に馳驅し、顔を初期議會に出してより、代議士に當選すること十二回、

未だ一回も落選せず。三十七年推されて副議長となり、平々凡々の裡に其の任期を終り。箕浦の特色は、此の平凡と黙々とありて、島田の如き熱辯と感情とに非ず、河野の如き美辭と不得要領とに非ず、武富の如き莊重と頭腦とに非ず、尾崎の如き多辯と才氣とに非ざるなり。彼れの面貌は宛然仁王の如く、「力」を象徴す。感情火の如く燃えざるも、冷靜水の如き沈着はあり。總身に智慧の廻らざる失なきに非ざるも、熱せず、狂せず、黙々として事を運ぶの長所あり。斯の長所を渾身の「力」に發揮し、政務を處理するに於ては、或は治蹟を擧げ得ずとも限らず。唯議會に於ける答辯の如きは、未だ大臣學の修養を積まざるを以て、農相河野の「エートエー」と同じく、満場の笑殺を買ふなきを保せず。彼れ箕浦の試金石は、今や報知新聞に非ずして、遞相の椅子にあり。

法博高田は、前文相一木に比すれば官僚臭なく、政客の風骨あり。赤門の出身にして、私學の經營者なるが故に、官私共に公平に歡迎して可なり。然れども、帝大には隈元豆大の偏見者流あり。早稻田大學長たり、純學者たらざるを以て、排斥せざる迄

も喜ばざるの風なきに非ず。彼れは往年改進黨の名士を以て鳴り、政界に雄飛せしが、一たび星幕下の壯士に襲撃され、背部に刀痕を負ひしより、意氣頓に銷沈せり。遂に代議士たるを断念し、早稻田の奥に退いて、専心育英の業に従事せり。然るに大隈内閣の成立は、彼れを上院に送りて、政治的氣分に復活せしめ、而して今次の改造と共に文相の椅子に據らしめたり。彼れ政界を退くの日、争で今日あるを想はんや。眞に不測の幸運なり。然りと雖も、既に尾崎は文相となり、犬養も三日文相となりたる事なれば、今日私立大學長たるの地位よりすれば、必ずしも有り難きものに非ず。破格の拔擢に非ずして、寧ろ當然の順序なりと云はんも、黨人ならず、官僚ならざる彼れとしては、伯大隈の首相たるが故にのみ當然たるなり。其の人物より觀れば、素より黨人長谷場純孝、大岡育造等の、何等學界と交渉なき者と同じの談に非ず。彼れは趣味の人なり。書畫骨董を蒐集するが故に、しか謂ふに非ず、美術に對して一隻眼を有すればなり。曾て學務局長たりし時、文部に美術課を新設し、大に美術の獎勵保護を講じたることあり。爾後十數年漸く文藝美術の進歩を見るに至り、美術展覽會、文藝

調査會等を創設されたるも、後者は幾許もなくして廢止され、前者も亦創立當初の趣旨に戻りて情弊百出せり。彼れ小松原は官僚の謀士、趣味に徹底せる人に非ず。時勢の要求に餘儀なくされて、形式的に設置せるのみ。固より高田の如く、美術を熱愛するの極、美術課を新設せるとは異なれり。形骸を玩弄して、精神を吹き込まざるもの、如何ぞ藝術の振興を期するを得んや。高田は此の方面に努力するに、最も適材なり。曾て美術課を新設せるの意氣を以て、現下の藝術界に處するの策を講ずるを要す。彼れは又學制改革案に就て、年限短縮の意見を有する筈なり。前文相一木の政策を踏襲せば彼れの主張を棄てざるべからず、自己の主張を貫徹せんと欲すれば東大總長山川以下官學派の反抗を覺悟せざるべからず。就任第一の難關は此處にあり。然るに彼れは、『過般教育調査會に於て所謂菊池案大多數を以て通過せる際なれば、予は此の方針に基き、最善の措置を施したきものと思惟せり』と言明せるに徴すれば、多少の變説改論は免れざるに似たりと雖も、彼れは立憲思想に富み、主義あり主張あり、理解あるの人なり。徒らに右顧左眄して解決を遲疑し、若くは尾崎の如く一時を糊塗し、自

己の地位を死守するの徒に非ざるべきを信ず。

中將加藤は、清浦流産内閣の海相に擬され、自己の要求容れられずして、御免を蒙りたる伶俐者なり。斯の人、海軍充實案の横れる短命内閣に飛び込めるを見れば、其の要求の大部の容れられたるや明か也。何れの内閣も軍閥の跳梁に制せられて、廢滅税の主張を反古とし、國費の調節がとれざる事なれば、内閣の一大英斷を以て文官制に改正しては如何と思ふが、さて大言伯にも力及ばすと見えたり。そは兎も角、當年の酒豪友三郎は、入りて海相となれり。彼れは八代の古武士的風格なきも、頭腦明晰にして、奇智あり機略あり、官界游泳の術又拙からず。明治十六年始めて少尉に任じ、爾來累進して、海軍大學教官、軍務局第二課長、艦隊參謀長、海軍次官等を歴、四十年中將に陞り、吳鎮守府司令官となり、次で第一艦隊司令長官となりて、日獨の風雲に會せり。八代は、就任の當時吾人の評せしが如く、海軍廓清の適材なりしも、軍政の手腕家に非ず、海軍充實案の暗礁を殘して去れり。加藤は艦隊司令長官よりも軍政の適任者也とは世人の認むる所、軍人の免黜以外、縦横の辣手を揮ふべく期待せら

る。前任者の推薦に由る以上、大體の方針に變更あるべしとは思はれざるも、殺活は其の人の運用如何にあり。八代の躓ける難關も、無謀の固執を敢てせざるに於ては、順調に解決するの望なきに非ず。中將加藤は、果して國防と國費の調節を圖り、國民をして意を安んせしむるを得るや。

四

内閣改造の結果、警視總監、參政官、知事等にまで波動を及ぼせり。辯ずる者は、地方官の更迭は、神奈川縣知事石原健三が宮内次官となり、北海道長官西久保弘道が警視總監に轉じたるが故の小異動にして、何等一木的色彩を施さすと云ふと雖も、『が故』以外に新内相の方針なり、色彩なりの加味せるは争ふ可からず。更に内面觀察を逞しうすれば、内相一木の方針よりも、寧ろ公山縣の壓力加はり來りて、轉任拔擢の均衡を破れり。俵孫一(宮城)の西久保の後を襲ひ、有吉忠一(宮崎)の石原の後釜に据れる、湯淺倉平(静岡)の警保局長に陞任せる、黒金泰義(大分)の山口に榮轉せる、孰れか官僚直系の擡首にあらざる。

湯淺は第三次桂内閣の當時、内務勅參より地方局長に拔擢され、山本内閣の成るや岡山に追はれ、大隈内閣の下に静岡に轉じ、今次再び本省に舞戻りて要樞に座せり。府縣會議員選舉の目睫に迫れる際とて、彼れの行動は政界指目の焦點なれど、彼れは比較的公明正大にして、官僚的偏頗を有せざるが故に、子大浦の下に安河内の試みたる險辣を繰返すべしとは信する能はず。萬一彼れは平生持する所の剛直を逆用し、周到の才を惡使するに於ては、折角贏ち得たる名聲を失墜して、生きながら葬らるべきや必せり。彼れの人格的手腕を發揮し、明日の進展を期すると否とは、今日の以後遺口如何にあり。有吉の朝鮮總務長官たるや、官界の麒麟兒を以て目され、將來の造詣測るべからずと稱されしが、宮崎の僻陬に轉じてより甚だ振はず。其の健康と意氣とを併せ銷せるが如く思はしめしが、手腕なほ冴えたる所ありと見え、神奈川に拔擢されたり。何事かを成すべく期待されて、何事をも成さずして去るの例少からざれば、彼れ有吉の果して評判程の技倆を有せるや疑なき能はず。俟も亦朝鮮にて色揚せる寧馨兒にて、行政的手腕凡ならずと官僚眼を驚かしたる人なり。三重にても、宮城にて

も、是れぞと云ふ治績を擧げ得ざりしも、北海道は准殖民地なるだけ、色揚の手腕を揮ふに都合好からんと評する者あり。黒金は曾て山口縣の警部長となり、政友會を粉壘せんとして猛烈なる選舉干涉を試み、非常に惡感を抱かしめたり。今次再び知事として同縣に蒞む、往年の蠻行を敢てせざるも、古き記憶は更に新しき惡感を誘起し、政争の激甚を致すや言を俟たず。當局者の選任、其人を誤れり。寧ろ赤星を長野に移さず、黒金と更ふるの勝れるに若かざりしなり。西久保の警視總監たる、伊澤の如く切れ味鮮かならずと雖も、一種茫漠の趣あるを採るべしとなす。伊澤は警眼準に似たるも、常に高處大局に著眼せず、餘りに低處小局を疑視するの嫌ありき。徒らに反對派の操觚者を壓迫し、緊縛して、以て取締の得たるものと爲せるが如き。動もすれば大盜強賊を逸して、賣笑婦を狩るに意を用ゐたるが如きは、其の一例なり。西久保の茫漠、稍安樂兼道に近きものあり。寬嚴其の宜しきを得て、却て好結果を奏するやも知るべからず。吾人、豈啻彼れの擊劍の達人にして、技を一巡査と闘はすの無邪氣さあるを以て、總監の適任なりと贊する者ならんや。其の細君の色町の出なると否とは、

敢て問ふ所に非ざるなり。

參政官の更迭せる、總て大臣關係に因れり。遞參藤澤の内務に轉じたる、策士を以て名を賣りたる木下謙次郎の遞參に新任せる、納涼會の牛耳を執りて低き鼻を轡の如く鳴せる不平兒加藤政之助の藏參に納りたる、下岡、濱口等官僚系の引退と一種の對照をなせり。木下は東京法學院の出、暫く農業に従事せしが、學びたる法律に野心を唆られ、臆畝の間に没頭すること能はず、再び上京して實業界に出頭せり。然れども、是れ彼れの志に非ず。明治三十五年選ばれて代議士となるや、専ら政界に奔走し、新進の策士を以て鳴り、且嫌はれたり。加藤は安政元年の生れ、十六歳にして村長となり、後埼玉縣學務課出仕となりて、清浦奎吾、横田國臣と共に學事に執掌せり。明治八年以降は官吏生活を打切りて新聞記者となり、大阪新報、報知新聞等に執筆し、兎角する間に埼玉縣會議員となり、議長に推され、二十三年歐米に遊びて其の制度文物を調査し、二十五年後は専ら代議士を業とし、豫算通の名聲を贏ち得て今日に至れり。其の容貌こそ藏相武富とは月鼈の差あれ、其の閱歷、頭腦、識見等に於て大なる軒輊

ある者に非ず。彼れに豫算編成の手腕あれば、是れに財政計畫の頭腦あり。唯官歴の學務課出仕に止まれるが故に、武富の内閣輸長まで陞れるに比して、一日の短ありとせらるるのみ。然るに加藤が己れの地位を顧みず、獵官熱に浮かされ、武富の下に藏參たるは、決して彼れの名譽と云ふを得ず。麒麟も老いては驚馬に若かず、況んや麒麟ならざる者に於てをや。吾人は、加藤裏天の末路に對し、憐憫禁する能はず。

外相石井新任の曉には、其の下に配置さるべき正副參政官の決定を見んも、目下缺員の儘なり。次官松井慶四郎辭職し、駐蘭公使幣原喜重郎其の後任たるべしとの説あり。幣原は三菱の女婿にして、男加藤とは義兄弟の誼あり。男石井は温厚の灰殻にして、高明のお氣に入りなり。外交事務に長すれども、自主的外交を試み得るの力量を有せず。男加藤に操縦され、元老に随使され、首相大隈の大風呂敷に捲かれて、何程の手腕を揮ひ得べきや。原敬の口吻を借り來りて評すれば、『國家の前途、寒心に堪へ』。ざるもの無くんば非ず。刺下の外交は何人の當るとしても至難なるには相違なきも、も少し情實を離れて人物を拔擢し、外交の大方針を確立して之が遂行に任せば、成功

必ずしも期し難きに非ざるなり。然るに現内閣は、内に財政難あり、國防難あり、外交難あり、到底短命なるべきを豫想するが故に、御大典を無事に了するを以て、足れりとなすに似たり。其の改造の一時の間に合せなり、參政官の人選も亦不平組鎮壓の黨略に出でたる、地方官の更迭の府縣會議員選舉に備へたるの形跡ある、多少餘興に類する者あるは蔽ふべからず。斯の如きも尙、より以上の憲政逆轉内閣を阻止するの功能ありと謂はざる可からざるに至りては、秋風に散る晶玉の涙に睫毛の重たさを感ずる次第なり。(大正四、八、二一)

何人が果して適任

戦後外交の成否如何は、直ちに邦家の興廢に關するが故に、何人にも重大視されつつあり。政友會が對支外交の失敗を以て大隈内閣攻撃の標的とせるも、元老一派が外相加藤高明排斥の理由とせるも、皆戦後外交を重大視するが故に外ならず。其の間素より政争を加味し、感情の疎隔せるに由ること勿論なるも、歸する所は「現内閣は戦

後外交を托するに足らず」と謂ふにあり。戦後外交を議するの、今日尙早なるも、政友會及び元老等は、斯の理由を以て類りに突貫を試みたり。然れども、二者の突貫には自ら異なるものあり。一は大隈内閣の破壊を期するにあるも、一は外相加藤のみを排斥し去るにあり。彼れは傲岸にして元老の意に聽從せざるのみならず、外交の秘密は一切之を打明けざるを以て、老婆心切の元老の反感を買ひ、且彼等をして不安の念を懐かしめたるなり。愛國心を自己の專賣なるが如く思へる元老としては別に不思議ならざるも、我が主張を貫かんとする男加藤には迷惑此上なかりしなり。感情漸く疎隔するに至りて、元老は加藤を誡首せんとし、政友會は又政權を把握せんの一徹に逸り、遮二無二大隈内閣を屠らんとせるなり。元老は男加藤を葬りて一先安心せるも、政友會は改造内閣攻撃の手を緩めず、盛んに憂國の至情を廣告しつつあり。然らば彼等は如何なる人物を擧げ、如何なる方針を樹て、如何なる提案を以て、戦後外交の衝に當らんとするか。歐洲戦争の勝敗未だ決せず、媾和の時期未だ定まらざる今日、必ずや其の明言し易からざるを思はずんば非ず。

愛國心の元老の專賣ならざるが如く、憂國の至情も亦政友會の特有にあらず。今日之を矜るべくんば、國民の何人か之を矜るに於て、元老又は政友會の人後に落つるものならんや。戦後外交は洵に重大なり。重大なりと雖も、一加藤を葬り、一内閣を屠りたればとて、其の成功を必期すべからず。媾和の時期到らん迄、幾内閣の起仆するや測るべからず。内閣更迭すれば外相従つて異なり、外相異なれば其の方針自ら變せざるを得ず。政友會の改造内閣を斃すも、政友會は理想の外相を得べしと斷じ難し。現下外交界を見渡すに、何れも曠世の偉材に非ず。酷評すれば、凡材庸器の臚列なり。男加藤ほどの手腕家を物色するも、なほ得るに難しとするの有様なり。元老如何に愛國心を發揮すと雖も、政友會如何に憂國の至情を壓搾すと雖も、凡材庸器を化して、高才逸足となし得るものに非ず。

然れども、外交の衝に當るもの、必ずしも曠世の偉材たるを要せず。其の問題、其の案件によりて、之を解決するに足るの適材を選任すれば可なり。萬國媾和會議に列席せしむべきもの、其の會議に於て邦家の威信を失墜せざるの適材なるを要す。適材

は其の場合に於て、適材の適材たる所以を發揮する者なれば、何人を以て適材となすやの判別は容易に非ず。吾人の茲に擧げんとするは、比較的適材なりと思惟する人物なり。

日清の媾和には、外相陸奥宗光、首相伊藤博文と共に其の衝に當り。日露の夫れには、外相小村壽太郎、折衝の任に當り、駐米公使高平小五郎も亦之に参加せり。如上の例を以てすれば、今次の媾和會議に列席するもの、必ず時の内閣の外相及び、駐露・英・佛・米大使の外に出でざるべし。實際の所、媾和談判に外交上の智識なく、經驗なく、手腕なき人物を擧ぐるの不可なれば、勢ひ現在の外交官中より選任せざるを得ず。如何に名望赫々の名將も、雄辯堂々の國士も、適所に非ざれば其の才能を發揮し能はざればなり。乃ち大隈内閣長命ならば、外相は男石井菊次郎なり。若し政友會内閣ならば、外相は男牧野伸顯か、子内田康哉か、有能にても無能にても其の任に當らざるを得ず。男牧野は山本内閣の外相となりたるも、無方針、不得要領、加ふるに決斷力に乏しかりければ、如何に機略縱横の權兵衛が後押をなすと雖も、外交界に權威を揮ふ

こと能はず。常に秘密、讓歩、平和を好個の楯として、國民の攻撃を避くるに汲々たりき。對米外交の失敗は、彼れが在官中に於ける拭ふ可からざる汚辱にして、例の不得要領、不決斷に由るの禍なり。斯の人を起して、戦後外交の功果を收めんとするは、恰も樹により魚を求むるの類なり。子内田は多少の霸氣と、肥後人の險辣とを有す。世人は其の外貌の相似を以て護謨人形となすも、此の人形容易に他に玩弄され、操縦されて、平然たる者に非ず。時によりては、抓まれても泣かざる事ある護謨人形なり。帝大を出で、伯陸奥に知られ、富豪の女を容れ、金力と才力との並行を得て、官界に擡首せる幸運兒なり。日露戦時駐清公使として活動し、漸く其の手腕を認められ、累進して駐米大使となり、西園寺内閣の外相となり、大に成すあるが如く期待されしも、其の期待に反して去れり。日米改定條約を以て、彼れの大功を記念するに足ると云ふも、日米間に横れる紛議の根本を解決せざるが故に、禍根を將來に貽せり。曾て男牧野の手古摺り、男加藤の持久策を執り、男珍田の苦しみつつあるは是れが爲めなり。然らば彼れは、無能なるかと云ふに、必ずしも然らず。男石井、男珍田の徒に比し、

或は外交事務に精通せざるの失なきに非ざるも、大處に著眼して事を運ぶの手腕はあり。男加藤以外に、其の人物を求むれば、彼れの如きも尙外交界の奇才なり。

疋巖侯井上の屢内閣に肉迫し、遂に男加藤を排斥し去れるを見れば、養嗣勝之助をして媾和に参加せしめんの魂膽ならずやと推せらるれど、夫れ程の底ありとは信する能はず。唯侯井上は、外交失敗の聲に誘はれて反加藤的不快の勃發せる也。勝之助は交際上手なるも、男高平ほどに耳の遠近法を解せず、對者を殺活擒縱するの手腕を有せず。男珍田の周到を以て事に當るに比すれば、主張を貫徹するの氣魄足らざるものあり。如何に岳父の聲援あり、夫人の臂押ありとも、難局を收拾するに成功すべしと思はれず。侯小村の矮身瘦軀を以て日露の媾和を結べるに徴すれば、矮軀稍似たる男林權助の如きも亦、其の任に膺るに足るべしと雖も、小男のみにては問題とならず。然れども、彼れは一家の見識を有し、抗爭して他に下らず、加ふるに根氣精力の矜るに足るものあり。夫の事務的外交官の莖弱外交に比し、嶄然一頭地を抜くものありと雖も、近時適所を得ずして、手腕稍鈍れり。男石井の後を襲ひて駐佛たるに至らば、

或は媾和の席に列るを得るや知るべからず。

斯く評議し來れば、元老の排斥あり、對支外交の失敗なきに非ざるも、媾和の大任を果すべく思惟さるゝは男加藤なり。次に子内田なり。更に下つては男林なるも、より以上に男本野一郎の適材なるを感せずんば非ず。彼れは素より經綸的外交家にあらず、機智塗湧の人物にあらず、温厚平和の外交官に過ぎざるも、何となく魅力あり、包容力又なきに非ず。加ふるに國際法に通じ、各國に駐劄せる閱歷あり、日佛條約の締結者として、日露和親の中樞者として、聯合國に受の善きものあれば、談判に際して何かの便宜あらんと思はざるを得ず。我意一徹の圭角漢よりは、温厚潤達の調和的人物の却て功を收むるの例は多々あり。使命を耻かしめすと云ふは、要するに帝國の利權を占め、國威を中外に發揚するに在り。讓歩必ずしき威信を失墜すとは限らざるも、當然得べき利權を主張せず、君子人の態をなすは屈辱なり。此の呼吸を解して、巧みに難局を收拾するは、外交界の達人なり。男本野は未だ達人とは稱すべからざるも、人物拂底の外交界にありては、多少毛色の異なれるを見る。何人が其の局に當る

も、黨人乃至國民の非難は免るべからず。一死以て事に當るに非ざれば、媾和の使命を全うすること能はざるなり。(大正四、八、一九)

帝國議會の闘士的人物

菊の秋石炭掘りも五位六位——成金も叙位叙勳の恩典に浴したので、財界の人々は現内閣を謳歌し、伯大隈の後押をしても、長生させたいと云つて感激して居る者もある。處が今春の總選舉に、御大禮議員と稱され、御大典の叙勳當込みに代議士になつた者も尠からずあるのだが、政治家は島田三郎、犬養毅、杉田定一、關直彥等が叙勳の榮を擔つただけで、他は何の御沙汰もない。叙勳を夢想して居た三百の頭腦——殊に與黨の連中は、新聞紙を手にして唯呆然として居た。然るに其の呆然が、時の移るに従つて、現内閣に對する不平となり、不満となり、畢竟するに首相大隈の執奏方が宜しくないのだと、飛んだ所に煙を揚げるに至つた。石炭掘りの感激を聽いて、太平

樂を並べて居た大隈も、此の煙を見て脚下から鳥が立つたやうに驚き、何とか好い揉消方法が無いか知らと首をひねつたさうだ。が、元來が樂天的の大隈の事とて、三日経てば、其様な事は念頭を去り、大風呂敷を擧げて平氣で居るので、與黨の不平不満は愈よ嵩するばかりだ。けれども大隈は、財界の人々を懐柔して聲を立てさせぬ様にして置けば、與黨議員などは何うでも操縦が出来るものと思つてゐる。是れまで參政官になり損ねて騒ぎ廻つた加藤政之助でも、大津淳一郎でも、乃至は夫れ以下の末輩でも、香餌を與へれば現金なもので、直ぐに癢が治まつて了ふのだから、大隈の馬鹿にして掛かるも無理のない話だ。そこで政黨屋の騒ぐことには、世間は又かと云ふ氣になつて、餘り同情もせず、問題にもしなくなる。夫れでなくてさへ官尊民卑の思想に囚はれてる衆愚の多い世の中だから、大隈の操縦振が巧いとか、嘘吐き振が豪いとか、褒めすとも可い所まで褒めるやうになる。夫れは皆與黨の官位に對する助平根性と、反對黨の神輿を擔ぐやうな空騒ぎをやるに由るのだ。政界の腰弱と足弱とは、何れも同一程度に駄目なもので、ワツシヨイ〜と騒いで居るうちに、一溜りもなくへたばつて了ふものだ。

御大典終了後、伯大隈の侯爵病が平癒すれば、圓滿辭職をなすだらうと觀測され、伯寺内を中心として内閣の破壊運動を試みた面々も、多少安心して居たやうな形勢であつた。が、伯大隈は何の圓滿辭職どころか、實業家側の機嫌が案外好いので乘氣になり、歐洲戦争の終局までは獅嚙み付いて、與黨總裁の男加藤高明にすら引渡しさうでない。二個増師や海軍充實も乃公の手で實行し、若くは實行せんとするのだから、陸軍でも海軍でも無暗に反抗すまいと、高を括つてゐる。侯井上の存生中は、時々疍癩玉を破裂して手に餘したが、公山縣は拜み奉つてさへ置けば、サイレンのやうな悪戯も演すまいと思つて居る。縦令菊の秋が過ぎても、現内閣萬歳だと尠からず自惚れてゐる。さあ斯うなつては、反對黨の策士は指を唾へて見て居る譯には行かず、内密に運動を開始した。此頃頻りに襲來する地震のやうに、まだ微動に過ぎないが、之が將來起らんとする大地震の前徴となるかも知れぬ。其の震源地の何れにあるかは、謂ふ迄もなく知る人の知る所で、晉に一個所のみではなく、長島一派にもあれば、政友

會にもある。國民黨にもある。與黨の不平連中にも絶無とは云へぬ。今や微震は、其處にも此處にも起つてゐる。殊に上下動の性質を帯びて危険なのは、長島一派と政友會で、元老、樞密院、貴族院の方面まで、其の脈が及んでゐる。夫れかあらぬか、此の方面の氣流は漸次險惡を呈し、大隈非難の聲をあげて、現内閣に殺倒せんとしてゐる。其の攻撃の材料は、大浦乃木問題は勿論、外交の失敗、海軍充實に關する諸問題にあるは明かである。

二

長島一派の中には、秋山定輔と云ふ天下取の筋書を作るに妙を得た策士がある。天下を取らうと策する者が天下を取つた例のないと一般、秋山も亦筋書を作るだけで天下を取つたことは無い。何時も失敗に歸してゐる。河野廣中を煽り立て、奉答文問題の芝居を打つた時も、議會は解散となつて天下の形勢は彼れの豫想外に轉じた。折角公桂の内懐に入つて同志會を創立したが、公の歿後何うも彼れの意の如くならず、摺つた揉んだの末、却て掴み出されるやうなへまをやつた。併し是れ式の事で屈する男

でなく、壓迫されるれば壓迫される程強くなるのは彼れである。強者に屈せずして、猛然と反抗するのは彼れである。彼れは辯舌の人ではないが、彼れに取るべきは、此の一種の反抗力、反撥力と、他をチャームするの魔力である。議會に顔を出した所で、犬養のやうに皮肉を云ふではなし、尾崎のやうに饒舌るではなし、黒須のやうに野次るではなし、平々凡々として鉛筆でも削つてゐるやうに見える。處が、彼れは半醒半睡の體で卓に凭れながら、絶えず心の鉛筆を削つて居るのだ。油断なく策を講じて居るのだ。彼れは斯く緘黙の實行者であるが、彼れの緘黙は長島隆二等の口に依つて綻びるのである。彼れの攻撃の策は、始めて他の雄辯によつて實行されるのである。斯う云へば、長島などは彼れに操縦される一個の傀儡に過ぎざるやの觀あるけれども、今日では立派な闘士の人物となつた。彼れの明晰な頭腦から流れ出る議論が、彼れの雄辯に依つて議場に鳴り渡る時は、此の青二才奴がと最初侮蔑した者も、自ら傾聴するやうになる。

長島の質問演説は、前議會の視聽を集めた者の一つであつた。彼れの鼻先には岳父

桂がぶら下つて居り、彼れの感情には元老の呼吸が響いて居たが、他の議員には容易に得難い秘密の材料を以て、びし／＼と政府者を鞭つやうに攻撃したのは痛快であつた。男加藤は傲岸で、政府の秘密を知らない議員などを目八分に見てゐる。心の中でせせら笑つてゐる。これ程の秘密を知らないで、上ツ面な質問をしたつて何になるものかと、頭から馬鹿にして掛つてゐる。夫れを長島に素破抜かれ、新舊表裏両面の事實を暴露し、例證されつつ痛撃を受けたのだから溜らない。流石の加藤も、辭窮して血路を纒かに例の皮肉で開いたやうな有様であつた。毒を以て毒を制すと云ふが、官僚を攻め立てるには、官僚に限ると見える。此の意味に於て、貴族院の水野鍊太郎、橋本圭三郎、勝田主計等の質問が有効である。だから、彼等が慕進して政府者の灸所を衝けば、一寸面を向けることが出来ない。如何に多辯饒舌すと雖も、陣笠連の發するへろ／＼矢では、政府者の内甲を射貫くことを得ないのだ。長島は曾て大藏省國庫課長となり、理財局長代理まで勤め、首相秘書官ともなり、同志會創立の抑もからの關係もあり、元老とも往復して政府者の内情を知る便宜があるのだから、質問の矢を

放つには恰好の地位にある。夫れに彼れは年少氣鋭、霸氣あり、野心に燃えてゐる。一種の理想を抱いて、夫れを政治上に實行しようとしてゐる。大隈内閣を斃すに非ざれば、憲政の進歩を期するを得ずとの考慮を持つてゐる。縱令夫れが伯寺内を擔ぐに依つて吾人の所期と相距ること遠いとしても、其の奮闘努力は多とすべきものがある。彼れの熱辯は、少しく舌の廻らぬ重さがあるにしても、其の身振が聽者を捕捉し、威壓するに足らぬにしても、他の新進に比すれば確かに一頭地を抽いてゐる。今後彼れは元老の説を受賣する事なく、健實なる政見を主張し、獨歩の地位を占むるに於ては、議會の花形として、若き闘士として、政界の視聽を動かすに足るであらう。

三

政友會は多年多數黨で、無言の起立にのみ馴れたせゐるか、熱辯なり、雄辯なりを以て鳴る者が甚だ少い。何時も陣頭に立つ者は、元田肇とか、井上角五郎とか、政界の古顔である。幹事などで、肩で風を切つてゐる連中はあるが、新しい辯に案外頭腦粗笨、おまけに訥辯と來て居るので、攻撃の火蓋を切る事の出来ない者すらある。斯うなる

と、如何に新人物と云つても、年が若く、政界の新顔と云ふだけでは何にもならぬ。まあ三十幾つかで代議士になつたから、之から政務の手習をして、政府攻撃に取掛らうと云ふのでは、甚だ心細い次第である。そこで、前議會で何人が奮闘したか、今議會でも活動しそうな人物は誰かと思渡すと、先づ床次竹二郎、小川平吉、横田千之助等が花々しい奮闘を繼續するだらう。さうして其の間に、吉植庄一郎、政尾藤吉、菅原傳、武藤金吉、古谷久綱等が賑やかしをすれば、議會の論戦も却々熾んにならうと云ふものだ。

床次は年少客氣の人物で、官途に就てからも、容易に其の客氣がとれなかつた。大藏省や、縣の參事官、書記官、收税長等に歷任したが、心中の不幸に驅られて殊更に長官や縣會杯と衝突を試みるやうな事もあつた。硬骨と云へば硬骨であつたが、圭角の多いので政府者から毛嫌されて居た。で、彼れは其の圭角を没する爲に、禪に參して修養したやうに聞いてゐる。儕輩に比して昇進の遅かつたのは、諸種の關係もあつたらうが、此の圭角の多く、到る所衝突をやると思つた風な所が、役人に向かなかつ

たのであらう。夫れでも全く官界から葬り去られずに、徳島・秋田の二縣知事になつて、禪的游泳をやつて居た。處が、機會が到來したと見えて、第一次西園寺内閣に、内相原に拔擢されて地方局長の椅子を占めることが出來た。譬へば、囊中の錐が穎脱して、始めて其の鋭さを認められた様なものであつた。果して彼れの手腕は、敏活に事務の上に働いたばかりでなく、自分の失意に鑑みて意を人材登用に用ゐたやうであつた。然るに何分局長位の者がやることだから、さう行りばえのするものでない。眞個彼れの人物を知られたのは、第二次西園寺内閣の内務次官になつてからである。彼れは地方局長の水野と共に、内相原の双翼となつて、大に献策したものだ。省内の刷新を斷行した事や、宗教統一の新しい試みをやつたのは、流石に當時の人心に尠からの刺戟を與へた。山本内閣の時分は、鐵道院總裁になつて、役人としては可なりに昇り詰める所まで昇り詰めた。之から轉回せねばならぬと云ふ瀬戸際に、時勢の推移を見て黨人の群に投じたのである。第二次西園寺内閣瓦解の際、勅選議員にならうと思へば成れたのであつたが、夫れは下僚の水野に譲つて、天晴の男振を見せた。大正二

年長谷場の歿後、其の地盤から補缺で出て、議政壇上に立つを得たのだ。究り彼れは長谷場に代つて政友會に於ける薩派の統率者となつたので、殆んど濡手で粟ども云ふべき好運を握つたのだ。黨人として將來に矚目されるのは、此の好運を握つたに依つて黨中に勢力を得たのと、大臣格の官歴が有るのと、頭腦手腕共に備つて何程か人物の大きい點とであらねばならぬ。が、多年の官吏生活は、野生の黨人のやうな豪放は無く、政府攻撃をなすに於ても、事理に囚はれて役人の臆病を現はすことが無いでもない。それが天下を欺瞞する黨人の惡臭に染まない、善い點かも知れぬが、黨を裏切つたやうな非難を免れぬ。さうした點は、黨の歩調を整へ、多數を統率するに甚だ損である。吾人は彼れの政見を反古にせよと云ふので無いが、彼れが攻撃には、も少し氣魄が伴はねばならず、彼れが勢力を緊張するには、も少し包容の大を示さねばならぬ。彼れの禪的修養が超然より嶄然たるに至らば、更に大に見るべきものがあらう。

四

小川は随分久しい間の小が平だが、相變らず毬栗頭に厚い唇を突き出して、支那浪

人的の氣焔を吐いてゐる。彼れの辯は立板に水を流すやうである。彼れの舌には青蕃椒ほどの辛味がある。大岡の毒舌、井上の惡罵と違つて、其の論旨に往々經綸の閃きが見える。對支外交問題となると、必ず飛び出すが、彼れの支那大陸に目を注いだのは今日に始まつたのでない。東亞同文會創立の議に參畫して、其の幹事となつた時分から、額に湯氣を立て乍ら、唇齒輔車の關係を説いて、日支兩國の親善を叫んで居た。一體帝大出身の法學士で、若槻禮次郎や荒井賢太郎等同窓だから、官途に就て居れば彼等の地位には進んだであらうが、終身書生を以て自任する男だけあつて、辯護士稼業の傍ら天下國家を論じて居た。さうして漸く經綸眼が光つて來ると共に、訴訟法第何條だけでは満足することが出來ず、明治三十三年には公近衛を擔いで國民同盟會を組織し、政府當局の外交方針を監督すると大きく出たものだ。尤も之は彼れ一人の腕で出來たのでは無いが、當時の氣焔は富士と淺間が一時に噴火したやうな凄じさであつた。彼れは信州人の螺氣と、精悍とを持つてゐるから、時事に對して能く論じ能く談ずるのみならず、實行に向つても猛烈な所はある。清韓を遊歴して、多少は其の

實情にも通じてゐる。參謀本部の作戰用兵上の踏査や領事の商工貿易上の調査と違つて、經綸上から實地研究をやつたのだから、此の問題では相應に火花を散して論戦が出来るのだ。併し實際男加藤と太刀打となれば、怪しい處がないでもないが、武藤のゼノアなごよりは確かりした所がある。日比谷焼打事件の際は、暴民煽動者の一人と疑はれて、牢屋に繋がれたが、數月の後晴天白日の身となつて娑婆に出た。出ると同時に、以前に輪を掛けた精悍を發揮して、政界の人気者となつた。山本内閣の時、躍起連に擔がれて法制局長官の候補者に納まつてゐたが、まんまと奥田系の倉富にしてやられた。が、其のしてやられたのが、小川豪傑の將來の爲めには好かつたので、今日も相變らず老書生で外交上の氣焔が吐けると云ふものだ。生中法制屋になつて、金ピカを著るよりは、民間の外相を以て自任する方が、いくら氣が利いて居るか知れぬ。負惜みは、負惜みとしてさ——。

横田は東京法學院の出身で、辯護士だが、材木會社か何かの専務になつて居る筈だ。彼れは幼時織物屋の丁稚となり、星亨に拾はれて其の居候になつてから法律を學んだ

のだ。今は細君を田舎大盡の橋本太吉から貰ひ、俸をまうけて、裕福な生活をして居るが、昔に溯つて見れば悲惨なものだ。然るに、其の貧乏が藥になつて發奮し、今日あるを得たのだから、何處かに度胸の据つて、骨節の硬い所がある。議會の質問演説には、小勝抄ひや揚足取りの様な、奇警を弄するので、如何にも人物を小さく見せるが、舌鋒の鋭利はある。大體論の大風呂敷よりも、部分攻撃に長じて、闘士的生彩を煥發する。黒須のやうに熱せず、理智の働いてゐる所に、彼れの餘裕があるやうだ。

五

中正會の菊池武徳、國民黨の鈴木梅四郎、無所屬の林毅陸等は、憲政擁護運動以來男振をあげて來た。人間は妙なもので、油が乗つて來ると若く見えるが、菊池や鈴木も相應な年配であるのに、政界では新人物のやうに騒がれてゐる。鈴木は財界の重役で鳴して來た腕であるから、其の方面のことは片岡直温位にはやれさうに期待されたが、辯舌は何うかと危まれて居た。最初は場馴れのしない爲めに、脱線するやうな事もあつたが、近來は演説振も巧くなつた。あの團體が如何にも重味がありさうで、さ

論客と稱するを得ないが、徒らに淺薄な術策と、場當りを生命とする者に比すれば優ること數等である。吾人は彼等の如何に明日の政界に處し、如何に明日の議會に活動するかを見んと欲する。(大正四、一一、一五)

貴族院の策士論客

貴族院は元來氣樂院とか、老朽院とか稱されて、殿様の氣休め所か、役人の古手が政治道樂をやる所か何ぞのやうに思はれたが、近年漸く其の舊い殻から脱しかけて、清新の空氣の中に目覺めて來たかに感ぜられる。貴族院近來の活動は、此の目覺め際の背伸びのやうな、無意義に兩腕を突張つて兩拳を突立てたやうなものだが、官僚の蒲團の中に甘睡を貪つて居た時代に比すれば、大に見るべき者ありとすべきである。けれども、貴族院は全く官僚と絶縁して、自主獨立の活動を試みるものではない。其の多數は依然として官僚派で、長閑擁護者で、元老の願使若くは長閑策士の方略に

依つて、電氣仕掛の人形のやうに不意に飛躍し、運動し、活動するのである。衆議院は一回の總選舉で政友會の絶對多數が破れて、政府與黨が大多數を占めると云ふやうな奇現象を呈し、従つて新顔なり新人物なりが選出されて、議場の空氣を一新するのであるが、貴族院は公・侯・勅選の連中は死ぬまで變らず、伯・子・男議員も選舉毎に多少の變動を見るだけで、大勢を左右する迄には至らない。多納議員は走馬燈のやうに變動するが、石碑本位の無智無識な連中で、國家本位の名論卓説や、策士の策略を以て、煽風機的活動をなす事は到底望まれない。唯貴公子と席を同じうするを光榮として、員に備はるに過ぎないのだ。で、多少なりとも貴族院を刷新するには、勅選の補缺毎に新人物を入れるか、公・侯の歿後に就任する後繼者の新智識を待つか、伯・子・男議員の改選に霸氣ある人物を送るかに依つて、其の空氣を新しくする外仕方がないが、なか／＼然う註文通りに行かない事情がある。華胄界には朋黨があつて、舊人物が采配を振つてゐるから、客氣なり霸氣なり、新思想なりを有する者は常に排擠されて、容易に其の地位を得る事が出来ぬ。官僚派の勢力ある今日は、夫れ以外の者は異端の

徒として排斥され、壓迫され、到底當選を必期するを得ない。空しく偉器を抱いて、山澤に朽つるの有様である。勅選にしても矢張然うであつて、官僚系外の人物は、縦令有識有爲の人物でも、時の内閣に快からざる者は推薦されぬ。西園寺内閣の時分、官僚系外の新人物が勅選されたので、多少の新彩を添へたが、未だ以て大勢には何等の影響がない。が、朋黨の軋轢以外に、いくらか政黨的氣分の漂うて來たのを多とすべきである。

二

今日まで貴族院が内閣組織者の考慮の中に置かれたのは、官僚の爪牙となつて、動もすれば政府者に反噬するからである。藩閥の徒は貴族院を操縦し得るから、彼等が内閣を組織する際には衆議院の懐柔に苦心するが、貴族院を考慮の中に置かぬ。之に反して多數黨の首領が内閣を組織する際には、或は元老に流眇し、或は貴族院の操縦に腐心せねばならぬ。一たび其の反抗に遇へば、如何に衆議院に多數を制しても、内閣の瓦解は免れないのである。貴族院の反抗に苦められたのは、獨り憲政黨内閣や、

松隈内閣のみではない。第四次伊藤内閣の如きも非常に惱まされてゐる。殊に西園寺内閣二回の倒潰の如き、山本内閣の瓦解の如きは、全く長閥の陰謀、貴族院の反抗に依つて、悲惨なる横死を遂げたのである。貴族院は輿論の公正なる批判者たるよりも、藩閥の使喚に由つて輿論を阻止し、内閣を屠殺した愚劣が多い。唯幾分でも貴族院の世人の賞讃を買つたのは、海軍收賄事件に關聯する伯山本の内閣を倒潰し去つた事である。現内閣の如きは、伯山本の罪惡以上に政治的罪惡を犯してゐるのだから、憲政擁護の上よりすれば、宜しく瀆職事件の責を負うて屠腹せしむべきである。貴族院の果して之を敢行するや否やは疑問だが、衆議院の反對黨と策應し、若くは呼應して、其の一角に風雲を起しつゝあるは事實である。

貴族院の策士の、内閣破壊運動を開始するは、多く公山縣の指金に由るので、必ず院外の軍閥と相呼應するの例である。今次の運動は、まだ其處まで進んで居ないが、伯寺内を中心として動きつゝある。其の勢力は至つて微々たるものだが、公山縣の支配如何に依つては、随分熾烈に赴くだらうと思ふ。彼れの配下の士は、多く口を以て

せずして、手を以て行るのである。花々しい論戦を試みるよりも、多数を以て遮二無二倒潰するのである。併し議會に於ける策戦利ならずと見る時は、諸有權謀、諸有術數を弄して、遂に自滅の餘儀なきに至らしめるのである。長闕の毒殺手段と云ふのは即ち是れで、如何なる内閣と雖も其の裏を搔く事は容易でない。其の策士と稱される者には、子平田東助、江木千之の如きがある。子平田は公山縣の懐刀で、切れ味の可いので聞えてゐる。山形人の素撲と實直との表皮下には、伶俐にして機敏なる、奇策縦横の血を湛へた脈管が通つてゐる。報徳宗などを唱道して君子然と構へて居るが、存外人心收攬の方略と、民衆利用の術策を考へてゐるのだ。憲法學者の一木喜徳郎が文相となり、内相となつて以來、現内閣擁護の爲めに或度まで憲法を曲解して憚らざるが如く、平田も亦報徳宗を裏切るやうな行爲を敢てすることが往々ある。君子は豹變すと云ふが、彼れは洵に能く政治家の豹變術を解してゐる。が、尾崎のやうな伴食振を發揮し、變説改論の看板を掲げて得々たるが如き愚を敢てしない。第一次桂内閣の農相となれば、農相となつただけの新しい試みは行る。縦令失敗しても、甚しい檻

檻を出さない。第二次桂内閣の内相となれば、又内相になつたで、内閣の中心人物として活動する。一度は平田内閣が成立するだらうと想はれたが、彼れは蒲柳の質で、自ら進んで難局に立たうとはしない。恐らく今後も難局に立つを避けるだらうが、政界の裏面的活動を試み、貴族院を操縦するに一臂の力を致す事は辭さぬであらう。

江木は上院切つての理窟屋で、難かし屋で、口も八丁手も八丁と稱される程の人物である。幸か不幸か足だけは、伯大隈と不具相憐むの跛で、暗中飛躍には不向であるが、夫れでも人並勝れた運動癖を持つてゐる。政界が變調を呈すれば、其の變調を敏感して、有合せの策士的手腕を揮はんとする。實際平田程に揮へないかも知れぬが、兎に角指を啜へて引込んで居ない。僧正遍昭然たる頭を臆面もなく政界に突き出す。此の頭の動き方で、官僚系が何う動くかは豫測がつくと思はれた事もあつた。近來は養子の江木翼が内閣輔長になつて居る處から、現内閣掩護の側に立つて居るが、夫れ程伯大隈に傾倒してゐるとも思はれない。愈よ長闕が現内閣に火蓋を切る事になれば、差當り苦しい立場にあるのは、此の江木や一木であらう。が、今日の形勢より察すれ

ば、公山縣が陣頭に立ち、子平田が策を進めて、伯大隈の片脚を薙ぎ拂ふやうな事は無さ相だから、策士は策士だけに觀望政策を取つて、官界游泳で鍊へた手腕を揮ふ事だらうよ。

三

盛んに現内閣破壊の火の手を揚げてゐるのは、伯寺内を擔がんとする長閑の一派である。山縣おん大の直屬ではなく、寧ろ從屬關係の者である。「手の人」よりも「口の人」たる男後藤新平とか、仲小路廉とか云ふ第三次桂内閣の覆滅を遺恨に思ふ人々である。同志會を勇退し、若くは掴み出された連中である。此の連中が上下兩院に聲息を通じ、陽に質問戦を辛烈に行ると同時に、陰に反對の氣勢を高めて倒潰するの策を講じてゐる。前議會に於ける上院の論議の賑かであつたより以上に、今期議會の論戦の熾んにして、舌鋒の鋭利なるべきは勿論である。

男後藤は、前議會以來政府に突撃を試みてゐる。彼れの論戦には、歩武肅々として進じと云つた風な整容はないが、勝負を一氣に決せんとするの勇猛はある。彼れの質

問振は、則ち突撃の二字に盡きる。彼れの突撃は所謂突撃せんが爲めの突撃で、別に成算あつての突撃でない。だから、其の突撃は花々しいが、尻の結ばぬことが多い。これは大風呂敷を擴げるに適して居る彼れの性格で如何ともすることが出来ないが、餘りに向見ずに猪突猛進するので、揚足を取られて思はぬ失敗を演ずる。思慮周密の參謀がついてないと、戦争が出来ないたちである。夫れに彼れは野心徒らに燃えて、餘りに氣が多過ぎる。同志會を脱したかと思ふと政友會に接近する、政友會でも甘い汁が吸へないと思ふと長閑に本家返りをする、彼れの周圍者が伯寺内を擔いで一仕事をしようとする又一緒になつて夫れを擔ぐと云つた風で、荐りに政權に有りつかうと焦つてゐる。地位を得ようと藻掻いてゐる。其の焦燥と煩悶と躍起とが餘りに露骨で、餘りに現金主義で、餘りに人目につき易いので、世間から「又か」と云ふ侮蔑を受ける。されば、彼れが近時の行動を眞面目に受取る者は尠く、悲痛な滑稽のやうに感ずる者が多い。曾ては相馬事件で使骨を唄はれ、臺灣民政長官で腕を鳴し、遞相となり鐵道院總裁を兼ねて政界の花形とまで持て囃された後藤新平たる者が、然ら輕舉妄動して

は見つとも無いぢやないか。如何に醫者出身なればとて、政界の脈のみを診て、好い加減な投薬をするのは、決して天下の名國手となる所以でない。色氣づいた風船娘のやうにそわ／＼せずにも、少し臂を落着けて政界の雲行を見ては何うか。然う大風呂敷を擡げすとも、京屋の娘のやうに眼で殺すやうになれば、將來政黨の首領ぐらゐには成れようと云ふものだ。今後は狂氣の如く騒ぎ廻るよりも、自重は肝心である。

仲小路は鯁骨を唄はれた事もあるが、鯁骨と云ふよりも寧ろ惻巧な男である。論客と云ふよりも、事務家と云つた風な手腕を持つてゐる。才人は才人に相違ないが、才氣縦横の人でない。才に任せて働かすに、或度まで其の才氣を抑制し、堅實の一面を廓大せんと努め、理智を以て進まんとする。其處に上厚下薄の矛盾がある。本人は衆望を得ようとするが、長上に取入らうとするの惻愴が、却て同輩若くは下僚の反感を來すやうな結果を見る。彼れの官海の風波を巧みに切り抜け、農相の椅子を占むる迄に陸進したのは、其の特有の惻愴を事務の上にも、交際の上にも働かせたからである。遞相後藤の下に次官になつた時は、後藤と反りが合はず、省内の事務を専斷したやう

に言はれたが、彼れの惻愴は無下に後藤に反抗するものでない。唯彼れに長閑の頼む所があつたし、夫れに多年官位で威しつけて來た下僚の多數が扣へて居ると思つたから、一寸芝居を打つたに過ぎないのだ。公桂の歿後、直ちに同志會を脱した態度に見るも、其の惻愴の如何に電光の如く鋭きかを察するに足る。彼れは政黨に立脚するよりも、官僚に攀縁せんとするのである。彼れは目前の打算の爲めに、時勢の推移を敏感せぬかの嫌がある。聖哲身を治するの法か何うかは知らぬが、彼れは確かに當世に身を處するの法を知つてゐる。知つてゐるから非難がある。彼れが時勢に逆行して、超然内閣の成立を目論むが如きは、彼れの爲めに執らざる所だ。併し彼れは冷靜である。飽くまで冷靜を持してゐる。男後藤のやうに政權に離れた翌日から、自動車を東西南北に飛ばすやうな妄動はしない。徐ろに謀を帷幄の中にめぐらして居る。機一たび熟すれば、倏然として起たんの概がある。彼れの上院に於ける論戰は、男後藤の一氣に寄倒さんとするとは趣を異にする。重箱の隅から隅をはじめるが如く用意周到細大洩さる所がある。一矢、二矢、三矢、續々として發する。理路井然としてゐる。爬

羅刹扶自在である。幾つもの小風呂敷に片ツ端から包んで、而も之を餘さずと云つた風がある。男後藤の穴だらけの大風呂敷と違ふ點は、此處である。堂々たる王者の辯はないが、伶俐なる策士の舌はある。彼れの舌鋒は、馴れた目で古疵を見ながら抉るのであるから、官僚の爲めには頗るの苦手である。

四

男後藤や仲小路等と同一歩調を取る者ではないが、彼等と共に奮闘力戦する者に、男目賀田種太郎、澤柳政太郎、鎌田榮吉、男高木兼寛がある。高木は醫博、慈惠院醫學校長、鎌田は慶應義塾長、澤柳は前東北・京都大學長、目賀田の韓國財政顧問たりしことは世人の知る所である。而して其の論客の三人までが教育者なるは、又政界の珍とする所である。

澤柳は群馬中學校長の時文部當局者に其の手腕を認められ、第二高等學校長に轉じて漸く其の名を知られたのだが、當時は馬鹿に佛教臭く、やれ道交會だ、やれ何會だと、禪的修養の何のと落著き拂つて、宗教的道德家で自任して居たものだ。流石に中

學校長から一躍して高等學校長になる程の男は感服したものだと稱されたが、此の男は實際夫れ程の道德家でもなく、教育家でもなく、一種の教育事務家であつた。教育政治家であつた。彼れは後年京大では手を焼いたが、二高時代は騒動鎮壓屋と云ふ名で通つて居た。夫れ程に學生に對しても如才なく、當局者に對しても如才ない勤め振を見せた。遂に拔擢されて普通學務局長となり、次官に進み、愈よ教育事務家たり、教育政治家たるの本質を發揮した。法科出身でも腰辨階級で意氣地なく朽ちて了ふのがある當世に、彼れは文科出身で役人の登る處まで登つたのは、此の政治家肌のある爲めで、辯舌・文才・度量具に備つて居るからである。夫れに彼れは進歩的の頭腦と、新しい試みをやる決斷力とを持つてゐる。時好に投ずると云へば語弊があるが、何しろ人の行き得ないこと、若くは行らない事を行つて、天下の視聽を新にしようとする好奇心がある。是れは其の一例だが、北大に女子の聽講を許したのは、確かに進歩的の頭腦から流れ出た決斷であるに相違ない。兎に角、やる事は、きばきして居る。多少功名に驅られる事はないが、京大の弊根に向つて一大鐵槌を下し、以て難

局を切り抜けんとした。之が爲めに一紛擾が持ち上り、自ら其の職を退くの餘儀なきに至つたが、彼等の反抗を恐れず、所信を断行したを多とすべきである。今や彼等は逆境に處して、多少の不平を抱いてゐる。往年の如才ない所が、漸く自信の強さを加へて來た。滿々たる覇氣が、電氣仕掛の硝子壘の中に入れた風船玉のやうに躍つてゐる。此の不平、此の覇氣が、彼れを驅つて議政壇上に咆哮せしめるのでは無いかと思はれる。無言、沈黙、起立にのみ忠なる頭腦の間に、彼れが氣焔を揚げるも亦一場の壯觀である。

澤柳の論戰はまだ穉氣を脱しないが、追々其の呼吸を解するに至つて、更に一段の生彩を添へるであらう。目賀田の夫れは感激に乏しいが、急所を衝くの底力はある。何時も酒の一升も呷つたやうな顔をして居るが、太刀打は鮮かである。其の腕は確かりしてゐる。將來の藏相と目されたるだけあつて、財政に就ては一隻眼を有し、現内閣の財政策に痛烈なる批評を加へて已まない。けれども、彼れが將來藏相たり得るかは疑問である。彼れを以て將來の藏相に擬したのは、久しい以前の噂である。其後人

物の一事務官に過ぎない若槻禮次郎が二度までも藏相になつた、朝鮮の財政を握つてゐる荒井賢太郎なども藏相に擬されたのだから、目賀田の時代は最う過去に屬したかも知れぬ。次の内閣には子三島彌太郎などが引出される番かも知れぬが、一度は男目賀田を藏相に据ゑて、其の縦横の手腕を揮はしめたいものだ。人物も片々たる官僚の俗才子とは違つてゐる。何處か斯う蠻骨を帯びて、包容力も相應に有りさうに見える。政黨に入つても、男高橋是清以上に仕事が出来さうだ。高橋の剛復は無くて、親切味はある。實際局に當れば、見掛倒して駄目な奴もあるが、目賀田は語呂は悪いが駄目では無さ相である。

五

男高橋は身代と共に、からだも太つた。青山御所の向側に大きな城廓を構へて意氣揚々としてゐる。外債募集の財務官で腕を鍛へ、夫れから横濱正金の頭取となり、日銀の總裁となり、山本内閣の際一夜漬の政黨員となつて、藏相の地位を贏ち得たものである。彼れは財務官出身だけに公債政策ごされ、積極政策ごされである。だから、

彼れの財政策は却々威勢が可い。肝心の減債基金をへらして、公債は決して募集せぬなど云ふ若槻の財政策とは全く反対である。現藏相武富の正貨維持・外債軽減の矛盾政策とは、無論相容れない。非募債主義で議會を解散し、内債募集で苦境を切り抜けんとするが如き現内閣の無主義無定見を攻撃するには、此上なき闘將である。彼れは藏相となつて局に當れば、全く以て不得要領、不徹底の答辯で質問者を煙に捲き、木で鼻を括つたやうな傲岸を以て對者に接するのである。彼れの風丰に禪的滑稽味はあるが、一たび口を開けば憎まれ口を利くので、往々人に毛嫌される。之が彼れの長所でもあり、又短所でもある。男後藤は鍬で掘り返された蚯蚓の如く活動するが、男高橋は凧に立つ木像の如く泰然と納まつてゐる。根が東北人だけに癢に障れば向ッ腹を立て、喧嘩腰になるのは餘り違はないやうだ。唯後藤の生彩煥發を缺き、後藤の散金術を解しないので、黨人乃至周圍者から好かれないのであるまいか。今後黨人として何程の勢力を張り、何程の大を致すかは未知數である。

鎌田は交友俱樂部の雄である。彼れは教育事業と終始してゐるが、曾て一たび郷里和

歌山縣から選ばれて代議士となつた事がある。慶應義塾出身者に政治家が多いが、彼れも亦政治が好きな一人である。勅選議員で上院に入つて以來、每期議會に何等かの問題を捉へて熱辯を揮つてゐる。熱辯と云へば詩人肌な感情家を聯想するが、彼れは極めて理智明晰な人である。皮肉なる社會觀察者である。彼れは可なり屁理窟を並べる。何でも理詰めにはせねば承知が出来ぬと云つた風である。さればと云つて頑固一天張ではない。却々に融通が利きさうな捌けた所もある。義塾は拜金宗の本山で、變説改論の餘裕綽々たる者があるやうに云はれて居るが、然うした者は尾崎一人ぐらゐで、他は福澤風の所信を貫くに頑固な所がある。彼れは賛成すべきを賛成し、反對すべきを反對するに、右顧左眎を要しないやうである。政友會の評判の悪かつた時でも、彼れは毀譽褒貶に關せず其の政策を賛したやうな事もある。彼れは紀州人の鋭敏と策略とを持つて居り、敢然として抗するの氣概があるので、敵も亦少くないやうだ。其處に彼れの強味と、面白味がある。

男高木は時に策士のやうに思はれ、時に教育家のやうに思はれるが、彼れは得體の

知れぬ人物である。併しながら、自惚の極めて強い人物なる事は誰にも分る。彼れの演説は、簡單で一時間と云ふ話だから、長ければ何時間掛かるか分つたものでない。議會の押問答は例外と見えて至つて簡單だが、而も奇警を弄する。如何なる問題にも容喙し、如何なる議案にも苦情をつけ、饒舌るだけは能く饒舌る。夫れに圖體の割合に目玉が大きいので、睨みが利く。八方睨みは疑問だが、六方睨みは利く。之が議場を睥睨するに、二割以上の得のある所以だ。醫者の本業よりも、政界の駆引が巧いと云ふ評判である。さて今後は何う發展するだらうか。(大正四、二、一〇)

第三十七議會劇の花形

▼霜早く日比谷劇場蓋明けり——是れ帝劇を謂ふに非ず、公園一つ隔てたる貴衆兩院を指すなり。而も兩院は娛樂の壇場に非ず、儼然たる立法の府なり。敢て之を劇場に比す、其の所以なくんば非ず。

▼帝國議會の神聖は、夙に世人の知る所。議員自身も亦、何ぞと云へば直ちに議會の神聖を喋々す。然れども「神聖」は掛額の文字に非ず。彼等の喋々するに依りて其の價値を増さず。議會の神聖は、其の威信を發揚するに由りて始めて保たる。無意義の喋々は、却て之を瀆すものなり。

▼神聖の語を聞かざる以前、議會は森として神聖の氣滿てり。威信従つて行はる。議員又持する所高く、其の言語を謹み、其の態度を正しうし、以て自らの品位を發揚するに努めたり。立法院の威嚴、茲に於てかたり。

▼貴族院は活氣なきも、肅として紊れざること、今なほ昨に異ならず。議長徳川家達の態度、言語、悠暢寛雅なるも、議場の神聖おのづから保たる。衆議院は然らず。議長長島田三郎大聲疾呼し、荐りに懲罰を課するも、議場の搔擾、混亂、名狀すべからざるものあり。

▼貴族院の靜肅は、公徳川の舉止、若くは議場整理の手腕のみに非ず。議員自ら其の一舉一動を慎み、一言一行を苟くもせざるにあり。彼等倘し節制なくんば、如何に貴

公子多しと雖も、其の神聖を確保すべからず。衆議院の紛擾は、島田の信望に乏しく、議場整理の能力に缺くる所あるは否む能はざるも、議員自らが黨派心に驅られ、餘りに賛否の野次振を無遠慮に發揮するに由る。

▼衆議院に『野次』を輸入せるは何人なるを知らずと雖も、近年此の野次振は露骨となり、單に『ノー』『ヒヤ』の二語に止まらず、或は冷評を浴せ、或は半疊を入れ、甚しきに至つては一齊に標札を叩き、足踏み鳴して、演説の妨害を試みるに至れり。野球の野次、國技館の聲援と雖も、斯の如く喧噪無秩序のものは非ず。而して彼等意氣揚々國民の選良面をして叫んで曰く、『斯の如きは議院の神聖を瀆し、議會の威信に關する大なり』と。

▼人を笑はするも程こそあれ、自ら車夫馬丁の體を學び、自ら騷擾を惹起し、自ら威信を失墜し、恬として耻ぢざるは、其の厚顏寧ろ曾我廼家の喜劇に優れり。素より喜劇以上の喜劇なれば、突發的の胸案に成り、定れる筋書によりて演ずるに非ざる也。然れども、政治の大活劇に至りては、豫め在野黨によりて其の筋書を書き卸さるるを

例とす。

▼貴衆兩院——殊に衆議院は、近時芝居の氣分漂へり。傍聴者の數時間前より詰め掛くるは、昔の芝居見物の女衆が曉かけて騒げるに似たり。彼等は演説を聴くに非ず、演説者を見んとするなり。而して演説者を見ること、役者を見るの氣分を以てす。

▼されば、傍聴席に在るもの、聲に耳を傾くるより、先づ顔を凝視せんとす。終りて更に、其の舉止風采の微細なる長所短所をも漏さざらんとす。背後のもの、我勝に伸び上り、轟くは、一に唯演説者の顔を見んが爲めなり。演説者も亦大向の氣受を氣遣ひ、往々脱線して、政府者を轢殺せんとすることなきに非ず。

▼帝國議會は、政治の舞臺なり。所謂政界の策士、國士、論客等が、其の辯舌手腕を試みる晴の場所なり。活動の壇場なり。不敬に渡らざる限り、言論は自由なり。團十郎張に宰相を一喝する位は何でもなき事なり。而して登場する者、立役あり、敵役あり、女形あり。議案を脚本として活動し、波瀾を激成す。

▼斯く觀察し來れば、議會も亦趣味あり。歌舞伎、又は國技館以上の見ものなり。政

治に興味を有するもの、國民の休戚を念とするもの、國家の前途を憂ふるもの、宜しく茲に臨みて帝國の選良を監視するを要す。政治は彼等議員の爲めの政治に非ず、國民の爲めの政治なり。官僚の利器に非ず、議員の玩具に非ず。彼等の専私に委して、開却する能はざるなり。

二

▼前議會は未曾有の紛擾裡に閉會を告げ、而も一日の出席停止に處せられたる懲罰事犯者三名ありき。今議會も亦其の紛擾の餘波を受け、開會勿々議長島田に食つて掛かるあり。議長に逆振を喫せられて懲罰事犯に問はるるあり。衆議院の風雲甚だ穩かならず。例の喜劇以上の喜劇は勿論、一大活劇の演せらるるや必せり。

▼活劇の立役は、今の所何と云うても犬養毅なり。彼れの行動或は非難なきにあらざるも、彼れが甚しく主義主張を曲げず、多年在野黨の領袖として渾身の力を發揮し、勇猛精進するの勢を多とせざるを得ず、其の人矮身瘦軀なるも、狼面にして眼に炯々たる底光あり。一たび論壇に立ち、彼れが滿腔の鬱勃を吐けば、舌鋒霜の如く心膽を

寒からしむるものあり。

▼其の技の拙なるもの、其の人物の小なるもの、舞臺に立てば舞臺面を狭うす。然るに彼れは、狭き舞臺面をなほ廣く見するの力量を有す。開口雲時、興湧き、油乗り來れば、快辯縱橫、論斷明確、時に皮肉を織り交せ、時に經綸の色彩を施し、飽くまで聽者を魅了せずんば止まずと雖も、意氣揚らざる時は、痛烈を極むる能はず。

▼白頭總裁原敬は在野の多數を擁するも、容易に論陣を進めず。灰色の城廓に據りて、旗色を明かにせず。後門に妥協の一路を存するを例とす。之が爲めに彼れは往々戰機を誤り、見憎き敗衄をなすことあり。景時の用意或は必要ならんも、一氣に倒壊せんと欲せば、神算成るの後、慕進すること義經の如くならざる可からず。

▼原は策の人たるに於て犬養に似たるも、其の策を進むるの方法は則ち異なれり。彼れは毎に政權を握るを本位とし、之が爲めに非立憲の非難を受くるも何のその、諸有手段を講じて憚らず。黨勢の緊張を圖る、或は斯の如くならざるを得ざるべしと雖も、是れ進歩せる政治家の取るべき良策に非ず。彼れの人気役者たるべくして、人氣役者

たり得ざる所以のもの、全く茲に存す。

▼彼れの人氣役者たり得ざる一因、なほ他にあり、彼れは新聞記者の操縦を解せざる、官僚的傲岸を持すると、群小を周圍に吸収して新人を疎外するが故なり。近時漸く官僚的傲岸を脱し、操觚者に接近するの風なきに非ざるも、伯大隈の友人の如く談笑する、犬養の襟懷を披くの状態あるに比すれば、未だ到らざること遠しと云はざるを得ず。

▼法相尾崎行雄は好んで新聞記者を引見し、臨機意見を發表するを吝まらず。其の爲め口禍を買ふことなきに非ざるも、政策の祕密を尊び、何事に對しても口を緘して語らざる者に比すれば、立憲大臣の氣分は即ち在り。今や敵役として舞臺に立つも、何程か観客の同情を惹き、新聞眼の興味は其の身邊を去らず。

▼尾崎の變説改論は、民軍唯一の攻撃の標的なり。彼れが桂内閣を痛撃して、「玉座を胸壁となし、聖旨を砲丸となせり」と論詰せし當時を回想すれば、今昔の感なき能ず。彼れ壇上に立ち現れて、巧に攻撃の矢を防ぐと雖も、云ふ所多く詭辯に失す。往年の

氣魄、往年の生彩、今何處にかある。

▼藏相武富時敏、又然り。曾て主張せる廢減税の主張を一擲し、非募債主義に朱書を加へ、所謂臨機應變の財政策に血路を開きつつあり。曾て議政壇上の花形たる、其の端正の態度、紅木屋張の辯舌、纒かに其の面影を存すと雖も、意氣甚だ揚らず。大鵬の志漸く銷沈して燕雀の笑殺する所となる。彼れが贏ち得たる藏相の矜りは、其の微笑は、霜枯の紅山茶花よりも尙淋しきに非ずや。

三

▼現下論陣を進め、鬪將を以て目さるるもの、元田肇あり。關直查あり。關に次ぐの猛者に、高木益太郎、鈴木梅四郎等あり。政友會の鬪士に、小川平吉、齋藤珪次。小久保喜七、松田源治、三土忠造等あり。委員會戰に、本會議戰に、必死の活動をなすを見る。

▼元田は攻撃に長せず、防戰に敏なりと稱さると雖も、一種の奇襲術を解す。彼れの音量、敵を壓するに足らざるも、其の慨するが如く、訴ふるが如き熱辯は、惻々人を

動すもの無きに非ず。關は論理明晰、含蓄に乏しと雖も、多少の辛辣はあり。年來攻撃を是れ事とするも、未だ強弩の内甲を貫くが如き痛快味を發揮せず。

▼高木は馭辯、能辯、奇辯怪舌を弄するに於て、魚河岸の最良と、質屋の信頼と、民衆の喝采とを博す。前議會以來、殊にメートルを上げ、選舉干渉を剔抉して、人權擁護を絶叫す。「正宗燦一本、辨當一個の選舉違犯を取締るに辛嚴にして、巨頭大浦を逸するは何ぞや」と敦圀く所、盛んに大向を唸らせずんば非ず。

▼鈴木は撲實の裡に奇警を藏し、經綸家張の辯舌を以て、政府に肉迫す。小川の對支外交の失敗を痛撃する。小久保の志士の慷慨を發揮し、嘎れたる音聲を以て皮肉を行る所、二種二様の特色はあり。齋藤の突撃に至りては、怪辯辣手並び進み、敵壘を粉塵せずんば已まざるの概あり。

▼松田は功名心に富み、雄を法博花井と競はんとす。其の力量未だ足らずと雖も、花井の政府援護に傾き、其の能辯を節約する今日、彼れの如きも亦憲法論を提げて、政府の非立憲を痛罵するを得ん。三士は教育界の出なるも、策士的手腕と論客的辯舌と

を有す。未だ大に用ゐられざるも、將來或は發達の見込あり。

▼官界の出身に、床次竹二郎、杉山四五郎あり。杉山は釋氣を脱せざるも、闘士的元氣あり。床次は夫れ程の大器に非ざるも、黨人を率ゐんとするの用意はあり。時に吏僚的常識に囚はれ、論戰機鋒辛辣を缺くの憾あるも、粗放の黨人に望む能はざるの綿密を有す。

▼「能」と云ひ、「豪」と云ふも、是れ人物なり。固より一長一短は免れず。田川大吉郎の民間にあるや、器用に文を草し、又識見の光を矜れりと雖も、法參たるに至りて多少の束縛を受け、縦横の論議を聽くを得ず。關和知、年壯氣鋭を以て稱されたるも、防禦の塹壕に籠りて、又往年の武者振を顯さず。

▼防將片岡直温、久しく關西の財界に雄視するも、官僚系の策士なり。今や其の黄金時代に遭逢して、得意滿面の體なり。民軍、彼れを以て定九郎視するも、最早椽下の瘦鼠に非ず。論難駁撃の辯舌、侮り難きものあり。小河源一、野猪の如く突進し來るも、固より舞臺面の賑やかしに過ぎず。其の技巧に何等かの價値を附せんとするは、

彼れが政界の年功に對する幻影のみ。

四

▼新進人物にして、馬鹿にメートルを上げ來れるもの、長島隆二、林毅陸、廣岡宇一郎、森田小六郎等あり。官將高木正年の時勢を遠觀せるが如き口吻、政界の暗黒面を透視するが如き態度を以て、論戰に火花を散すと、好個の對照ならずんば非ず。

▼長島は猛烈に現内閣に殺倒し、之を斃さずんば已まずとする者なり。彼れの論調、獨斷偏見の嫌なきに非ざるも、青年の「熱」は即ち在り。岳父の祕庫と元老の寶藏より覺り來れる材料を以て、同志會を罵り政府者の急所を突く手練の早業は、彼れが今日の名聲を贏ち得たる所以。廣岡は未だ顯はれざるも、其の論鋒の鋭利なる、他の意表外に出でて奇功を奏する、聊か議會の珍とするに足る。

▼林は慶應義塾教授、何程か其の印象の手傳ひてか、辯舌に講義臭あり、論調に學者の冗長あるやに思はる。然れども、彼れは所謂黨臭に染まず、事情に囚はれず、自家の主張に忠なる、毅然たる態度は稱せざるを得ず。森田は副參政官を爭ふ程の人物な

れば、權勢に動かされざるに非ざるも、徒らに票決機械に甘んせざるは、甘んずるに比すれば、大に勝れり。

▼法博大場茂馬、小林丑三郎は、其の專攻せる智識を以て、議政壇に異彩を放つ。大場の刑事政策を批判する、小林の財政政策を攻撃する、冗長に失して劃切に缺くる所あるも、政府者に對する痛棒たるを失はず。議員の居睡を以て、彼等の演説の價値を定むるの標準となすは、少しく酷なり。

▼貴族院に於ける政友派に、毒を以て毒を制するの筆法を用ゐるもの、法博水野鍊太郎あり。橋本圭三郎あり。彼等は役人時代に得たる觀察と經驗と手腕とを基礎とし、現内閣の施設に對して手痛き質問を試み、或は其の積弊を把羅剔抉せずんば已まず。

▼田中源太郎は多納議員中、稀に見る論客なり。齡漸く傾き、法博桑田熊藏の學殖と將來とを有せざるも、彼れが如くに沈睡せず、頻りに質問の矢を連發す。宛然齋藤別當の白鬚を染めて、戰陣に臨むの雄姿を髣髴す。其の馬力の強き、全く愛妾の感化なりと云ふ者あるも、深く之を詮索するに及ばず。

▼近時、上院の甘睡を破れるは、男目賀田種太郎、澤柳政太郎、仲小路廉、鎌田榮吉等の不平兒ならずんば、霸氣満々たるの人物なり。然れども、彼等を以て上院の神聖を潰すものとなす可からず。何となれば彼等は議場の騷擾を惹起するに非ず、其の沈滞せる空氣の刷新を期するにあればなり。

▼男目賀田は、財政に對して一雙眼を有す。往々客氣に驅られて諸種の問題に容喙し、或は脱線することなきに非ずと雖も、論鋒犀利、匕首を肺腑に貫くの概あり。澤柳は社會風教に立脚し、之を以て凡ての問題を論議するの傾向あるも、奮闘力戦目ざましきものあり。論旨透徹、其の演説を聴く、恰も彼れの文に接するに異ならず。

▼仲小路は、剃刀の銳利と、正宗の切れ味とを兼ね、細大共に之を料らんとす。一種の才辯なるも、多少の官臭を帯び、人に依りては毛嫌すと雖も、空理空論に流れず、實際に接觸し事實を離れざる所に、彼れが觀察の周到と識見の光輝はあり。蓋し官僚最後の策士たるに於て、子平田に亞ぐやも知るべからず。

▼鎌田は理論家、舌鋒一たび動けば、其の觸るる所の總てを理盡し論盡せずんば承知せず。澤柳と共に、論壇の双壁なり。其他何種の問題にも出娑婆る男高木兼寛あり。現内閣の財政を攻撃して剩さざる男高橋是清あり。奇論縦横、鐵騎突出する底の男後藤新平あり。

▼華胄議員中、異彩あるもの、理窟屋の子前田利定あり。明敏の男吉川重吉あり。奇警の伯奥平昌恭あり。論策の伯林博太郎あり。既成品なるも男久保田讓の雄姿、又逸すべからず。如上の諸士、各其の能を發揮し、其の才を活用するに於ては、上院も亦下院に劣らざるの壯觀を呈するや必せり。(大正四、一二、一三)

貴族院の四議長

一

曩に山本内閣の海軍擴張費に刪減を加へ、以て内閣不信任の意志を表示せると、今次減債基金問題を提げて大隈内閣に肉迫し、公山縣の居中調停に依りて緩かに妥協に

結局せるとに由りて、政治の中心が貴族院に移動せんとするを説く者ありと雖も、未だ容易に首肯する能はず。然れども、從來氣樂院と稱され、政争に超然たる態度を探りしが、近年頻りに政府に反噬し、若くは反政府黨と呼應して氣焰を揚ぐるに至れるは、聊か注目に値する現象なりとす。

此の新なる政界の興味に活きたる貴族院は、議會開設以來議長の更任を見ること四人、衆議院の一ダースに比すれば、其の三分の一に過ぎず。蓋し一は總選舉毎に更任するも、一は七個年毎に勅任さるるの例なればなり。而して、其の勅任されたる四人を誰とかなす。曰く伯伊藤博文、曰く侯蜂須賀茂韶、曰く公近衛篤磨、曰く公徳川家達、即ち是れ也。

就中、其の在任の長きは現議長徳川にして、最も短きは伊藤なり。彼れは一期間の約を以て最初の議長に就任し、第一議會閉會後幾許もなく之を辭せり。蜂須賀は第九議會後、松方内閣の文相に就任せるが故に辭職し。近衛は第十八議會後、病を以て逝き。爾後徳川の新任、再任を見たり。

二

伊藤一人を除く外、皆公又は侯なり。伊藤も後年侯となり、公となれるも、當時は伯なり。而して、侯蜂須賀は舊徳島藩主、公近衛は舊公卿、公徳川は十六代將軍にして、何れも門地高きも、伯伊藤は舊山口藩士なり。而も最初の議長たり得たる所以のもの、彼れが門地に非ずして、手腕實力にあり。帝國憲法の草案者たり、最初の内閣總理大臣たりしに由れり。

人或は彼れの議長たるを以て、彼れが「最初」に淫する病なりと云ふも、表面の事實は然らず。彼れは始め議長の任を避けたりと雖も、同儕の勸誘黙止し難く、一個年間就職の條件を以て之を諾せるなり。議會草創の時代に於て彼れを藉いて他に適任者なきは何人も認めたる所なるべく、彼れも亦議會運用の型を示さんとの抱負ありしは推すに難からず。即ち彼れは、此の型を示さんが爲めに最初の議長となり、議員等は又其の議長振を見んが爲めに彼れを迎へたるなり。然れども、彼れは會期中途より病と稱して登院せず、其の手腕を揮ふの日甚た少かりき。唯一事の特筆すべきは、彼れが

會期満了の日に於て憲法の歴史を演述せること是れなり。

衆議院に於ては、議長簡單に第一議會の經過成績を述べて各員の勞を謝せるのみなるに拘らず、貴族院に於ては特に彼れが憲法の歴史を演述せるは何故ぞ。言ふ迄もなく、彼れが高慢と稗氣との致す所なり。彼れは久しく缺席せるも、憲法に對して長廣告を振はでは氣が濟まず、扱こそ會期満了の日に突如登院して、此の演説を試みたるなれ。而も議事を終へて退散せる各員を再び著席せしめ、憲法の歴史を演述すると云ふに至つては、寧ろ一場の喜劇なり。伊藤の如何に憲法制定に與れるを誇り、得意の鼻をうごめかしつつありしかは、此の一事、以て證するに足る。

三

伊藤に如上の高慢、如上の稗氣ありしと雖も、彼れは常に堂々たる政治家の態度を以て、高く自ら持せり。彼れが眼底常に英雄を藏し、英雄を理想し、英雄的政治家を氣取りたりと雖も、彼れは所謂豪傑に非ず。より多く文人の嫺雅と、詩人の情致とを有せり。一面頗る豪放、無頓着なるも、他面細心周密往々清濁を論じて、却て御し易

き者を近づくるの失あり。彼れが立法に長じ、讀書に耽るは、英雄的政治家に非ずして、天才的政治家たるの特質あるに由らざる乎。

彼れは雄辯家なり。音吐朗徹、聲調快適、想泉滾々として盡きざるの概あり。舌鋒秋霜の氣なしと雖、温言麗辭、聽者を魅せずんば止まず。彼れが時に振り廻す所の「高慢」も、此の情致あるが故に、多く反感を抱かしめざるなり。加之其の風丰何となく野趣を帯び、懐くべくして怖る可きを見ず。野趣を帯ぶと雖も、野卑に失せず。自ら威望の備はるものありて莊重の深味を寓す。眼は象の如く鈍重の裡に爛々たる光の穎出するあり。顔面の大黒子、疎鬆たる長髯、俗なるが如くして、俊秀の氣眉宇の間に露はる。懸崖壁立の偉觀なしと雖も、春水溶々の優雅なきに非ず。其の喧嘩腰とならざる所、法理思想の發達せる頭腦、巧に議事を行るの手腕、素より議長の適任者なるも、彼れは到底此の無爲の地位——少くとも然か見ゆる——に満足すること能はざりしなり。彼れの同僚の勸誘黙止し難しとなし、最初の議長に就任せるは、其の最初の榮冠に値れたるなり。處女を擁するに依りて、憲法制定者が放恣なる欲求を滿せるなり。

四

政治家伊藤を去つて、侯蜂須賀に接すれば、杉木立の中を出でて桑園に對するの感なき能はず。平凡と大俗とは、時に非凡以上、超俗以上の評價を附せしむる事なきに非ざるも、それは例外の一二のみ。順境を潤歩し來れる、華胄の人材を量るの度目となすべからず。侯蜂須賀は、普通の意味に於て平凡多奇なき人物なり。

彼れの豊頬薄鬚、温乎たる風貌は、何等の霸氣を象徴せず。唯其の異とする所は、近眼鏡の底に横はれる二個の眼光のみ。議長席に納まりたる所、洵に威ありて猛からず、和ありて角ならず、舉止沈着を失はずと雖も、活氣に缺くる所あり。少しく熱したる彈劾案議場の如き、緊急動議突發の際の如き、往々未熟の爲に間諛付きたる事あるも、衆議院の如き喧騒を敢てする者なきが故に、大なる失策を演ぜざるを得たり。有能の者、時に議場の反感を挑發することあり。彼れは無爲無能なりしが故に、却て無難なるを得たりと云ふも、當時彼れは貴族院に多少の勢力あり。好んで彼れを窮地に陥るるの惡戯を演ずる者なきにも由れり。彼れは明治の初年議定となり、刑法事

務局補を兼ねたるも、これ門閥の勢力に依るものにて、彼れが法理に明かなるを以てに非ず。後、麝香間祇候、關稅局長、參事院議員、特命全權公使、元老院議員、東京府知事等に歴任せるも、手腕の以て稱すべきものあるに非ざるなり。縱令法理に通せず、手腕の稱すべきなしと雖も、其の茲に至れるは、尋常馬鹿殿様の亞流に非ず、何程か頭地を抜く所あるは明かなり。而して議長の椅子に凭るを得たるは、是等の經歷と多少の勢力とに由ること勿論なり。目するに優良の議長を以てすべからざるも、必ずしも最惡の議長には非ず。

五

公近衛は英氣颯爽たり。蜂須賀の輪廓不鮮明なるに反し、近衛は輪廓極めて鮮明なり。試みに其の風采に就て見るも、濃眉、明眸、隆準、美鬚、豐顙、何れか重厚沈毅果斷を説明するものに非ざる。又、何れか男性的氣象を象徴するものに非ざる。彼れは斯く貴族的風采と、統帥的器局とを有せり。而して其の自任し、自信する所高く、主義政見を守ること固く、其の言動往々矯激に失するなきにあらずと雖も、本來謹慎

に。して。責任を是れ重んずるの人たり。

彼れは獨逸に學ぶこと多年、憲政の曙光の仄めき渡る頃歸朝せり。第一議會以來、多く政府の反對に立ち、藩閥を攻撃して餘さざりしが故に、在野黨の推重する所となれり。然れども、彼れの反對し、攻撃するは、所謂政權爭奪の爲に非ず、衷心より藩閥を憎惡し、其の情弊を打破するに非ずんば、憲政の實を擧ぐることを能はずと信じたるなり。故に彼れは藩閥の非行を痛撃し、政界の空氣を刷新せんことを希望せり。然れども、彼れは一方に於て衆議院の紛争を喜ばず、其の不眞面目なる言動を非難せり。第五議會の解散するや、彼れは同志と共に首相伊藤に忠告書を送りて其の反省を求めたるが如き。第十七議會の時、地租増徴案を以て政府と衝突し、解散の不幸を見んことを憂ひて、調停の任に當れるが如き。是れ皆、彼れが忠忱至誠の情に外ならず。然れども、彼れの爲す所を冷靜に觀察すれば、忠忱至誠の極、憲政の本義と相容れざる行動なきに非ず。地租増徴の調停遂に成らざりしと雖も、妥協に局を結ばんとせるが如きは、決して政界の刷新を期する所以にあらざりしなり。

六

公近衛の議長となれるは、第十議會の際にあるも、議長の職權を執行せるは、實に第一議會に在り。當時議長は伊藤にして、副議長は伯東久世なりしも、兩人共に疾の故を以て事を觀ること能はず、假議長を指名せざる可からざるや、其の選に當れるは彼れなり。時に彼れは年齒僅かに三十餘歳、知名の星群に於ける、無名の糠星の觀あり。指目する人すら無かりしに、伊藤の爛眼早くも彼れを洞視し、之を推擧するに及んで、滿場の視線悉く驚異の輝きを發せり。中には冷笑し、輕侮する者なきに非ざりしも、彼れは何の遲疑する所なく、悠然として議長の椅子に就けり。而して其の議事を進むるの手腕を見るに至りて、滿場は再び其の驚異を新にせり。斯くて冷笑は賞讃となり、輕侮は敬服となり、茲に始めて其の異彩を認めらるるに至れり。

後數年、彼れの議長となるや、彼れの技倆は假議長當時の豫想に違はざりき。彼れが謹嚴なる態度、彼れが公平無偏の處置、快刀斷麻の手腕は、愈よ練磨と圓熟とを加ふるに従ひて、其の潤澤ある生彩を發揮せり。然れども、完きは何人にも求むべから

す。政敵は彼れを以て壓制議長なりと非難し、政友は彼れを以て餘りに公平に過ぐと不満なりしも、其の善く問題を理解し、議場を整理する能力の卓抜なるに至りては誰か之を稱せざらんや。

彼れは主義の人なり。一個の政見を把持し、昂然として藩閥に降らず。敢然として其の壘に突貫せり。既に闘士の元氣を持し、統帥的器局を有せるを以て、其の傘下に集まる者多かりしも、敵視する者も亦尠からず。彼れが議長として、比較的政治的色彩を放ち、討論を指導せるは、之が爲めなり。若し彼れにして無爲の公爵たり、灰色の貴公子なりせば、唯一個の世襲議員に過ぎざりしなり。

七

公徳川は人格の人なり。聰明にして、常に腹中に何等か考慮しつゝあるが如く、容易に其の蘊蓄を外に發表せざる人なり。公近衛の好んで政治を談じ、政界に飛躍せるとは、全然其の趣を異にし、宛然開日月を樂しむ樂隱居の風あり。未だ曾て政治を談せず、政界に奔走せず、黙々として平凡の軌道を歩みつゝあり。是れ彼れが政治に野

心なきの致す所ならんも、或は口禍を買ひ、人格を傷くるを怖るゝの慎重の考慮より出づるに非ざる乎。將又、政治上に對して何等語るべき意見を有せざるに由る乎。

彼れは藩籍奉還後静岡縣知事となり、後英國に遊學すること五年、歸來縣香間祇候となりたるのみ、官途に就かず。努めて十六代將軍の威嚴を墮さじと、慎重の態度を保持するに似たり。彼れの議長たる、其の手腕と云はんよりは、寧ろ其の人格、其の徳望にあり。

既に彼れは政界に野心を有せず、政權に憧憬せざるが故に、其の勢力を扶植するを敢てせず。忠實に議長の職權を執行するの他、何等の策略を加味せざるなり。されば公近衛の如く硬派ともならず、軟派ともならず、何の政派、何の團體にも關係せず、徳川は徳川にて立ちつつあり。其の徳川の徳川にて立つ所に、徳川一門の勢力あり。其の勢力は、隱密に貴族院に加はりつゝありと云ふも、そは伯子男議員の選舉形勢より見たる推論のみ。貴族院全體より一瞥すれば、徳川一門の勢力は夫れ程大なるものに非ず。先年豫算會議の際、侯徳川頼倫が海軍擴張に賛成演説を試みたるも、其の大

勢を動すに足らざりき。唯之に依りて、公徳川の何程か政友會に近きを語るに過ぎず。彼れの議長振は、譬へば良工の鑿の切れずと見えて切味善きが如く、柔かなる輕快を以て事に當れり。議場を威壓せず、信壓せんとする所に、彼れの強硬なる態度を見する事あるも、偶ま議場を整理せんとする時の手段に外ならず。彼れは飽まで重厚の態度、公平無偏の處置を執り、言葉少なに事を運ぶを常とす。かの饒舌、屁理窟、權柄押は、決して議場を靜肅ならしむるの途に非ず。彼れは此の呼吸を熟知し、運用の妙を得たるは、之を多とせざるを得ず。

之を要するに、伊藤は單に型を示すに止まり、蜂須賀は之を受けて、採決の器械的技能を發揮せるのみ。獨り近衛に至りては生彩煥發、政治的智識を涵養し、討論を指導したるの勢は没すべからず。議長として、眞に意義ある活動を成せるは斯の人なり。徳川は多年の鍊磨に成功し、先づ良議長たるを失はず。(大正五、二、一七)

歴代衆議院議長の議長振

一 十二議長の顔貌

政界は弾力を失つた。政客の心は彼岸の花桶のやうに干透きた。神經衰弱の顔と、倦怠の欠伸とが、議會の何處にも見られる。強ひて夫れを破らうとして、現内閣彈劾或は不信任と云つたやうな爆彈を投ずるが、何等の反響はない。混濁な空氣は依然として混濁の儘に、不快な眠を食つてゐる。其處に弾力のない壓されが聞かれる。其處に熱病患者の徒らな昂奮がある。あると云へば、唯夫れだけであつて、緊張した氣分などは一瞬時も見られないのだ。其の裡に在つて、昂奮した議長と、昂奮した議員とが銘々に何かやつて居る。統一の破れた、節制の保たれない、放恣なる自由の中に勝手な熱を吹いて居る。今議會は有史以來の墮落した議會で、現議長は未曾有の劣悪な議長だと稱されてゐる。墮落か、劣悪か、吾人は之を知らず、唯當面の事實は蜂の巢を突ついた喧騒と、夫れを收拾するの苦悶との不體裁を遺憾なく語つてゐる。

有史以來と云つても、我が憲政史は僅々三十年に過ぎぬ。憲法制定は明治二十二年二月十一日、即ち建國二千五百四十九年の紀元節である。而して第一回の總選舉は翌

年七月一日に行はれ、第一期帝國議會は其の年十一月二十五日を以て東京に召集された。爾後總選舉の行はること第十二回に及び、議會の開かるること第三十七回に及んだ。今議會は云ふ迄もなく、第三十七議會である。

總選舉も十二回行はれたが、議長も亦十二人更迭した。尤も總選舉毎に議長の選舉があるのだから、回数だけの人數であるのは別に不思議はないが、再選された人々もあるのだから、もつと少くも可い筈だが、除名されたとか、華族に列せられた爲めに失格したとか、辭職したとか、色んな事故があつて改選を見たので、總選舉の回数と同じく十二と云ふ偶合は面白い。十二支で云へば最う一廻り廻つたので、現議長の島田三郎は其の最終の議長だ。之から新規壽き直しになるのだから、大に箱が緩んで、倦怠氣味になつて、滅茶苦茶になるのも無理はない。或は然うした運命に囚はれてるのかも知れぬ。最終の『亥』に當るので、猪突猛進するのだとすれば、彼れの議長振も亦來者の参考とするに足るであらう。

史を溯つて第一期から現議長まで順に數へれば、中島信行、星亨、楠本正隆、鳩山

和夫、片岡健吉、河野廣中、松田正久、杉田定一、長谷場純孝、大岡育造、奥繁三郎、夫れから今の島田と云ふ顔觸になる。就中在任年月の長かつたのは片岡、長谷場、松田で、短命なのは河野であつた。星は除名され、楠本は男爵となつた爲めに其椅子を去り、長谷場は文相、大岡も亦文相に就任した爲めに中途辭職した。が、長谷場は中に大岡を挟んで再び議長になつた。此の更迭を漫然觀過すれば何でも無いが、仔細に觀察する時は、議會の大勢——政黨の勢力と非常の關係を持つてゐるのだ。だから議長顔觸を見ただけで、當時各政黨の勢力消長の如何を知ることが出来る。併し本篇は夫れを知るの目的でないから、暫く其の方面の研究を略して、其の議長振を拜見する事にしよう。

二 最初の衆議院議長

何様最初の議長だ。——如何に理窟を抜きにしても、中島信行を指して斯う云はねばならぬ。何様最初の議長であるから、典故慣例など云ふ七面倒臭いものに囚はれないが、範を後世に貽すのだから、其の言動は苟もする事が出来ぬ。議長の創造者——

若し然らう云ふことが云へるなら、彼れは議長型を作るべき使命を帯びて現はれた人だ。善かれ悪しかれ議長型の創造者だ。殊に當時の代議士は人物揃で、參政権を得た勝利の輝きに精神が緊張した。一人も政治を餘興や遊戯にやる者の無いと云ふ程に、眞面目な態度を持つて居た。彼等は少くとも人民の選良だと云ふ抱負、確信、氣節を持つて居た。此の輩に推されて議長になつたのだから、彼れの任は頗る重いのである。彼れも亦其の重任を覺悟して其の椅子に凭つたやうに、議長の沈着と、公平無私とを以て事を行らうとした。其の議長振に、幾多の不熱があつたにしても、其の精神に於て恕さるべきものである。

衆議院議長の選舉！議場の心臓は皆一つに躍つた。召集の當日である。輪長曾禰荒助は假に議長席に着いた。而して行はれた選舉の、三人の候補者中から勅任された筆頭の一人は中島であつた。彼れの議場に於て發した最初の一言は、就任の挨拶である。其の聲が如何にも低く、喧噪の議場ならば徹底すまいと思はれる程に、其の音量が乏しかつた。彼れは坂本龍馬の海援隊の參謀となり、次で伯板垣等と自由黨を組織した

人物で、王事にも政治にも奔走したが、喉頭の喇叭を奏する雄辯家では無かつた。温厚の表皮で霸氣を包み、而も凜とした所は、却て衆望の上に立つ議長向きの性格と見え。最初の全院委員長の選舉は、彼れが議長の下に行はれた。彼れは議長席に在つて初め其の投票權を行はなかつたが、將に開票せんとするに臨んで此の權利を行使した態度は、洵に鮮かなものであつた。爾後議長は餘り此の權利を行使しないやうだが、議長に此の權利あるは、憲法第四十七條の場合のみで無いことを明かにした。此處までは無難であつたが、第一投票の結果過半数を得た者が無いので、更に最多数の投票を得た二名に就て決選投票を行つた。夫れでも過半数を得た者が無いと來た。處で衆議院規則の解釋に就て紛議が生じ、其の解釋の可否を採決する時分には、議場は可なり紊れて居た。夫れに其の採決の題目が議員に理解が出来なかつたり、採決の方法が拙かつたりしたので、まるで麻のやうに亂れた。が、振鈴のお蔭で喧噪が収まり、規則に修正を加へて、やつと其の選舉を結了することが出來た。何程議事に熱心でも、勝手の分らぬ議員が多いので、ともすれば喧噪に陥る。夫れを制止する議長の骨折は、

並大抵の者で無かつた。で、そんな場合には、彼れは屹度振鈴を用いた。振鈴は、彼れの音量を補ふ最善の方法であつた。振鈴議長の名、是に於てか有りと云ひたいのである。

一紛擾が去つて第二の紛擾が来た。外相青木が答辯の爲めに縷々數萬言を費したが、毫も要領を得ないので質問より質問に移り、其の質問が何時終るとも見えなかつたので、外相は鬨を排して場外に去つた。すると當局大臣不親切の聲が四隅に起り、怒號喧囂を極めた。再び外相の出席を求めて答辯させることの動議を可決して鎮靜に歸したが、翌日外相は質問者の要求に應ずることが出来ぬと竹筧返しの覆牒を寄越したものだから、議場は再び紛擾を新にしたが、結局空騒ぎに終つた。次が第二議會に於ける海相樺山の演説である。海相が薩閣の爲めに氣を吐き、頻りに海軍の功績を自慢したので、議場が鼎のやうに沸き返り、叱る聲、罵る聲、笑ふ聲が四方に起つて、議長中島は殆んど其の整理に苦んだ。然るに海相は平氣で演説を續け、傍若無人にも薩長政府の讚美を試みたので、議會の反感は愈々高潮され、憤懣怒罵の聲が益々盛んにな

つた。さうして議場は秒一秒と不穩の狀を呈するので、彼れは海相の背後より演説制止の命を與へたが、海相は聞かぬ振をして尙演説を續ける。で、滿場の憤怒は一時に勃發し、「議場の神聖を蔑視する大臣、議長の命令を聽かぬ大臣は場外に放逐せよ」と云ふ聲が荒浪のやうに押寄せ、中には演壇を目掛けて駈け上る者もあつた。彼れは頻りに振鈴を打鳴した。海相は漸く悟つたかの如く壇を下つたので、議場は風の吹き去つた後の靜肅に歸つたが、海相の不法無禮を詰り、其の妄言に酬ゆる演説は容易に止まなかつた。當時の紛擾は大抵こんな風に黨人對官僚の論争で、今日より見れば議場整理は樂であつたが、彼れの不慣れと、議員の不慣れと、政府者の傲慢とは何時も騒ぎを大きくした。其の爲めに、彼れを議長の不適才と見るのは、聊か酷であらう。

三 剛愎議長か妖星か

妖星現はる！ 政界に妖星現はる!! パリストル星亨が第二回の總選舉に選ばれて議會に送られた時、誰云ふとなく斯う云ふ聲が、蘆の葉の戦慄を帯びて夫れから夫れへと傳はつた。此の時の總選舉は解散後の夫れで、激烈なる選舉干渉が行はれた。而

も彼れは八名程の負傷者を出した激戦地の栃木縣より選出され、民軍の中堅たる自由黨に際然たる大勢力を擁して居た。妖星現はるの恐怖は獨り吏黨の恐怖のみでなく、政界全體の恐怖のやうであつた。

にも拘らず、彼れは推されて議長となつた。實際は、『にも拘らず』でなく、其の異彩を認められたか、其の偉大を識られたかに依つて、議長に推されたと信すべき理由もある。が、兎に角彼れは振鈴議長の後を承けて議長の椅子を占めた。さうして傲然と議長席に據つて、炯然と三百の頭腦を睥睨した。眉間に立皺を寄せた無髯の肥大漢が、近眼鏡の底から鋭い眼を輝かす時は、議場は隼に狙はれた雀の群のやうにも見えだ。何しろどつしり腰を下せば、挺でも動きさうで無かつた。其處に彼れの剛愎と、大膽なる沈着とを認めることが出来る。夫れに彼れの聲は、巨鐘を打鳴したやうな音量と餘韻を持つて居た。腹の中では始終他を冷笑してゐるやうだが、案外に親味があつて、大なる魔力を備へて居た。彼れの人から好かれもし、又憎まれもした點は此處にあつた。然らば、彼れの議長振は如何。果して此の魔力を發揮し、議員を魅了し得た

であらうか。

彼れは悪く云へば獨斷的であつたが、才に任せて手腕を試み、手腕の働くに任せて議案を處理すると云つた風で、片付けるものは、片ッ端から颯々と片付けて了ふ。其の手續が、如何にも小氣味よく思はれた。けれども、彼れの意見が何でも行はれたと云ふ譯でない。第三議會に、追加豫算案で兩院の衝突した時、某議員が一動議を起したので、之を審査する爲めに全院委員會を開かうとした。其の時彼れは、會の範圍を決定すべく三個の討論條件を掲げて衆議に諮うたが、議院は夫れを採用しないで、直ちに會議に附された事もあつた。又彼れは專斷で政府の要求を容れ、議事日程を變更し、夫れを議場に宣告すると、議員交も起つて彼れを非難し、果は大騒擾を惹起した事もあつた。が、彼れは飽まで落着き拂つて、議長の處置の當否を議場に問はうと云ふので起立を命じた。議員は何が何やら解らず騒いでゐる際に、忽ち「起立多數」と宣言した。と、此の表決に異議を唱へる者があつたので、指名點呼と云ふ事になつた。處が何の指名點呼かと詰る者、違法の點呼に應ずる事ができぬと怒鳴る者、拳を以て

卓を打つ者、靴で以て床を鳴す者、喧々囂々、議場の神聖も何もあつたものでない。彼れは遂に尾崎・行雄・外四名に退場を命じ、其の命を用ゐざる者は守衛長に掴み出させて、點呼を強行した、此の喜劇的表決の下に、議長は議事日程を変更するの權能がある事となり、彼れの言分が通つた。『行らせれば行るたち』の一語は、此の際彼れを評するに最も適當な評語であつた。

然るに彼れは剛復の爲めに怨を買ひ、第五議會に於て、非自由黨六派の聯合軍に攻め立てられ、院外に放逐さるるに至つた。事の起因は、彼れが取引所問題に關して暮夜密かに政商と會見したのは不可いと云ふにある。温厚の議長ならば、辭職位で事濟になつたであらうが、其處が利かぬ氣の議長であるから溜らない。開會の劈頭、議長不信任問題の動議が起つた。彼れは『内に顧みて疚しい所がないから、問題の決如何に關せず之を守るの義務はないが、事一身に關する事だから徳義上姑く議長席を副議長に譲らう』と横柄に言ひ放つて、其の席を退いた。時の副議長は楠本正隆である。彼れは議長席に着き、會議の結果、議長自決の議を可決した。が、星は院議に應せず、

再び現はれて議長席に着き、『先刻陳べた通り内に顧みて疚しい所が無いのだから、本件の決議があるけれども、之に従ふことが出来ぬ。で、此の問題は爰に終結したのだ。之から日程の議事に入らう』と、平氣の平左だ。議員は呆氣に取られた。そこで一動議が起り、議長に熟考の時間を與へる事となつて、其の日の會議を閉じた。翌日も星は平然として議長席に着いた。又緊要動議が起つて休會する事となつた。其の翌日も亦、彼れは平氣でやつて來た。遂に議長不信任の上奏案が提出された。將に其の議事に入らんとする時、彼れは『事一身に關するから、徳義上姑く此の席を避けよう』と驟然圖を排して去つた。楠本が代つて議長席に着いた。甲論乙駁の末、多數で本案は通過したが、彼れは平氣で復席し、『先日の議長不信任の決議は非立憲の動作で、帝國憲法史上に惡例を貽すものと認めるから、予は如何なる決議を蒙るも、斷然辭職せざる決心であつた。が、予の進退の事を以て天關に訴へ、宸襟を惱まし奉るに至つては恐懼に堪へない。予は數日間此の席を副議長に譲つて、自ら謹慎しよう』と宣言したが、其後彼れは出席しなかつた。然るに上奏案に對しては、『更に院議を畫せ』との思

召あり。副議長は院議を定めて、「恐懼の至に堪へず」と勅答するの餘儀なきに至り、議長不信任決議の目的を達することが出来なかつた。處で今度は、星が先日の議場で「之を守る責任は無い」と云つた言葉尻を捉へて、懲罰委員に附するの動議を可決し、審査の結果、彼れをして議場に謝辭を述べさせる事にしたが、秘密會議の末一週間の出席停止と云ふ嚴罰を課する事となつた。其の期日が満了すると、彼れは又平氣で議長席に着いた。二三の議事を進めた後、又もや「本日議長席に就いて其の職務を行ふのは、院議を侮蔑し、其の體面を汚すものだから、懲罰委員に附せんことを要求する」と云ふ緊急動議が起つた。けれども今回は、席を副議長に譲らず、傲然として議場を睥睨した。如何程剛愎でも此の不意打には多少慌てたと見えて、「議長出席は果して懲罰事犯なるや否やを先決問題として討議しよう」と云つた。其の違法を難詰する聲は四方に起つた。理が非でも彼れは之を押通さうとしたが、一人も可とする者が無いので遂に屈して、悄然として席を去つた。而して彼れは、院議に依つて除名を執行され、院外に放逐されて了つた。併し臨時總選舉の結果、再び議會に送られ、其の猛威

を揮つたのは人の知る所である。

四 楠本・鳩山・片岡・河野

非自由黨六派が星を追うて、其の後釜に据ゑたのは楠本である。彼れは星の下に副となり、星放逐の議事を進行したが、然う大した手腕家では無かつた。唯星が餘りに行り過ぎた後を承けたので、其の無能な様に見える穩健な遣口が信望を繋いだのである。夫れに議長席に着けば、禿げ上つた額、凍とした眼、長い顔が、如何にも品格が有りさうに見えた。第六議會の民黨提出の彈劾上奏案開議の際などは、紛議雜然として起つて、議場の秩序は全く亂れた。斯うなると、彼れの品格ある態度だけでは制し切れず、議長席に突立つて、手などを打振つて「靜肅に靜肅に」と云つたが、其の音聲が議場に徹底しなかつたものだ。が、腹が出来てるので、然う周章狼狽せずには收拾し得たやうであつた。爾來第九議會まで在職し、漸く場馴れがしたので、議長振も少しは見られる様になつた。星に比すれば、其の齒切れの善くない所、煮え切らない所は、其の短所であつたと思ふ。日清戰役の功で華族に列せられ、彼れの議長としての

生命は此處に終つた。

法博鳩山和夫は松隈内閣時代の議長で、議會の形勢は頗る險惡を呈して居た。風事は茫漠として居るが、頭腦が明晰で、辯舌にも達して居るから、議長としては必ずしも不適任ではなかつた。唯時の外相大隈の准乾兒で、大隈から目八分に見て居られるのが損な立場であつた。だから大隈の差出口を制止することが出来ず、議場の紛擾を惹起した事もあつた。何しろ大隈は傍若無人で、饒舌家と來て居るから、議員の質問には一々根氣よく答辯する。處が、其の答辯中一議員が發言しようとした。大隈は一言の下に叱り付けて、之を制した。議長鳩山は目をばちくつて居た。すると、之が問題になつた。非政府黨の連中は大に激昂して、「議場を整理するは議長の職權で、國務大臣の關すべき限ではない」と教團いた。外相は面倒臭いと思つたものか、團を排して去つた。議場は暫く外相失言問題の緊急動議で賑つたが、遂に否決されて、小せりあひの一幕が終つた。鳩山も始めて重荷を下したやうに晴々しい顔になつた。危く議長試験に落第せんとした彼れは、幾かに其の信望を繋いだと云つては、ちと大袈裟だが、

其の手腕を此の機微に認められたのは事實だ。彼れは之から出立して、其の手腕は日一日と巧くなつた。殊に英照太后大喪費豫算協賛の際、彼れが恭しく起つて議案を朗讀したのは、大に其の體を得たものと稱された。此の一種の莊重型は彼れの造つたもので、範を將來に貽したのである。

片岡健吉は自由黨の領袖で、第十二議會より第十八議會まで議長の椅子を占めた。至つて謹直な人で、所謂蛙鳴蟬噪の徒とは其の選を異にする。演説は餘り行らない方であつたが、行れば必ず立派に行つてのけた。性來寡言で、容易に蘊善を吐かないので、其の深沈な態度に敬服されて居た。雄辯家でもなく、手腕家でもなく、寧ろ徳望家と云つた風な人物であつた。辛烈果斷の荒型たる星に配して、此の温和な優型は、確かに黨内の調和劑たるを失はなかつた。既に調和劑であり、徳望家であるから、議長としての遺口も、才氣縦横な専恣はなく、公平無私の態度で議員に接した。第十七議會の時、地租増徴案で政府と衝突したので、貴族院議長の公近衛は解散の不幸を見んことを憂ひて、片岡に會見して調停の任に當らうと申し出たが、彼れは到底成功

し難いことを説いて、寧ろ中止するが可いと勸告した。果して此の調停は圓滿なる解決を見ず、行く所まで行かねば止まなかつた。之を以て見るも片岡の温和の裡に、奪ふべからざる確信を裏んで居ることが解る。従つて彼れの議長としての動作も、輕躁な失敗はなく、行るだけの事は行つてのけた。

河野・廣中は自由民權の權化のやうに持て囃された時代もあり、第十九議會に議長に推された時も、非常な人氣であつた。尤もあの風采骨柄は立派で、黄色な咳拂をやつて落着き拂つた所などは、何う見ても申分のない議長であつた。根が被煽動家で、煽り立てられると、何を行り出すか解らぬ所に、危険は無いでも無かつた。其の人物が對露問題の囂々たる際に議長に推された。いざ奉答文の議事に取掛かると、彼れは美髯の中から銀鈴のやうな聲を響かせて、「奉答文は議長に於て起草したのがあるから、夫れを諸君に御語りをする」とばかりで、沈重の態度で奉答文を朗讀した。其の文中に「内政は彌縫を事とし、外交は機宜を失す」の彈劾的の文字のある事には氣付かず、滿場破れるばかりの拍手を以て迎へた。河野は更に念を押して、「此の奉答文に異議な

くば、宮中の御都合を伺つた上、參内捧呈の手續を行はう」と宣告したが、議場は再び喝采して異議なしと叫んだ。夫れで散會を告げたが、はて今のは何だか變なものだつたと、眉に唾を付けたのは議員等である。漸く理智の眼が明いて見ると、狐に魅まされた事が解つた。議長室に赴いて前例に背いたことを詰ると、彼れは信ずる所あつて起草したのだと答へる。或者が再議の要求書を突き付けると、彼れは拒絶の覆牒を與へる。始末に負へないので、各派聯合して議長を懲罰に附することに内議したが、大勢は矢張再議否認に傾いて居た。翌日解散の命が下つたので、奉答文は捧呈せずに終つた。彼れの議長振と云へば、たつた是れだけのものだが、議會史上に特異の印象を残した。

五 松田・杉田・長谷場

片岡歿後の政友會で衆望を荷ふ者は、不得要領の松田正久であつた。聯盟の必要上一たびは議長を河野に譲つたが、總選舉後の形勢激變して議長以下の要地は多く政友會で占めた。松田は憲政黨内閣の藏相となり、伊藤内閣の文相となつて後、議長に就

任したので、實際信望もあつたし、又賈祿も備つて居た。羅漢のやうな頭、凹んだ眼、鬚で物言ふやうな所に、何とも云へぬ崇嚴さがあつた。然らば端然と構へて居たかと云ふに、必ずしも然うでない。時々は獨體が笑ふやうに、頬の肉の落ち窪んだ所に微笑を湛へる。「諸君にお諮りを致しますが」と來ると、春風が議場に吹き渡るやうな感じがした。とまあ斯様な調子で、彼れは議員の反感を買ふとか、喧嘩腰になるとか、挑戦的態度を示すことは毫も無かつた。反対派の議員にも、成るべく論議を盡させると思ふ。と云ふ方針で進んだ。穩健公平の四字は、彼れの議長振を説明するに足ると思ふ。夫れを齒痒いと云つて慍つたりするのは、議長を自黨の用に供せんとする黨人の我儘と云ふものだ。

松田が三期だけで失敬すると、妙な機會で擔がれたのは杉田定一だ。彼れは北信派の人望家で、却々の野心家である。副議長に満足せず、議長か大臣かに成りたいと、事毎に運動を開始する。政友會でも其の運動を五月蠅がつて、議長に一度は祭り込んだら可からうと云ふ者もあつた。處が長谷場純孝が九州の勢力を率ゐて、頻りに議長

に成りたがつて居る。彼れには反對者も尠くないので、自ら進んで江原素六を推す事にした。是に於て黨内に猛烈なる爭奪戦が開かれ、遂に杉田の勝利に歸した。固より感情で擔がれたのだから、議長の適材でない。緊急動議が突發したり、採決に異議があつたりすると、間諜つく様な事が多かつた。が流石に多年政界に馳驅しただけに、泰然として議長席に納まり、議案を片付けることは手馴れたものであつた。難問題さへ起らなければ、空虚な頭腦を見せる事はなかつた。

其の後を承けて議長に据つたのは、前年唾み合つた長谷場だ。彼れは杉田よりは策もあり、略もあり、機轉も利く男だ。音聲も清澄ではないが、夫れを張りあげれば、議場の隅から隅まで響き渡る様な力があつた。最初は小事に拘泥する氣味があつて、十分の手腕を揮へなつたが、追々上達して、第二十七議會時分から、其の採決振は議會の一名物となつた。短く刈り込んだ胡麻鹽頭、たるみを帯びた眼臉が、議長席に其の特徴を見せると、眼の光がサアチライトのやうに満場に展開する。さうして自問自答しながら、聲音を揮つて議案を片付けて行く。其の早さと云つたら、丁度善音機

圓盤が廻轉するやうであつた。採決も亦一種の技巧で、巧くやれば目を喜ばせて、倦怠を防ぐに足るものなる事は始めて彼れの技巧に依つて證明された。最後に大岡の後を受けて議長となり、議場の紛擾を制する爲めに大聲を發し、其の爲め宿病を再發して不歸の客となつたのは、有史以來の悲壯事であつた。

六 大正初頭の二議長

第三十議會の頃、長谷場が文相に就任したので、其の後任に擧げられたのは大岡育造だ。彼れは日糖事件の豫審調書に其の名が載つて居るとか、人格に病む所があるとか、可なり非難の多い人である。元來が官僚の爪牙たる國民協會の領袖であつたので、政友會に入つても餘り好感を以て迎へられなかつた。夫れで何程か僻みを持つて居て、自ら舊自由黨員に遠ざかると云つた風であつた。夫れ等が原因で姑く不遇で居たのだが、長谷場が大臣となり、杉田が勅選となつたので、漸くお鉢が廻つて來た。議長席に据ゑて見ると、却て長谷場よりも重味があつて、何となく緊張を感じる。其の緊張は勿論平和を意味するものでなく、好戰的の緊張である。是れは彼れの人格の反映であ

らうが、彼れの態度、彼れの言語、其の總てが舌戰を喫る者のやうに思はれた。若い時分は八字髯を蓄へて居たが、彼れは其の朝鮮的亡國鬚なるに厭氣がさしてか、奇麗に夫れを剃り落して了つた。爾來無髯で居る者だから、生來の無髯のやうに思ふ者が多い。此の無髯の人が、赤ら顔の、廣い額を見せて、傲然と議長席に凭るのだから溜らない。神経質の議員なら、直ぐ其の顔を見ただけでも喧嘩したくなるに相違ない。處で彼れの遣口は何うかと云ふに、動もすれば黨派的偏頗に墮し、事に臨んで議長の職權を極端まで濫用するの嫌があつた。で、さもない事で、議場に波瀾が激成されるのであつた。

第三十一議會は、海軍收賄問題の突發した議會で、政友會の爲めに實に容易ならぬ議會であつた。大正政變以來、政客の眼の色が變つて居るから、生温い攻撃、恒例の彈劾位では、承知が出來なかつた。切つて切つて、切り捲らなければ止まざるの概があつた。斯うなると、政友會でも山本内閣を援護する爲に、諸有手段を講せざるを得なかつた。多數黨の横暴！夫れが狂暴の濁流のやうに議場に溢れて來た。決議案の

議場は其の第一例であつた。非政友派の發言中、政友派は盛んに彌次り立てる。政友派の發言中、又非政友派が彌次る。黒須龍太郎の如きは盛んに彌次る。始め政友派の彌次に寛大であつた議長は、黒須に對しては再三の注意を與へた。黒須は益々彌次の面目を發揮して、何うしても黙從せぬ。議長は滿面朱を濺いで激昂し、黒須に退場を命じ、守衛をして抓み出させようとした。すると、非政友派は非常に激昂し、議場は火事場のやうな騒ぎを演じて、何うする事も出来ぬ。議長は止むなく退場命令を取消し、漸く解決するを得た。

其の第二例は、豫算案議場に於ける尾崎の發言を妨害した事件である。中正會の尾崎・雄は、豫算案に對する獨立の修正意見を述べべく豫て發言通告の手續を経て居た。其の順序が來て、いざ登壇となると、一議員は「尾崎の修正は獨立の修正案と認める事が出来ぬ。武富案の賛成意見である。宜しく後廻しにすべきだ」と云ふ動議を起した。議長は此の動議に同じて、尾崎を差措いて井上角五郎に登壇を命じた。そこで非政友派は非常に激昂し、議場は收拾すべからざる大混亂を惹起した。議長は茫然自失、

議場整理の能力を缺いて了つた。法博花井の妥協的註文で議場は稍鎮靜したが、議長は再び井上の登壇を促したので、再び鼎の沸き返る様な混亂に陥つた。議長は窮餘の一策として、尾崎に發言を許すべきや否やを議場に諮り、政友會總起立の結果、許すべからずと宣告するや、議場は又々大混亂を來し、議長席は議員で以て包圍さるるに至つた。花井は再び動議を起したので漸く鎮靜したが、議長は三たび井上の登壇を促したので、議場は三たび騒擾の巷と化した。議長は止むなく休憩を宣言するに至つた。休憩一時間後、妥協の成立せざる儘で會議に臨んだ。政友派は依然として前説を固執し、議長は其の可否を記名投票に問ふたが、非政友派は一人の之に應ずる者なく、否とするもの零と云ふ奇怪な結果を示した。井上は四度目に漸く登壇したが、非政友派の妨害に遇つて、何を辯ずるのか少しも聽き取れなかつた。次で尾崎は登壇するを得たが、其の登壇は武富案の修正意見を陳ぶるものとして許されたと云ふ事であつた。其他綾部及藤原の懲罰事件、加賀歐打事件等が起り、廢稅案の議場で、未だ何等の討論をさせずに、討論終結としようとする様なことをしたのも、政友會が悪いに相違

ないが、議長は議長の職權を嚴肅に執行せず、徒らに與黨の爲めのみを謀つたからである。彼れ大岡の文相となつて議長席を去り、長谷場の來つて之に就いたのは、却て反對黨の感情を融和する所以であつた。

長谷場の歿後、選ばれたのは疑問の奥繁三郎だ。黨内では不人望で危く村野に蹴落される所であつたが、彼れの讓歩に依つて漸く希望を達するを得た。彼れは第三十五議會まで、議會の場數は多く踏んだが、臨時議會が多かつたので大した難關に逢はなかつた。と云ふのは、政友會は野黨となつて、別に私曲を行ふ必要もなく、公平に行れば可かつたせゐるでも有らうが、紛擾に手古摺るやうな事もなく済んだ。何時も酒氣を借りて元氣を付け、『御異議があまりましよ、まいか』で行つて退けたが、採決振は先づ普通であつた。

七 現議長の議長振

一世の能辯家島田三郎は、大隈内閣の下に、第三十六議會から議長の手習を始めた。老人の手習のせゐるでもあらうか、容易に上達せぬ。偶ま巧く書かうとすると、却て縮

尻を出す云つた風で、自分で氣を苛立たせて居るやうである。攻撃軍の閣將振は立派なものであつたが、議長席に著くと丸で別人の様に見劣りがする。顔の曲線が波打つて、始終笑つてるやうな所は、如何にも和風煦日の景であるが、天氣は俄かに時雨空のやうに變り易い。議長の冷靜と沈著を缺いて、往々閣將の亢奮を露はす。几帳面な男が大岡の圖太い所を見せるのだから、議場の紛擾は彌が上にも大きくなる。火に油を注ぐと云ふ形容は、彼れの議長振の或場合を遺憾なく説明するものであらう。

議長島田の當惑初は、特別議會の五日目である。一議員に『速記録の箕浦起草委員長の氏名の下に括弧して立憲同志會とあるが、これは法規先例に據られたるものか如何』と突込まれ、『追て取調の上答辯』と切り抜けたのは、瞬間の當惑後であつた。こは彼れが第一關で、其の次が賣國奴問題の紛擾である。外相加藤の演說中『賣國奴！』と罵つた者がある。懲罰々と云ふ怒號が同志會側から起つた。彼れは其の喧騒を排して、望月圭介に向ひ、『只今の失言を取消さば、今回に限り懲罰に問はぬ』と公平振を示す。望月は『激昂の餘り失言したから前言を取消す』と答へる。彼れは『激昂の

餘りと云ふ意味では取消にならぬ、良心より取消されるか」と訊き返す。其の間に議場は亂れる。彼れは飽迄も望月の意志を聞かうとするが、望月は答へぬ。議場は益々喧囂を來す。懲罰の連呼が聞える。彼れが望月に注意すると、小聲で「失言を取消す」と云つたが、勿論一般には聞えぬ。彼れは「夫れにて宜しきや」と云つたが、一議員は懲罰の動議を起した。議場は又もや麻のやうに亂れる。彼れは「討論を用ひず採決しよう」と懲罰の動議賛成者に起立を命じ、忽ち「起立少數」と宣告した。與黨側の不平があつたが、野黨側は其の公平を冷笑した。

一波起つて萬波起る、此の失言問題の餘波は容易に收まらぬ。翌々日の議場に、一議員が議長の處置を非難し、職權と注意との區別を明かにせん事を迫つたので、與黨側は無用を連呼し、一氣に揉み潰さうとする。と野黨側でも負けては居ず。怒鳴る、喚く、卓を叩く、足を踏み鳴す、議場騒然耳を聳するばかりである。議長は茫然自失、色蒼ざめて居る。發言要求の聲が四方に起る。許された者は登壇して頻りに辯ずる。答辯の限に非すと與黨側で彌次る。議長は「決して命令要求を爲したのではないことは

明かでないか。若し不服ならば採決するの外ない」と頑張ると、壇上に飛び上つて發言を求める者があると云ふ騒ぎだ。議長は野黨側から公平の態度を強要せられて、一時議長席を副議長花井に譲るの止むなきに至つた。彼れの失態は總て此の通りで、議場整理の能力を疑はしめた。

夫れより幾日も経たぬに、衆議院議員法中改正案の議事があつた。此の際にも、採決を宣告すると、野黨は何を採決するのかと騒ぎ立てが、與黨は一齊に起立したので、「多數」と宣告して委員附託とした。刹那、異議ありと呼んで演壇に飛び上り、發言を求めた一議員があつたが、議長はさつと國外に去つた。これが問題となつて、議長は議場に失態を陳謝するに至つた。さうして彼れの無能は愈々暴露され、次で内閣不信任案議場の閉鎖突破事件となり、議長不信任案の討議となり、武藤金吉退場問題となつて、第三十六議會最後の幕は下りた。が、今議會の幕が明くと、議長失策の宣告で衝突の端を啓いた。次で佐々木安五郎懲罰問題となり、次で議長の失言取消問題となり、彈劾案の議場となつて未曾有の混亂を惹起し、車夫馬丁の喧嘩なんぞの様な感

抱か。せた。事毎に斯様な混亂を惹起すのは、議員の不眞面目にも因らうが、議長島田の人物手腕が議場の信服を買ふに足らぬ爲めでは無からうか。彼れは何かと云ふと直ぐに規則を振廻し、『不規則の發言を禁じます』とか、『規則をお守りなさい』とか、『規則に依つて警告します』とか餘計な事を云ふのみならず、忽ち亢奮し、忽ち喧嘩腰になる。議場の反感は、之が爲めに益々高潮するのだ。己れ自ら激昂して他を制するの不可なるは、議長大岡の失敗が何より確かな證言である。彼れたるもの、大に鑑みる所なくてはならぬ。(大正五、一、一八)

後繼内閣の首相

後繼内閣の首相に、何人を据うるの可なるかは各自の胸中に判明すと雖も、何人の据るべきかを豫測するは、宛然迷宮に入るの感なくんば非ず。

大隈内閣の幾度か倒れんとして倒れざるは、伯大隈の内閣を支持するの頑強且執拗

なるに由ること論なきも、後繼内閣を組織すべき首相其人を得難きも亦其の一因ならざるを得ず。少しく眼界を廣うすれば、首相其人を得る必ずしも至難ならずと雖も、元老には元老の氣儘あり、政黨には政黨の我儘あり、其の利害關係の錯綜し、感情の纏綿紛糾するものあるが故に、其の人選容易ならざるのみ。一言以て之を蔽へば、元老は超然内閣を冀望し、政黨は政黨内閣を主張する所に、柄鑿相容れざるものあるに由る。而も其の柄鑿相容れざるを縫合し、一時的糊塗状態にありて新内閣を組織し、政權を均握せんとす。如何なる妙匠を拉し來ると雖も、其の困難は依然たり。是れ政權爭奪の野心満々たるも、自ら進んで首相たるを肯んずる者なき所以。

薩長交々内閣を組織せる時代にありては、首相其人を得る、さしたる難事に非ず。唯薩の、若くは長の擅私せんとするに際し、勢力の衝突を醸せるのみ。多數黨を基礎とし、偶ま政黨内閣を組織せる時代にも、首相の何人なるべきかは豫想の外に出でず。然るに、大正政變後は、政界漸く亂調を呈し、群雄割據若くは群衆横行の觀あり。一個の藩閥、又は一個の黨首を以て、其の勢力を統一する能はず。不本意、不徹底なが

らも、一の勢力と他の勢力と妥協苟合せざるべからず。政友會の薩派と結び、同志會の長閑と親しい、畢竟政權授受の便宜より來れり。

彼等黨人にして眞に政黨政治を理想し、超然内閣を絶對に否認し、之を援助せざるに於ては、元老如何に蠻勇を揮ふと雖、大勢に逆行し得べきに非ず。然るに黨人の政權を握るに焦燥する、藩閥と妥協苟合し、若くは元老に迎合するを捷徑となすが故に、到底其の理想を實現する能はず。政權爭奪の爲めに躍起運動を試み、其の爲めにのみ苦惱困憊するの愚劇を演じつゝあり。後繼内閣の組織、多數黨を基礎とせば、男加藤高明は其の首相たるべく、加藤にして不可ならば、其の反對に立つ所の原敬、犬養毅の聯立内閣を當然とすべきなり。然るに前陳の事情に依り、前陳の愚劇を演じつつある間は、此の當然を實行すべく其の距離餘りに遠しと謂はざるを得ず。

二

男加藤は自任自信極めて高く、大正外交界の第一人者なりとの自負を有す。其の自恃に過ぎて、思はぬ失策を演ずる所、稍伯大隈に肖たりと雖も、伯の如く放言の快に

陶酔せず、言責を重んずるの謹慎はあり。時に國民外交を云々し、時に祕密外交を實行し、自家の功名乃至都合の爲めに外交を玩弄するの傾向なきに非ざるも、其の量未だ自負の程度に達せざるが故に、對手國の外交家に翻弄せらるゝを免れず。併し彼れ自身は、失敗も尙成功なりと議會に抗辯するが如く、實際しか信じ居るやも知るべからず。彼れ一たび口を開くや、論調透徹、舌鋒鋭利、政敵を擲擄し、諷刺し、他の骨髓を抉らすんば已まざるの概あり。此の傲岸にして争氣ある人格は、統帥の器に缺くる所ありと雖も、抵敵に強く、策士輩の陰險なきは、又一方の首領たるに適せずとせず。彼れが幾たびか同志會の反感を買ひ、幾たびか排斥せられ、幾度か内訌の焦點となれるも、依然總裁の地位を占むるは、彼れに多少の包容力あり、同化力あり、將來あるに由らすんば非ず。

男加藤の、何人にも毛嫌さるゝは、其の傲岸と自恃とにあり。而して彼れの何事かを成し、若くは成さんとするの長所も亦茲に存す。既に傲岸にして自恃あり。夫の幫間の如く阿諛面従せず、昂然として自家の主張を固執す。籠蓋は其の特技に非ず、進

んで之を威壓せんとす。弱者の反感は茲に萌し、先輩の憎悪も亦茲に發す。侯井上、公山縣等の彼れの態度に快からざりしは、全く是に原因せり。伯大隈は狡猾なり、巧みに元老を籠蓋す。縱令元老の苦情を持ち込み來るも、殊更に耳を遠近し、聲調を抑揚して、之を誤魔化し去るを常とす。然るに彼れは伯の耳なく聲調なきが故に、相槌を打ちて迎合し、詭辯を以て瞞過し去るの藝當を演ずる能はず。元老の不機嫌を買ふ毎に、冠を掛けんとせしこと一再ならず。彼れが伯の居据りに同せず、子大浦と連帯責任を負ふの意味に於て辭職を決行せるは、責任の觀念に基くこと勿論なりと雖も、亦元老に對する一種の面當ならずと謂ふ可からず。男加藤の立憲的行動に關し、奇怪にも同志會に喜ばざるものあり。元老も亦彼れの外交を不安とする所なれば、伯大隈と如何の默契あるにもせよ、當分政局の要樞に座すべしとは想ふ能はず。

原敬は、隈閣の外交に深憂を抱く點に於て、元老の深憂と鼓動を一にす。其の深憂の、果して國家の爲めの深憂なるや、政争の爲めの深憂なるやを知らずと雖も、此の深憂を抱くが故に隈閣を倒さざる可からずと敦圍き居るは事實なり。彼れは男加藤に

比すれば、策あり略あり、冷熱あり。又籠蓋の才あり。己れ首相たる事能はずんば、首相の器を物色し來りて、之を推戴し、若くは妥協苟合するを辭せず。彼れの策する所は、自家の經綸抱負を實行する前に、如何にして政權を握らんとするかにあり。彼れは此の策の爲めに、或は公松方に流所し、或は伯寺内の一派に策應するを否む者に非ざるなり。現に彼れは、妥協苟合の前科者なり。一再長閑と情意投合し、後薩派と通じ、長く臺閣に列せるは普く人の知る所なり。されば原の深憂と鼓動を一にすと雖も、之を眞面目に受取り、協心戮力、一致以て事に當らん者、甚だ妙きを思はざるを得ず。

始め公山縣は政友會の横暴を惡み、伯大隈をして其の絶對多數を打破せしめたるも、伯の政權を緊握するの執拗を見るに及んで、之を喜ばず。多少藥の利き過ぎたるを後悔し居るも、卒然從來の惡感を一掃して原と握手すべしとは信ずる能はず。加之、公は、原及び加藤を小兒視し、未だ首相の器に非ずと獨斷するに似たり。彼等初めて首相の印綬を佩びたる當時を回想せば、原の六十一歳、加藤の五十七歳は、寧ろ餘りに

老いたり。而して、其の進歩せる思想より云ふも、憲政運用の手腕よも見るも、大臣たるの經歷より云ふも、政黨總裁たる點より見るも、彼等に比して優りこそすれ、決して遜色ある者に非ず。唯彼等の怖るる所は、其の未熟に非ず、外交の深憂に非ずして、寧ろ自家勢力の失墜にあり。公桂の故智を學ぶに非ずんば、兩個の總裁が如何に黨人を率ゐると雖も、後繼内閣の死命を制し得るや疑なき能はず。

三

齊しく元老と云ふと雖も、其の勢力の中心は公山縣なり。大正政變の當時、元老の勢力は政界の表面より一掃し去られたるの觀ありしも、憲政擁護熱の終熄すると同時に再び其の勢力を恢復せり。殊に山本内閣が貴族院の銳鋒に突き崩され、清浦内閣流産し、隈閣の成立以來、軍閥漸く猛威を逞しうし、公山縣の勢力鬱然として加はり來り。されば内閣起仆の權、一に彼れの掌中に歸せるが如く、其の筋骨も亦彼れを中心として書かれつゝあり。貴族院の多數が、減債基金問題を以て隈閣に迫り、之を倒壊し去らんとせしも、公山縣周圍の策士の方寸に出でたり。公が伯の請を容れて一た

び出馬し、居中調停を試みるに至りて、あれ程の騒ぎも遂に妥協に局を結べり。是れ公が急遽倒壊するを好まず、自ら窮地に陥りて其の自滅するを待たんが爲めなり。頻りに民意の所あるを喋々し、民意を以て唯一の盾とする所の伯大隈を責むるは、彼れが信望の金箔が悉く剝落したるの日を以てするを得策となせばなり。人或は政治の中心の貴族院に移動するの傾向あるを云ふも、其の裏面を觀じ來れば、是れ皆公山縣の翻弄し、操縦しつゝあるの結果に外ならず。

黨人にして公山縣の勢力に快からざる者は、毒を以て毒を制するの勝れるを思ひ、元老増加論を唱説せり。蓋し其の意、子高島、子三浦、侯西園寺の徒を加ふるにあり。以て公の勢力を控制すると同時に、子高島を首相に推すの下地を作るにありき。然れども此計畫は、子高島の長逝によりて畫餅に歸せり。子高島の死は、政友會乃至國民黨の失望する所なるに相違なきも、之が爲めに長閑の勢威益々旺盛を致せるは争ふべからず。

公山縣は、彼れが最後を飾るべく、如何の途を取らんかに考慮を廻しつゝあり。一

時は周圍者の擁する所となり、政局の難關を引受け、以て其の最後の花を飾らんの意なきに非ざりしも、時勢の不可なるを見て断念せり。實際侯松方を推すも、公山縣を起たしむるも、其の老朽の點に於て何の擇ぶ所かある。強ひて彼等の蹶起するあらば、忽ち國民の咒咀する所となりて、壽命克く幾許を保ち得べき。是れ、公山縣の最後を飾る所以に非ざる也。

四

縦令公山縣の蹶起せざるも、後繼内閣の長閑勢力圏内の者たるや多言を要せず。今や世人は隈閣の放恣に厭き、無責任に驚き、民意を押賣するに呆れたり。是に於てか隈閣倒壊を急とし、倒壊に手段を擇ばざらんとす。見よ政界は神經過敏となり、自暴自棄となれり。曩に政黨内閣を主張せる者も、一時の變體として超然内閣の止むなきを力説するに至れり。超然内閣の成立は、最早免るべからざるの運命となれり。

其の運命の暗示によりて、首相に擬されたる者に、伯芳川顯正あり、子平田東助あり、伯寺内正毅あり。曾て流産せる子清浦奎吾の如き、今尙倒壊の陰謀に加擔し居る

を見れば、未だ全く断念せりと見るべからず。一たびある事の二たびあり、三度ある習なれば、或は彼れの如きも亦桂冠を戴くなしせず。

伯芳川は、現下樞密院副議長たり。年齒七十有六。數度臺閣に列し、何種の大臣となるも能く其の椅子を保てりと云ふの外、特に政治的手腕の優秀なる人物に非ず。唯彼れが長に善く、薩に善く、薩長兩閣の連鎖となり、楔子となり、調和者となる點に於て、其の人物を稱せられたるに過ぎず、政界混亂の今日、彼れに指目せるは、其の無難を利用せんとするに非ざる乎。

子清浦は、曾て八圓の小學教師たり。中頃、貴族院の飛將軍として名聲あり。其の雄辯と機智とは、儕輩の推重する所なりしも、近年多く煙霞の裡に悠遊せり。其の材素より小ならずと雖も、伯芳川の圓滿と餘裕とを有せず。霸氣あり、圭角あるも、又頗る如才なき所ありて、剛愎を露出せず。伯芳川の鄙吝なるに比し、淡泊なる所あり。黨人を操縦する、案外功を奏するやも測るべからず。

曩に清浦内閣の流産せる、政友會の操縦意の如くならざるにありと云ふも、宗像政

は謀士にして豫定閣員の一人なりき。當時政友會に黨籍こそ無けれ、總裁原とは呼吸の通ふものあり。其の黨情を融和する、必ずしも難しとせず。又其の流産の原因を、海相其人を得難かりしにありと云ふも、或種の手段を講ずるに於ては絶対不可能事に非ざりしなり。然るに遂に流産の餘儀なきに至れる事情は何ぞ、曰く公山縣の清浦に聲援を惜みたるが故のみ。若し公山縣が伯大隈に顧眄するなく、極力彼れを援助するあらんか、中途表面の二因の爲めに脆くも瓦解するものに非ざりしなり。

然らば伯芳川の起つと、子清浦の起たざるとは、一に公山縣の推薦、乃至聲援の如何によりて決す。吾人、其の裏面の情事を見る毎に、一種の不快を感せずんば非ず。

五

四人中、最も呼聲の高きは、子平田なり。彼れは公山縣の縁戚にして、其の懐刀なりと稱せらる。彼れは法制局長官より進んで、第一次桂内閣の農相となり、次に第二次桂内閣の内相となり、大に政界の指目を惹くに至れり。世多く彼れを以て君子とすも、彼れは尋常一様の君子に非ず。其の報徳宗を宣傳せるは、眞に報徳宗を信ずる

が故に非ずして、彼れが産業政策の方便に供せられたるなり。今日も尙之を鼓吹すべく努力する所に、彼れの浮氣ならざる性格を發見すと雖も、彼れの政策の人たるは蔽ふべからず。

子平田の、公山縣に愛せらるる所以は、此の君子と見えて策士たるにあり。謹直に裏面に機略を以てするにあり。加ふるに彼れは學あり、才あり、趣味ありて、品格自ら備はれるものあり。夫の小慧狡猾の策士、若くは我利是れ追ふの徒に比すれば、固より雲泥の差あり。少くとも彼れは至誠を以て事に當り、理智を以て判断し、小疵あるも大過なきを得るところ、何程か公山縣の性格を髣髴するもの無くんば非ず。而して彼れは貴族院に勢力あるを以て、公山縣の之を操縦する、必ず彼れの手を用ゐるを常とす。今次の調停の如き、又彼れを勞せしこと論を俟たず。内閣倒壊、乃至組織の謀議に、彼れの顔を必要とするは、這般の理由に基くなり。

彼れは必ず謀議に參すと雖も、首相たるの野心ありと見るべからず。彼れ近年健康を害し、劇職に就くを避くるの風あり。公山縣の就任を強要するに於ては、或は身を

以て國事に殉せんの意氣を示すべけんも、時勢を見るに伶俐なる彼れは、容易に起つこと無かるべし。彼れが子清浦の如く調子に乗らず、慎重熟慮する所に彼れの彼れたる所以あり。現に反隈派中には、政黨非政黨に論なく、思を伯寺内に寄する者尠からず。此の形勢より察する時は、曾て非立憲なり、憲政の逆轉なりとして排斥せる寺内内閣の成立を見んも知るべからず。政界人心の歸向、眞に測る可からざるものあり。

伯寺内は軍閥精神の結晶なり。彼れに憲政の進歩を求め、政黨の發達を望むが如きは、要求する者の誤なり。彼れの公伊藤の有せざる或物を有し、克く之を統治し、今日の朝鮮となしたるに徴するも、武斷政治の手腕家たるを知るに足る。彼れにありては、論壇の雄辯は雄辯に非ず、武斷は唯一無二の雄辯なり。斯の雄辯を以て、彼れは同志會に當れば必ず同志會の多數を打破し、難關に遭遇すれば其の難關を突破するに躊躇する者に非ず。

彼れは理論家に非ず、手腕家なり。隻手以て何事をか成し得んと非難する者なきに非ざもる、彼れは隻手を以て實務に執掌し、所信を斷行し、今日の功業を贏ち得たり。

性剛愎にして人に下らず、動もすれば彈壓し、威服せんとするの傾向あるも、他を懐柔せんとするの伶俐はあり。若し夫れ事に當らんか、精力絶倫、些の倦怠と疲勞とを感せず、之を遂行せずんば已まず。斯の精力絶倫、元氣旺盛なるの點、或は首相の器となすに足れり。知らず伯寺内は、如何の經綸抱負を以て首任の印授を佩びんとするや。(大正五、二、二〇)

(備考) 年齢一覽

- | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 松方 正義(八二) | 山縣 有朋(七九) | 大隈 重信(七九) | 芳川 顯正(七六) |
| 平田 東助(六八) | 清浦 奎吾(六七) | 西園寺公望(六七) | 寺内 正毅(六五) |
| 犬養 毅(六二) | 原 敬(六一) | 伊東已代治(六〇) | 後藤 新平(六〇) |
| 加藤 高明(五七) | 徳川 家達(五四) | | |

徹底家・不徹底家・變説改論家

▼去十八日の信用すべき某紙に、『本日の彈劾案議事に當り、特に政争の渦中に投ずるを避くるの趣旨にて、小林博士は缺席すべし』とあり。吾人は此の記事に對して多少

徹底家・不徹底家・變説改論家

の疑問なきに非ざりしも、事實は遂に之に裏書するに至れり。

▼法博小林丑三郎は、夙に財政經濟に一隻眼を有し、其の爲め學位をも得たる人物なり。而して學位なる者の相場漸く下落し、夜見世の見切物同然たらんとする今日も、是れ有るが爲めに世間より多少の敬意を拂はるゝ程の人物なり。所謂博士相場の水準以上に、有望の人物なるや言を俟たず。

▼人或は博士をもじりて、バカセとなす。世事に暗く、卓上の最高識見を矜るが故なり。彼れは此のバカセ群に在るも、多少毛色を異にするものあり。努めて特有の最高識見を避け、巧みに實際問題を捉へて、剴切なる觀察と批判とを加へんとするの風あり。是れ、彼れの眼底に經綸の光輝と潤澤とを藏すと稱せらるゝ所以。

▼彼れは代議士以前、既に雜誌種供給者として歓迎され、論壇一方の人気者となれり。何程か大器速成の傾なきに非ざるも、其の經綸抱負を有するに於て、なほ發達の將來を豫期されたり。法博小林の市價の、學校以外、ノート標準以外に維持されたるは、之が爲めなり。

▼然るに彼れが代議士となるや、其の眞面目、其の眞骨頭を發揮せず、唯徒らに政界の灰色人種と化し了せり。吾人は當初、彼れが隈伯後援會の一員として議會に送られたるを見て鬱鬱せしが、爾來其の態度曖昧にして、自家の主義主張をすら貫徹する能はざるに非ずや。

▼彼れは現内閣の非募債主義を以て増税主義となし、其の非を痛撃せり。變説改論は當時の流行なるも、彼れは未だ此の主張を捨てず、相變らず豫算會戰に於て質問の矢を擬しつつあり。人或は八百長と云ふも、吾人は彼れの所説に照して之を信せず。

▼政黨の入退は、一に主義政見の合否如何に由りて決す。主義政見の合致せざるに強ひて其の黨に止まるの要なく、又其の政策と背馳するに、強ひて其の内閣を援助するの要何處にかある。小林の現内閣を援助し、其の與黨たる公友俱樂部に在るは、何の意たるを解するに苦む。政治家の出所進退を苟もすべからざる、吾人素より知らざるに非ず。而も小林の行動を以て、其の苟もせざるの結果なりと云ふを得べきか。

▼彼れは政争の渦中に投ずるを避くと揚言するも、是れ世間體を粧ふの言のみ。政争

の渦中に投ずるを避けんとせば、代議士を辭するの他途あるべからず。政争の爲めに政争を惹起するの不可なるは論なきも、内閣の稅政を彈劾するは當然なり。殊に現内閣の如く議員買収事件に聯帶責任を負はず。聖旨に藉口して居居れるの非立憲は、他まで之を糺彈せざるべからず。之をしも政争なりとして、耳を蔽ふべくんば、始より議會に出でざるに若かず。

▼由來、情實に迫られて、缺席せるの例多々あり。特に法博小林を責むるの酷なるも、彼れは無智の田吾作に非ず。少くとも、憲政に對して、理解を持つの新人物なり。徒らに其の行動を二三にし、世間體を粧ふに急なる如きは、吾人斷じて之を取らず。

二

▼法博花井卓藏が、近來其の能辯を節約しつつあるは、世人の異様に感ずる所なり。彼れの節約は、何等論すべき問題なきが故の節約なりやと云ふに、決して然らず。副議長となれるが故に其の餘裕なきに由るやと云ふに、又然らず。彼れの默せざるべからざるは、中正會の現内閣に盲従するを餘儀なくされたる事情に由る。

▼然れども、中正會には菊池武徳の如き、現内閣を痛撃して止まざるあり。會を擧げて盲従せるに非ず。是を是とし、非を非として、明従せりと辯ずる者ありと雖も、其の默従しつつあるは争ふ可からず。花井の多辯饒舌、苟も問題を捉へて放たず、之を理盡し論盡せざれば承知せざる者が、鋭を藏めて發せざるは之が爲めなり。

▼今次の彈劾案に對し、彼れが平素の主張に殉じ、或は賛成の態度に出づるや測るべからずと買ひ被られたり。然るに彼れは、例の伶俐明快なる舌鋒を以て、現内閣の居据りを批評し、立憲の大義に反せりと攻撃せるも、大浦乃木問題を含むが故に、案其物には賛成する能はずと聲明せり。是れ、現内閣の明従者として當然の歸結なり。

▼法博花井の偉さは、法博小林の如く逡巡するに非ず、泰然自若、尤もらしき理窟を捻出するにあり。其の聲明三百代言の夫れの如く、其の理窟駄々兒の小言の如く、宛然饅頭の皮を去りて、餡其物を攫むに似たりと雖も、攫むの巧妙は即ち之あり。其の巧妙を以て、必ずしも彼れの主張に忠なるを稱する能はず。

▼既に彼れは現内閣の非立憲を認識し、之に對して憐焉たらざる以上、何故に之に向

つて公然攻撃の一矢を酬いざるや。曾て山本内閣を庇護せる政友會は、泥棒を助くる者は泥棒なりとの筆法を以て論せられ、信を國民に失せり。大隈内閣の非立憲を庇護する中正會も亦、同一筆法を以て不信を將來する運命を有す。法博花井の議會に黙するは、彼れが憲法學者を廢業せりとの非難を受くる外、何等得る所なかるべき也。

▼頃者、花井の副議長辭任を傳ふるものあり。其の眞偽保證の限にあらざるも、果して辭任すこせば、現内閣に默從するの苦痛より脱し、愈々一人一黨主義の本質に立ち歸り、得意の論鋒を揮はんとするに非ざるか。彼れの浮沈、彼れの死活、一に今後の行動如何にあり。

▼參政官に就任し得ざる不平より、現内閣に反抗するに至れりと稱されたる菊池武徳は、其の内情の如何に拘らず、獨り中正會の默從に聽かず、敢然として蹶起せるは、其の蹶起せるの勇氣を多とせざるを得ず。自家の主張の前に死し、眼前の名利の爲めに活きんとするは政治家の耻辱とする所、僚友花井、早速一派の行動に慊らずして、單騎敵陣に突撃せるの壯烈は、多くの詩趣を唆るものならずんば非ず。

▼吾人は何れの場合にも、政府を突撃するを以て痛快となす者ならず。政府に何等の失政なきに、之を攻撃するは、政争の爲めに政争を敢てするもの、決して立憲的行動なりと讃する能はず。之に反して政府に秕政ある時、假借なく之を攻撃するは、國家民人の爲めにする代議士の責務ならざる可からず。菊池の突撃、多少私憤を洩すの嫌なきに非ざるも、其の條理は條理として受取らざるべからず。

▼舌の人菊池は、豆殻を火に焼く如く一時盛んに燃え上ると雖も、其の勢永續せず。其の鋭さも亦花井の舌の如くならず、論旨多岐に亘り、語調冗漫に失すと雖も、情熱の閃きはあり。往々唇を以て議するが如く誤解せらるるも、胸裡の可燃性蔽ふべからざるものあり。動もすれば、早計遲斷に陥るが故に、其の畫策齟齬して、未だ政界の花形たる能はざるなり。

三

▼伯大隈重信は政界の先輩たるを自負し、傍若無人權を横使す。其の政友會を目して一知半解の徒と冷笑し、君主權を侵犯する者なりと極言するに至りては、堂々たる首

相の態度にあらざるのみならず、聊か血迷へるの容なりと難せざるを得ず。

▼伯大隈は言論の雄者なり。大風呂敷を擴ぐるに得意の人なり。必ずしも主義政見に拘泥せず、所謂最高理想より自個に都合よき臨機應變の政策を捻出す。首相となりて政局の實際に方るや、在野當時の主張を裏切る如きは、屁の河童とも思はず。續ては身振澤山の雄辯と、出鱈目と、愛嬌とを以て誤魔化さんとするなり。現内閣の既に存在の意義を失へるに拘らず、なほ存在する所以のもの、彼れが自負する所の民意の去らざるに非ずして、適當なる後繼内閣を得難きに由るなり。

▼一時飛ぶ鳥を落すの勢ありし、憲政の權化尾崎行雄は、一たび法相の椅子を贏ち得るや、二個増師に賛成し、廢減税の主張を一擲し、其の地位に戀々たるが故に、殆んど當時の聲望を失せり。而して變説改論は、彼れが特有の武器の如くなれるの觀あり。

▼變説改論は獨り尾崎に限らず、河野廣中、武富時敏の徒、皆然らざるなきに、彼れが輿論の痛撃を免れざる所以のもの、全く其の變説改論の甚しきが故なり。彼れは伶俐なるだけ、多少自暴氣味となり、野黨に對して竹筴返しを喰はせんことす。其の落

著き拂ひたる態度、冷然として白を切る身振は、遺憾なく狐面の特色を發揮せるもの。

▼法博大場茂馬は、議會の新米なり。未だ其の俗臭に染まず、其の駈引に慣れざるだけ、高潔の心事を有するに似たり。自家の主張の爲めには、公友俱樂部を脱し、孤立無援を顧みずして、彈劾案を提出せり。野黨三派の夫れの後を受け、頗るブマなりしと雖も、彼れの誠意は貫徹せり。

▼彼れを難するもの、或は大場の提案を以て、名の爲めなり、器量を下げたりと云ふも、彼れの主張に向つて猛進せるは、花井の事情に餘儀なくされて默從せるの比に非ず。唯度胸未だ据らず、與黨の乘する所となりて、策戰の裏を搔かれたるは遺憾なり。

▼彼れの失敗は、彼れの議會の呼吸を知らざるに因す。彼れは此の失敗に由りて、政黨に籍を置くの利害を知悉せるならん。苟も大問題を提げて立つ以上、孤立無援にては何事も成す能はず。一人一黨主義を高唱する者すら、尙結束を要するに、彼れの唯一人を以て事を擧ぐるは餘りに無謀なり。纔かに國民黨の同情ありしが故に、事を擧ぐるを得たるのみ。彼れの思を致すべきは、此の點にあり。

▼同志會を脱せる長島隆二の名聲を博せるは、其の質問戦にあり。政國兩黨と協力せる弾劾戦にあり。大場の野黨三派と合するを爲さず、單騎敵壘に肉迫せる、壯は即ち壯なるも、遂に其の壯美を擅にする能はず。長島程の喝采を贏ち得ざるは、其の進退時宜に適せざりしなり。彼れたるもの、今後大に振ふ所無かる可からず。

(大正四、一二、一九)

(附記) 脱稿後、博士花井は副議長を辭せり。彼れは政治上何等意味あるに非ず、行動の自由を得んが爲めなりと云ふも、副議長は與黨の副議長にあらず、林毅陸の彈劾案に賛成せるが故に辭任の要を見ざる也。其の裏面に錯綜せる關係あること疑を須めず。吾人は彼れの自由行動を取るの寧ろ遲きを歎ぜずんば非ず。

新舊副議長の人物

上

▼現内閣に明從乃至默從せる法博花井卓藏は遂に副議長を辭せり。而して「彈劾案の如き大問題が片付きたる故に圓滿辭職をなすのなり」と云ひ、「自由行動を留保するなり」と傲語すと雖も、其の去るや厥然として去れるに非ず、周圍の事情に餘儀なくさ

れたるは否む能はず。

▼花井の意、眞に自由行動を取るにあらば、宜しく大問題の片付かざる以前に、之を決行せざるべからず。何となれば、彼れは現内閣の居据れるを非立憲的行動なりと、非難するの一人なればなり。野黨三派の彈劾案は、別に大浦乃木問題を含むと雖も、現内閣の非立憲を認めたる彼れは、大に之を賛すること猶菊池武徳の如くならざるべからず。

▼然るに、彼れは進んで彈劾案に賛成するの勇なく、退いて現内閣に盲從するの愚を守、能はず、纔かに屁理窟を並べて彈劾案に不賛成を表す。而も之を議會に陳ぶるに非ず、中正會代議士會の席上に喋々す。彼れが與黨たる苦衷はさることながら、其の窘窮せるの態度は、決して堂々たる政治家の舉措にあらず。

▼野黨三派の彈劾案は、斯くして切り抜け得たりと雖も、彼れは更に新なる一難關に會せり。林毅陸の提出せる彈劾案、即ち是れなり。此の彈劾案は、彼れに取りて全く豫期せざる難關なり。別語之を云へば、手詰の將葉なり。中正會に於ける彼れの演説

は、直ちに野黨の乗する所となり、居据問題のみの彈劾案に依りて通路を断たるに至れり。彼れは止むなく、此の彈劾案に賛成を表せざるを得ざりき。花井の明從は、遂に盲從以上の失態を演じたり。

▼花井は敢て失態に非ず、當然の行動なりと云ふやも測られずと雖も、最初は與黨に明從し、最後は野黨に默從するが如きは、何としても憲法論者たる彼れの器量を上げたる者と稱するを得ず。彼れが與黨を裏切り、野黨に賛成する以上、須らく其の態度を明かにし、得意の憲法論を眞額上段に振擧して、議政壇上に其の雄辯を揮はざるべからず。一票は則ち一票なるも、其の一票を投ずる態度によりて其の價值に影響す。

▼彼れの所謂明從的態度は今回に始れるに非ず、既に中正會の明從的與黨たる際あり。其の名明從なりと雖も、其の黨員多くは默從、若くは盲從の實を擧げ、現内閣に反噬せざりしも、其の之あるは參政官の新任命發表後なり。其の選に洩れたる不平不滿の徒は、一人一黨主義の本音を吐き、愈よ明從的態度を表示せり。彼れ花井の茲に至れるも亦、多少の不滿を感じたるの結果ならずとせず。

▼されば同志會は、花井の態度に慊焉たらず。動もすれば、之を疎外せんとするの傾向を生じたり。殊に林の彈劾案に賛成したる以後、同志會側の感情甚だ面白からず。花井を辭せしめ、之に代ふるに同志會臭味の大竹貫一を以てせんとするに至れり。花井の一反たび辭表を提出したるも、其の間に調停する者ありて暫く見合せ、與黨三派の折合を見ずして、斷然辭任を執行せるを見る。圓滿辭職は其の名義のみ、内實は同志會の反感に呪はれたるなり。

▼副議長は與黨の副議長に非ず、衆議院の副議長なり。純理の批判を以てすれば、與黨を裏切れるの故を以て敢て辭職の要を見ず。而も辭せざる可からざる所以のもの、全く混濁せる黨情の纏綿せるが故なり。政友會絶對多數の時、副議長は第二黨たる國民黨より推舉せり。然るに俄分限の同志會は、其の俄分限たるの威力を擅にし、之を其の與黨たる中正會より推舉せり。既に中正會の與黨たるが故に、花井の默從乃至盲從すべきが故に、副議長の椅子を與へたるものなれば、彼れの明從的態度の鮮明なるに至りて、之を奪ふは當然の仕打なり。

▼同志會の横暴は、其の議長も、其の副議長も、悉く與黨の便宜の爲めに使役せんとするの觀なからず。斯の如きは、決して同志會の餘裕と、立憲的態度を示す所以に非ず。花井の副議長を辭せる、之を善惡に解すれば、與黨の副議長たるを屑しとせずして、去れるものにして、決して衆議院の副議長たるを欲せざるが故に非ざるなり。斯く解するに依りて、彼れが自由行動を留保するの意味、始めて明かなり。

下

▼法博花井は自由行動を開始すべく、默從の苦痛より脱出すべく、副議長の椅子を去れり。而して其の後釜に据れる——或は据ゑられるは——與黨臭十分なる中正會の早速整爾其人なり。折角噂に上れる大竹の辭して出でざるは、廣島組の機嫌を損ねるを怖れたると、己れ適任ならざるを知れるが故なり。

▼早速は早稻田の出身なり。早稻田内閣の下には、一花咲かすべき素質を有す。參政官新置さるれば、即ち擧げられて海軍省參政官となり、短劍連中に伍して軍政の手習をなせり。未だ其の清書を終へざるに、再び擧がれて副議長となれり。早稻田内閣の

時、此の副議長を得たる、早稻田勢力の進展を示す者なりと雖も、果して其の任務を善行し得べきや疑なき能はず。

▼花井は辯護士なり、法律家なり、理窟屋なり。而して其の理窟を並べるに、一種の才辯を以てす。音量豊富なりと稱すべからざるも、明快なる辯舌能く議場に徹底す。加ふるに典故に通じ、慣例に熟するが故に、何等臆する所なく、冷靜沈著の態度を以て、片ツ端より之を處理す、議案を片付けるの手際、夫れ程に巧妙ならざるも、突發せる問題に對し、臆せず騒がず、之を穩便に處理する手腕鮮かなるものあり。亢奮議長島田の副として、好感を以て迎へられたるは、之が爲めなり。

▼素より好感と云ふ以上、花井の好評の何程か黨派感情の加味せるや論なしと雖も、島田の如く周章狼狽、若くは獨斷偏頗の失態を演せざるにあり。多年議會にありて、議事に慣れたる點より見れば、花井は島田の上にある可からず。而も島田以上の成績を顯はせるもの、彼れの公平無私、冷靜沈著の態度を以て、反對黨をも満足せしめたるに在り。

▼早速は政治經濟を専攻し、教師となり、雜誌記者を経て、新聞社長兼主筆となり、傍ら縣會議員、商業會議所會頭をも勤めたる人物にて、花井の一本調子とは稍趣を異にす。一は法律を凝視し來り、一は社會を觀察し來れり。一は狭く深く、一は廣く淺しと評し得ざるに非ざるも、早速も近來は下院の財政通を以て稱され、多少深さを増したるやに思はれたり。

▼彼れが海參となれるの時、吾人は彼れの適所に非すと評せり。就任日淺きに由らんと、彼れは吾人の評せし如く適所に非ずと見え、殆んど何事をも成さずして去れり。徒らに海軍々律の拘束を受けて、政談演說すら試みる能はず。さりて海軍々政の弊所短所に向つて、改革の火を點するを得ず、黙々として事務に没頭せるの觀あり。是れ、彼れが帝國財政の通ならんも、海軍々政に對して一雙眼を有せざるの致す所ならずんば非ず。

▼彼れの海軍を去りて副議長となれる、寧ろ難を捨て易に就けるものなり。不適所を脱して、幾分の適所を發見せるなり。彼れが縣會の經歷を以て、其の最適任なるを稱

する者あるも、縣會と議會とは管に大小廣狭の差のみに非ざるを以て、吾人は此の言に左袒する能はず。彼れに或意味の冷靜はあらんも、花井の沈著は求むべからず。彼れは其の伶俐鋭敏の一面を没するにあらざれば、或は島田の不人氣を招くも亦知る可からず。

▼唯早速に取るべきは、彼れは島田の如く饒舌せず、三郎の如く敵の憎惡を買ひ居らざるにあり。議事を行ふの手腕は、寧ろ今日以後の習熟に待つべきもの。されば、彼れが新様を好む思潮評論家輩の標題めく『海參より副議長へ』と進める將來は、今日何人と雖も即斷し易からざるなり。(大正四、一、六)

残忍嫌の湯淺警保局長

上

近時、月刊雜誌若くは單行本の發賣禁止の嚴命に接するもの、頻々として相踵ぐ。政治季節の去ると共に俄然發賣禁止熱の昂騰せる、一時政界に集中されし官僚の耳目

の、此の方面に轉じ來れりとも見られざるに非ず。彼等の取締をなす、機に應じ變に臨みて、寛嚴の手心を異にする、固より其の所なりと雖も、時に放漫に失し、時に苛酷に過ぐるが如き、所謂氣まぐれの處置を敢てすべからず。氣まぐれは無方針なり、亢奮性を帶ぶ。亢奮は逆上の氣味あり、血眼を意味す。冷靜に事理を判断するの能力を缺く。一時他を威嚇し、刺戟するの目的は達せんも、却て他の反感を挑發し、反抗を激成するに止まり、反省と警醒との効果を收むる能はず。

他を取締る、須らく他に取締らるるの心を持たざる可からず。他を制する、須らく他を容るるの量なかるべからず。然るに褊狹者の成す所を見るに、徒らに彈壓し、排斥し、拘束するを以て能事となすが故に、他を取締る能はずして、却て他に取締らるる奇現象を呈するなきに非ず。彼の防疫の厲行と云ふが如き、要は衛生の取締を嚴にし、病毒の傳染を防遏するにあるも、其の厲行を横使するに於ては、周圍の反感を惹起し、到底厲行の目的を達すること能はざるなり。何となれば、彼等の厲行を横使するの極、腸加答兒を以て赤痢なりと強ひ、横痘を以て黒死病なりと誤診し、寒胃を以

て腸窒扶斯なりと盲察し、重きに由つて處断するが故に、兩三日にして治癒するが如き輕症者を死に到らしむる等のことすらあり。爲めに其の厲行に對して惡感を抱き、道匿或は忌避を企つる者尠からざるを致す。厲行の弊の及ぶ所、厲行せざるの危險に數倍することあり。取締の呼吸を解せざる者のなす所、多くは此の類なり。

吾人は、近時の出版物取締を以て、斯の如き厲行の横使なりとは云はず。然れども其の取締の辛辣なる、彈壓に急なる、方針の遂行と稱せんより、一時的亢奮性を有するに非ざるやの疑なからず。苟も取締ると云ふ以上、其の性質の如何を鑑識し、薰蕕を判別せるの後ならざる可からず。文藝の作品に至りては、殊に甚深の注意を拂ひ、俗史的眼光を以て小觀することなく、須らく其の藝術的價值を大觀せざるべからず。然るに現下の取締を見るに、其處に何等の考慮なく、鑑別なく、唯一様に、無差別に、手當り次第に葬り去るに非ざるやを思はしむ。其の慌しく發賣を禁止すること、宛然傳染病の猖獗に對する、防疫厲行の觀あるは蔽ふ能はず。出版者は勿論、創作家と雖も、背後より不意に脅かされるの危懼と不安とを感せざるを得ず。谷崎の所謂「恐怖

時代』に非ずして、操觚界乃至出版界の恐怖時代を現出せり。

發賣禁止の理由に二あり。治安妨害は其の一なり。風俗壞亂は其の二なり。前者は多く政論乃至思想論の不謹慎を取締るに備へ、後者は多く文藝作品及び社會記事の奔放を取締るに適用す。其の取締ると云ふは、國家的若くは社會的見地より、安寧秩序若くは風教を維持せんが爲めに外ならず。されば政府者の之が取締を厲行するや、思想の進歩發達の如き、作品の藝術的價値の如き、素より問ふ所に非ず。一に警察眼、風教眼より觀察するの外、何等の理想眼、審美眼を加味する者に非ず。而して其の發賣禁止を決行するに際し、二者其の一の理由を擇ばざるべからざるに至れば、前者よりも後者を以てすと聞けり。蓋し治安妨害は高等的、人格的なるも、風俗壞亂は劣等的、低級的なるに由り、出版物の品位に多大の關係あるを以てなり。其の何れの理由にせよ、讀者の好奇心を挑發するの一なるも、前者の聲價の高まるに反し、後者の聲價の失墜するは争ふべからず。彼の少年少女、若くは婦人相手の雜誌の如き、一たび風俗壞亂の理由の下に禁止されんか、發賣部數頓に減ずるの例なり。斯るが故に惡辣なる當局者ならんか、政府反對紙を壓迫するに、其の取締權を濫用して、風俗壞亂の汚名を以てするも測られず。

近時風俗壞亂を以て發賣禁止の厄に逢へるに、政治文藝の「中央公論」あり、純文藝の「白樺」あり。頗る世人の耳目を惹けり。一は一篇の脚本を以て、一は一葉の挿畫を以て、其の理由の主なるものとせり。而して其の風俗壞亂の解釋も、從來の風教眼より以上に廣義となり。從來の淫猥・姦通以外に、更に殘忍の作物にまで及ぼす事となり。二誌は即ち、此の殘忍の脚本若くは繪畫を掲載せるが故に、官權の辣手に由りて市場より一掃し去らるるの已むなきに至れるなり。世之を以て、文藝取締眼の一轉化なりと云ひ、新記録なりと稱す。

警保局長湯淺倉平は、此の轉化の案出者にして、新記録の肇造者なり。所謂殘忍嫌の役人なり。是れ吾人の裏書を待たず、彼れが殘忍嫌なるの一事、其の言明せる、脚本「恐怖時代」禁止の理由に徴して瞭然たり。此の際、彼れの如何なる人物なるかを觀察する、多少の興味なしとせず。

出版物取締の権力者たる湯淺も、政府委員として帝國議會に臨めば、一個の官僚のみ。動もすれば、皮肉なる議員の一喝に會ひて、尻込みせざるを得ず。然れども、彼れは肚裡に、一字の「剛」を藏す。容易に他に屈する者に非ず。斯かる場合にも、彼れは激せず、慍らず、役人風の傲岸を以て之に對す。其の白を切り、不得要領の答辯を以て一時を糊塗し、其の場を切り抜けんとすること、依然として舊式の踏襲のみ。官僚の衣鉢を傳ふるを矜らば、即ち止む。少しく人物の大を成さんと欲し、若くは新人物として異彩を放たんと欲せば、舊式の官僚を以て甘んずべきに非ず。併し、其の際立ちたる異彩を發揮せざる所、或は尋常人の學び得ざる所なるや知るべからず。

彼れは素、凡山劣水の第一關たる福島縣の人なり。其の平凡多奇なき所、山水の感化を受けたりとも見るべき乎。然れども、東北の山河、由來一山百文なるに非ず。面も此の嗤笑を受けざるべからざる所以のもの、實に維新の當時薩長に敗北せるに在り。其の茫漠たる平野、蒼鬱たる森林、大河峻嶺、宛も大陸の風あり。未開荒蕪の地勢か

らずと雖も、猫額大の地を剩す所なく鋤かざる可からざる長州の比に非ざるなり。彼れにして斯の雄大と、茫漠との感化を受けたりとせば、單に外面的の吏才に止まる可きに非ず。必ずや大に將來に期する所あるべしと雖も、彼れは茫漠の一面を廓大せんには餘りに伶俐なり。平凡多奇なきに非ずして、實は餘りに輪廓鮮明なり。小廉曲謹に非ざるも、何程か其の嫌あり。官界に名を成さんとする、薩長何れの勢力かに資縁せざるの止むなしとするも、彼れは餘りに長州化せり。其の妻を長州の士分より容れ、努めて長州の勢力に接近し、其の勢力に資縁して擡首し來れり。されば今日、彼れを福島の産と云ふも、人多く容易に之を信せず。彼れを指して長州人と云へば、却て何人も之を怪まざるに見るも、如何に彼れ湯淺が長州系の色彩の濃厚なるものあるかを知るべきなり。

湯淺の帝大を出づる、偶ま明治三十一年の人材輩出期に際す。現下中央に於ける少壯吏僚の中堅は、此の期の人物に屬す。局長級の雄に、内務に土木局長小橋一太あり。文部に専門學務局長松浦鎮次郎あり。農商務に商工局長岡實、山林局長岡本英太郎あ

り。逓信に通信局長田中次郎あり。其他大藏に勅參佃一誠、神戸關稅局長野中清あり。縣知事に太田政弘、池松時和あり。更に臺灣民政長官に下村宏あり。就中小橋は彼れと競争の地位に立つ。曩に彼れが内相原の爲めに岡山縣に追はるるや、小橋は其の後を襲ひて地方局長たり。今又小橋の敬遠さるるや、彼れ再び内務に歸りて現在の椅子を占む。二者何れか早く次官たるべきかは、官界の齊しく興味を以て凝視する所ならずんば非ず。

夫れ湯淺は、事務長じ、且周到の才あり。博士古賀の豪放なく、有松の機略なく、太田の才氣なしと雖も、何等か世の耳目を惹かん程の仕事をかさんとの功名心なきに非ず。其の小手先の仕事の果して何程の効果を齎すべきかの疑はしきも、成さんとするの勇氣は愛せざるを得ず。今次の新記録の如き、彼れが殘忍嫌の性質に基くよりも、寧ろ此の功名心に驅られたるの結果に非ざる乎。將又、他に見る所ありて然る乎。彼れが周到の用意を以てして、寬嚴其の宜しきを得ざるの處置に出づ。其處に何等か動機の伏在するを想はざるを得ず。

彼れは三十二年滋賀縣事務官に任せられ、爾來兵庫縣參事官となり、鳥取・愛媛・長崎各縣の警部長となり、神奈川縣事務官を経て、内務事務官兼參事官となり、累進今日に至れるなり。其の官歴中に警部長のページを有するに徴し、警察眼乃至暗黒味の殘存せるものなしと謂ふべからず。其の警察眼の發達せる、多年警視廳に就職せる太田に及ばざるべけんも、一たび辣手を揮ふに於ては、其の用意の周到なるだけ、一段の辛辣を呈するなきを保せず。彼れは今や年齢四十三、肉體漸く充實して、野心の火新に盛んならんとするの時期に際せり。彼れの辣手を揮ふも是れよりなれば、彼れの功名心を満足せんと欲するも亦是れよりなり。彼れの總て成さんと欲する所を成す、今日以後の努力如何にあり。昨日の經歷は、今日以後、乃至明日の功業を成さんとするの準備に過ぎず。

曾て地方局長たりし時、彼れは意氣揚々として得意の色あり。而も彼れが自ら手を下して、何事をかませる。地方官の更迭か、省内の改革か、吾人不幸にして多く聞く所あらず。唯世人は彼れが少壯にして此の地歩を占めたるに驚異し、何等かの非凡を

其の器に發見せんとせしのみ。然るに彼れを前の床次に比し、博士水野に較する時、其の手腕必ずしも稱するに足るものあるを認めず。現在の椅子、或は比較的彼れの適所なるべし。其の人物、手腕を小橋に比すれば、一長一短、兄たり難く弟たり難しと雖も、級友岡に較する時は、其の識見に於て或は遜色あり。彼れにして今後經驗を積み、研究を重ねるに於ては、良局長の名を成す、敢て難しとなさず。吾人好んで彼れを他と比較し、其の優劣を是非する者に非ざるなり。

下

地方局長としての彼れは、殆んど何事も成さずして去れるも、警保局長としての彼れは、荐りに何事をか成さんとしつつあり。風教上の取締の如き、畢竟するに其の序幕に過ぎざるなきや。若し果して然らんには、彼れは序幕の後に當然來るべき第二幕、第三幕に就て舞臺上の技倆を見よ。序幕の失敗を以て、直ちに全體の失敗となすは、未だ湯淺を解せずと做すや知るべからず。然れども、序幕の失敗にケチが付き、其のため甚しき不評を招き、自らも亦萎縮不振、遂に失脚せるの例尠からず。彼れの戒心

せざるべからざるの點、實に茲に在り。

凡そ出版物の取締に切要なるは、其の出版物に對する鑑識眼なり。苟も出版物を取締らん程の者は、其の經世の見地よりすると、藝術の見地よりするとに論なく、鑑識の眼光少くとも常人の上にあらざる可からず。世俗に迎合するを是れ事とする俗惡の出版物と、警世的大文字と、藝術上の作品とを同一視し、其の薰蕕を判別するの能力を缺くの徒は、斷じて出版物鑑識の資格を有せず。總て鑑識には、其の物に對する智識と趣味と識見とを要す。文藝思想の產物の鑑識に於て、殊に然りとなす。一知半解は愚か、其處に何等の理解なく、趣味なき人々が、器械的に警察眼を活動し、風教眼を展開して、其の取締權を横使用するに於ては、却て文教の發達を阻害するの結果を將來するなきを保せず。吾人は彼れを以て、其の取締權を濫用する沒趣味、沒眼識の徒なりと指斥せざるも、又其の鑑識眼の非凡を信ずる能はず。何となれば、彼れは從來の取締以上に徹底せる理解とを有せざればなり。

唯彼れに一事の注目すべきは、其の取締の從來の放漫に失せず、何程か周到なる用

意の上に置かれたるにあり。尤も斯の『周到』は、彼れが性格の反映に外ならずと雖も、蓋し潛かに期する所あるなり。故に彼れは徒らに盲判を捺押するを敢てせず、其の發賣を禁止すべき出版物に對しては自ら之を讀破し、後其の可否を決定せずんば非ず。然れども、彼れの鑑識にして下僚と多大の懸隔なく、下僚の警察眼風教眼の上に一步を抽んでざらんか、如何ぞ公平の見地より趣味の批判を加へ、其の價值を發見するを得んや。既に其の價值を發見するを得ず、焉んぞ能く傑作なりや否やを内容的に鑑別するを得んや。唯其の出版物を外面的に觀察し、深く其の精神乃至生命の存する所を探究せず、無思慮に、稗粟一様に葬り去るに過ぎず。

吾人素より彼れの出版物の保護者に非ず、藝術の獎勵者に非ざるを知る。又、彼れが長官の令を含み、法規の命する所に從ひて、治安風俗の兩面より觀察して之が取締をなせば可なるを知らざるに非ず。而も彼れに對して反省を促す所以のもの、彼れが比較的進歩せる頭腦を有し、考慮の餘裕を有するを知ればなり。彼れが風俗壞亂の範圍を殘忍にまで擴張せるは、強盜殺人等の續出する傾向を觀取し、漸く社會に瀰蔓せ

んとする惡風潮を防遏せんとする手段に外ならざること、略推測するに難からず。然れども斯の惡風潮は、果して出版物の影響なりや。はた小説・脚本・繪畫等の感化なりや。吾人は其の根源の生活難と、及び之より生ずる過勞状態、或は精神の異常より來れるを知るも、文藝作品等が何程の惡影響を及ぼせるかを疑はずんば非ず。假に影響ありとするも、殘忍を描寫せるもの谷崎の『白樺』の『一挿畫』のみに非ざるなり。血の滴るを以て殘忍の標準とせば、十字架上の耶蘇を描ける宗教畫の如き、犠牲を背景とせる『肉彈』の如き、壯烈鬼神を泣かしむる日本海戦を描ける『此一戦』の如き、將た世界の歴史に續出する戦争記事、殊に宗教戰の如きも亦、其の部分的の觀察を以てすれば、何れも殘忍の範圍外に出づるものに非ず。更に軍記物語及び俠客傳等に至りては、慘虐の血潮の淋漓たるを見る。而も一方に於て極力軍國主義を唱道して、國民の剛毅慍悍を冀ひつゝある我が當局が、單に血を流すの記事を『殘虐』の二字に包括して、頻々之が禁止を斷行するが如き、抑々何等の矛盾、何等の撞着ぞや。更に今日の新聞紙上に散見する姦通・強盜殺人・慘死等の記事に至りては、一讀戰慄を禁

じ得ざるが如きもの尠からず。殘忍嫌の彼れは、果して之を如何と見る。

今、讀書界の現勢を一瞥するに、純文藝の愛好者は少數の智識階級に限らるれども、戦記・俠客傳の類は一般的の讀物なり。殊に新聞紙の如きは、其の讀者の多數なる、到底雜誌及び單行本の及ぶ所に非ず。然るに彼れが風教眼は、藝術的作品の印象の深きを怖れて、他の俗悪なる出版物の弊を認めざるか。縦令鮮血の彼れが警察眼を脅かす者なしと雖も、徒らに時好に迎合し、衆愚の好奇心を挑發する射利的出版物にして、發賣禁止をなすの可なるもの多々あり。而も周到なる彼れが、是等無價値の書を默認し、文壇を光彩する作物に向つてのみ嚴なるは何の故ぞ。既往は追ふべからず。今後彼れが眼を大局に注ぎ、其の取締の寬嚴宜しきを圖り、公平無私の態度を以て蒞み、發賣禁止の爲めに發賣禁止を敢てし、宛然血を見て狂ふが如き殘忍を敢てするなく、作者及び出版者の利害も亦其の考慮の中に置かん事を望まざるを得ず。(大正五、三、一八)

一たび居据れる大隈首相

一

首相大隈の辭職内奏を以て、彼れの腹藝なりとする者と、單に風評に過ぎずとする者と、二様の觀察あり。一は現内閣の反對派、及び多數國民の是認し、若くは推斷する所にして、一は現内閣の與黨及び少數同情者の切りに辯じて止まざる所なり。其の真相の何れにあるかは、現下の如き政争の爲めの政争に熱中し、黨情の紛糾錯綜せる政界にありては、簡単に判断する能はずと雖も、少くとも後繼首相問題の政界の視聽を惹き、元老間の話題となり、天聽にも達したるの事實は否定すべからず。然るに之を辯ずる者は、瓢箪より駒の出でたるもの、素より嘘より出でたる誠に過ぎずとなせども、之を非難する者は、畢竟するに老獺爺の仕組める一狂言にして、其の意外に出づるに於ては、彼れは不本意ながらも辭職せざる可からざりしならんと嗤笑せり。而も首相大隈は、政界の驟雨一過の後初秋の纖月を仰いで哄笑一番せり。宛然是れ、老狸の月明に對して、腹鼓を搏つの感なくんば非ず。

首相大隈は大言壯語の人にして、腹藝の人に非ずと雖も、亦一種の腹藝を有す。而

して其の腹藝は、時に悪戯となり、時に陰險となり、時に詐謀となりて露はる。一體佐賀人には、二種のタイプあり。一は腹藝の人にして、深黙寡言、誠實を以て人に接し、信望を以て人を率ゐんとす。一は大言の人にして、才氣縦横、虚言を耻とせず、狡智猜策を弄して他を懐柔し、操縦せんとす。一は信望上の首領となり、能く久しきを保つべしと雖も、一は當面の一時を糊塗するに止まり、其の箔の一たび剝落し來れば、又以て如何ともすべからざるの窮地に陥ること往々なり。前者は故松田正久之を代表し、後者は侯大隈重信之を代表すれども、今日の侯は自己本來の型に、更に他の特長異色を加味せり、されば彼れは大言を以て一時を瞞過すると同時に、腹藝を以て當面を魅了するの工夫を積めり。故に單純に、外面的に彼れを観察して、彼れに些の腹藝なしとは斷する能はず。

今次の事、彼れの腹藝の幾何程度まで働けるかを知らずと雖も、多少の腹藝を加味せるは疑ふべからず。既に多少の加味あり、其の辭職内奏を以て、彼れが腹藝の全部なりとは猜するを得ず。吾人の見る所を以てすれば、辭職内奏の事、半ば風評にして、

半ば腹藝の産物なり。若し半ば腹藝の發動に非ずして、全然他の陰險なる手段に孕胎せりとせば、大言彼れの如きにして、口を緘して、秘密裡に葬るの理由はあるべからず。彼れは周圍の迷惑を慮り、左右を顧みて、狐疑逡巡する程に惡辣に對して用意周到ならざればなり。然るに敢て之を發せざるは、反對黨に乗せられるの危険あると、官僚派の術中に陥るの虞あるを知るに由る。是れ彼れが羹に懲りて膾を吹くの愚にあらずして、膾は即ち膾として食はんとするの恰惻に外ならず。彼れは官僚の羹を吹きつゝ、政黨の膾に箸を下し、二つながら巧みに之を味ひ、以て自己の滋養として之を攝取するに汲々たり。年齒八十、體力未だ衰へず、頑健壯者を凌ぐの概あるもの、如何ぞ羹に懲りて輒く箸を投ずる者ならんや。彼れは圓滿辭職を執行せんよりは、寧ろ執拗に首相の椅子を頑守し、勢ひ止む能はずんば、官僚に對して最後の血戦を辭する者に非ざるべし。唯彼れの之を決行せざるは、血戦の失ふ所多くして利する所少きを知るが故に、努めて戰鬪を避け、有利なる條件の下に妥協せんと欲しつゝあり。今次の辭職問題の如き、要は此の妥協の下に、官僚の面目を立つると共に、自己の地位を確

保○せ○ん○と○す○る○の○計○を○な○す○に○外○な○ら○ず○。

二

新紙の傳ふる所に據れば、首相大隈の辭職内奏は、六月二十三・四日の頃なり。而して、此の二十四日は、伯寺内正毅が新に元帥を授けられたるの日なり。首相即ち閣下に伏して、後繼内閣の組織者、伯寺内を以て最適任なりと奏上せりと。或は曰く、子加藤高明をも後繼者の列に併せ加へたりと。更に其の事情を説明して、翌二十五日、地久節奉賀の爲め參内せる侯松方に對して御下問あり、夫れより宮相波多野等の活動を見るに至れりと。此の説の果して仲小路廉、有松英義、或は子三浦梧樓の一人若くは數人より洩れたるや否やを問はず、餘りに芝居の筋書めきたるの感なき能はず。是れ其の事實の真相を衝き止むる事なく、他の風説——専ら官僚派の流布せる——を綜合して、尤もらしく編み成せるが故なり。

彼れ大隈の辭意を仄めかす、此頃に始まれるに非ず。其の眞意は暫く措き、口癖の如く適當なる後繼者だにあらば、所謂圓滿辭職を執行して、後進の爲めに進路を開か

んと公言し居たり。彼れの高遠の理想を高唱して、而も非立憲的行動に墮するが如く、其の言に幾許の價值を附し、幾許の信を措き難きも、彼れは爾く常に左右の人々に喋喋せり。殊に御大禮當時は、此の大任を果したる上にて圓滿辭職をなすも可なりと、黨人にすら洩せる事あり。必ずしも現職に執著し、獅噛み付かざる者の如くなるも、其の實飽までも首相の要樞に座し、與黨の基礎の確立を待たんとするに似たり。與黨の人々も亦自黨發展の必要上、可成長く侯大隈をして其の椅子を支持せしめんとし、陰に陽に其の方策を講じつゝあり。若し侯が圓滿辭職の意を醸すこと能はずとせば、其の際必ず子加藤を後繼者に推薦し、以て政權を緊握して離れず、黨勢の膨大を維持せんの後圖をなすべく、裏面運動をなすを怠らず。侯自身も亦自己の將來の爲め、與黨の將來の爲め、自己の辭職する際は子加藤を後繼者に推薦せんの底意あり。此の事大浦事件の聯帶責任を主張し、外相の椅子を去るの際、子加藤の侯大隈と默契する所なりと云ふも、其の默契の有無如何に拘らず、子加藤を推舉するは、侯の子に報ゆる所以にして、又立憲的行動の當然に進むべき路ならずんば非ず。されば子加藤の後繼

首相となるの見込なき限り、彼れは自ら好んで圓滿辭職を成すものに非ず。加之、彼れは今春の議會を無事に通過し、與黨の大多數を擁するに拘らず、圓滿辭職を成すが如きは、立憲的行動に非ずと公言せるに徴するも、彼れに辭職の意なきは明かなり。併し、大言侯の事なれば、いつ何時其の主張を裏切りて、自由行動を取るを測られずと雖も、其の獅嚙み付く事に於て人一倍に猛烈なる彼れは、容易に圓滿辭職をなすべしとは信する能はず。尤も圓滿辭職をなすに於ては、日露新協約既に成り、功を以て侯爵に陞叙されたる今日、其の絶好機會たるに相違なしと雖も、逆境に處してすら桂冠を肯んせざる彼れが、順潮に乗じて勇退せざるべきは勿論、民意未だ吾輩の内閣を去らず、國家の大事を控へ居るの際、一身の安全を思ふが如きは臣子の分にあらずと強辯するは知れ切つた事なり。夫の辭職の内奏の如き、若し有りとせば、是れ彼れの腹藝に外ならざるべく、然らずとせば、彼れの多辯饒舌が偶々官僚一派の策士の利用する所となれるなり。

聞く所に據れば、官僚一派は侯大隈の政權を頑守し、自派の勢力日々に盛まるを憂ひ、如何にもして現内閣を倒壊せんと試み、百方策を講じつゝあり。而して非政府黨たる政友會の徒も亦、同志會の横暴を憎み、之を屠らんとせること一再ならず。此の官僚一派、政友會、及び別に陰謀團の稱ある櫻田俱樂部一味の徒は、其の主張は異なるも、現内閣破壊の一事に共鳴する所あり。侯松方を起して、現内閣の不信任的内奏を敢行せしめたるにより、遂に宮相波多野等の活動を見るに至れるなりと。彼れは元清浦系の人物なるも、現下侯大隈と昵懇の關係あり。官僚一派の利益をのみ圖りて、侯大隈を排斥するものに非ず。否今日に於ては、寧ろ侯の宮中に信任淺からざるを觀取し、靡然として侯に傾倒せるの狀あり。曾て侯は隈板内閣の際、伯板垣が辭表を捧呈せるに拘らず、彼れは平然として首相の椅子に頑張り、而も勅答に副はざりしが故に痛く宮中の信任を失し、殆んど政治的致命傷を蒙り、閑雲野鶴を伴侶とするの止むなきに至れり。然るに大正政變後は再び政界に蘇生し、宮中の信任新に深きを加ふるに至れり。是れ恐らくは長閑の專横其の極に達し、其の勢力を驅逐するに非ずんば、國家に及ばす所の弊賣の勢からざる者あるに由る無からんや。而して之を驅逐するも

の、一大隈を措いて他に其人なきに由るに非ざるなきや。彼れの輿望、内閣組織當時の如くならざるに、其の印綬を解かれざるは、彼れの獅嚙み付き主義以外、他に彼れの存在を必要とする理由の存するものと思はざるを得ず。

既に侯大隈の辭職内奏にせよ、侯松方の不信任的内奏にせよ、有力なる一石を政界に投じたる以上、其の平調を破るべきは當然なり。果して公鷹司の公山縣往訪となり、元老政客の往復となり、官僚一派の策士の暗中飛躍となり、天候の變調と相待ちて、政界の驟雨將に現内閣の障壁を崩潰せんとせり。而も此の驟雨の七月五日伯寺内の入京前後に猛襲し來れるを見れば、官僚策士の運動と何等かの關聯を有するや必せり。彼等は切に伯寺内を擁立せんとし、侯大隈も、亦伯寺内を後繼者に推薦せりと稱する以上、伯にして一諾せんか、政權の授受は圓満に了せらるべき筈のものなり。其の授受の立憲的なるや否やは茲に論せざるも、兎に角斯くして授受を了するものとせば、侯は即日公式に辭表を提出し、伯寺内に内閣組織の大命が下るべき順序なり。然るに侯は内閣を投げ出さず、其の後繼者に伯を推薦する以上、伯は宜しく現内閣の政策を

踏襲し、現内閣の與黨を後援とすべきの條件を以てせるに似たり。是れ伯は勿論官僚一派の満足する能はざる所にして、侯の欲せず、與黨三派の又好まざる所なれば、何處まで進むと雖も、妥協の一致點を見出し得べきに非ず。然らば侯を全然排斥し去りて、伯を擁立し得べきやと云ふに、今日に於ては公山縣の勢力を以てするも、如何ともすべからざる事情にあり。侯大隈の行詰りて、内閣を投げ出すに非ざるよりは、手の付けんやうもなく、再び居据りの儘に居据らしむる事となれり。

三

侯大隈は斯くして現内閣を支持し得たるも、其の難關は決して除却されたるに非ず。現内閣の難關は難關として、依然として其の前途に横はれり。其の難關とは他に非ず、來年度の豫算編成是れなり。現内閣の倒壊せんとして、倒壊を免れたること二回あり。第一回は即ち本年度豫算討議の際、上院の反抗によりて不成立に歸せんとせしを、公山縣の斡旋に依りて、辛うじて其の難關を切り抜け得たり。第二回は即ち大浦事件にして、立憲の本議を辨へなば當然引責辭職すべかりしを、其の椅子に戀著するの結果、

纒かに内閣の一部改造を試みて、厚顔にも居据りと決したり。此の時彼れは、政治道徳を解せざる者として、一世の指揮を蒙れり。而も下院に大多數を擁する彼れは、民意を高唱して平然たりき。此の事既に過去の問題に屬し、何等將來の難關と見るべからざるも、第一回の妥協に上院と約束せる所の要件は、之を容るゝと否とに由りて、現内閣の死命は制せらる。當時の要件は、次期議會までに國有鐵道の軌制を決定すること、減債基金を復舊すること、製艦費全部を豫算に計上することの三箇條にして、若し之に満足を與へざるに於ては、明年度の豫算を無事に協賛せざるべきは言を須るす。加之、陸軍省が露國に兵器を供給せんが爲に執れる從來の會計手續を不法とし、明年度の豫算編成期までに之を改善せん事を強要せり。されど陸相は、其の手續を違法に非ずとして、上院の強要を容れざるに似たり。製艦費に關しては、上院の要求通り全部豫算に計上せる模様なるも、鐵道軌制に對しては、廣軌尙早を唱ふるもの政府部内に多ければ、或は暫く現在の儘となし置くに非ざるや。若し爾かする時は、上院には廣軌論者多ければ、其の不機嫌を買ふや逆睹するに難からず。如上は無難に解決

するも、せざるも、死命を制する程の大問題に非ざるも、其の抗争の焦點たるべきは、減債基金問題なり。侯大隈が再度の居据りに對する鬱憤は、必ずや此の問題に就て洩さるべく、現に明かに其の氣勢を高めつゝあり。減債基金の復舊を斷行せざる限り、上院は到底明年度の豫算を無事に通過するものに非ず。然らば政府は上院に讓歩し、其の強要を甘受せば可なるも、現内閣は其の面目上、今更之を復舊すること能はざるの狀態にあり。假に現内閣は涙を飲み、垢を嘗めて、其の強要に聽從するも、反隈感情の熾烈なる上院は、何かに苦情を付け、現内閣を追窮せずんば止まず。況んや對支問題と云ひ、選舉法改正問題と云ひ、言論尊重問題と云ひ、現内閣の稅政背信等を責むる材料に乏しからざるに於てをや。下院は大多數の與黨を擁するが故に、政府提案の通過には、多くの苦慮を要せずと雖も、民意漸く傾ける現内閣は、決して少數黨を侮蔑する能はず。今次の居据りは、難關を切り抜けたるに非ずして、難關の上更に難關を築き、反隈感情を激成せるに過ぎざるなり。

唯侯大隈の此の難關を除去する方法は、上院の感情を融和するにあるも、彼れの

政權を頑守する以上、容易に望み得べからず。彼れは今春上院と妥協の際、暗に辭意を洩したる結果、纔かに三箇條を表面の理由として折合ひたりと稱され、今次の辭職内奏の如きも其の暗約履行に外ならずと風評されたる程なれば、彼等は侯大隈の退隱を見ざる限り、其の辛辣なる運動を中止すべしと思ふ能はず。何となれば、彼等は自家存在の必要上、自派勢力の發展上、現内閣を屠るの他に良策なければなり。侯大隈が二年有餘の執政に依り、勢からず長閑の勢力圏を侵略されたるに、搦て、加へて三黨首領の會商となり、元老排斥を殆んど公然に決議され、其の勢威昔日の如くならざるを見ては、公山縣乃至、伯寺内、子平田の徒は、手を束ねて安閑たる能はず。何とかして、之を挽回せんとするは自然の數なり。是に於てか、彼等は伯寺内の擁立を策し、小異を捨て大同に就き、以て長閑の爲めに圖る所あらんとせり。然るに、本尊の公山縣は、政争の爲めに政争を惹起せりとの誤解と非難とを避けんと欲し、進二無二現内閣の倒壊を好まず、其の自ら窮地に陥り、自滅するの目を持たんとする者の如きも、國家の前途に對して憂心忡々たるものあり。嚴に首相大隈の行動に注意し、期を

見て倒壊せんとするの氣勢は蔽ふ可からず。高遠の理想を力説する大隈たるもの、須らく憲政の常道に則り、内閣の面目を毀損することなく、官僚一派と最後血戦を試みて後斃れん事を望まざるを得ず。苟も衰龍の御袖に隠れ、若くは妥協苟合を以て一時を糊塗するが如き、陋劣なる手段の一切は飽くまで避けざる可からず。(大正五、八、一八)

政争戲劇中の人々

▼伯寺内が元帥になつた事を新聞で知つた日井哲夫は、颯と顔色を變へたが、忽ち旅装を整へて朝鮮に赴いた。當時日井は早計にも、伯が元帥府に祭り込まれては、最う政界と絶縁せざるまい、さて困つたものだと思つたのである。彼れは櫻田倶楽部の旗將で、大隈内閣を倒壊した上、伯を首相に擔ぎ出さうと目論んで居る一人だ。若し伯が政界に出る事が出来ないとすると、其の計畫が全然齟齬する事となるから、一應

會つて置く必要があつたのだらう。彼れと伯との談は、どれ程までに進んだ、突ッ込んだものであつたか知らぬが、兎に角寺内は期を早めて、匆惶と上京する事となつた。表面の理由は元帥陞授の御禮言上の爲めと云ふ事であつた。

▼寺内入京後の政界は、今にも政變が有りさうな取沙汰で、櫻田倶楽部の連中は秘密運動を始める、上院の策士等は暗中飛躍を試みる、政友會の陣笠連も氣勢を得て動き出したが、同志會は夫れ程狼狽した様子も見えなかつた。殊に首相大隈の辭職内奏に就ては、誰が其様な事を言ひ觸したのかと云はぬばかりに、一向平氣で居た。反對黨が現内閣の瓦解が目睫の間に迫つたやうな輕躁な態度で、嬉しさうに騒ぎ廻つて居るのに、與黨が何處を風が吹くと云ふ様な顔で、濟まし込んで居たのは、面白い對照であつた。之を見ても、與黨總務の安達などが多寡を括つて隱謀團の白井等の運動を對岸の火事のやうに眺めて居た事が分る。

▼安達も白井も、以前は大同倶楽部で、兩々相下らぬ勢力を持つて居た。安達は裏面で書策もやり仕事もやるが、決して表面に立つて、花やかな活動振を見せるやうな事

は無かつた。何か仕事をやつても、常に知らぬ顔をして居た。白井も可なり策の多い人間だが、安達と反對に表面に立つて働いて居た。夫れに白井は安達よりも懐合が大きく、首領風な所があつた。最初は安達とも衝突せずに、一種の辣腕を揮つて、黨勢擴張などをやつて居たが、追々其の勢力の加はるに従つて、安達の忌む所となつた。後に白井は瀆職罪でやられたが、罪を自分一人で引ツ被つて、累を他に及ぼさなかつた。そんな男衆的態度が、出獄後政界に復活し得た遠因となつてゐるやうだ。が、一たび瀆職罪を犯したと云ふ事が、彼れの代議士として世間に廣い顔する事の出來ぬ所以である。

▼寺内は何う云ふ緣故で、白井と接近したのかは知らぬが、まさか白井の前科者で養度胸の据つた所が氣に入つたのでも無からう。凡そ官僚政治家は、どんな猛惡な人物でも方便的に使用する事があるから、或は白井なども其の意味に於て重寶がられて居るのかも知れぬ。白井の傘下——と云つては失敬かも知れぬが——には、秋山定輔や長島隆二等が居るが、白井のやうに何處にも圓々しく出雲婆ると云ふ事はせぬ。秋山

は鼻策士で、眼を光らせて働いて居る。長島は演説と自動車が好きで、演説なら何時でも自動車で飛び出すが、株式で損をしてから氣焰が衰へ掛けた。夫れに折角力とした侯井上が寂滅したので、此の方面から材料を得て政府を威嚇する事も出来ねば、元老を説き廻る事も出来ず、何蚊に付けて不便だらうと思ふ。先づ男後藤新平と聲息を通じて、政界に飛躍する位が關の山だらう。

▼寺内の入京と前後して、侯松方が東京停車場に老軀を現はす、侯西園寺が瀟洒たる夏姿で都の人となる、政界の人々は夫れを意味ありさうに眺めた。松方は數多の兒孫の中に御芽出たくなつて居れば可い年だが、まだ却々野心があつて、最う一度首相になつて見たいやうな考も持つて居る。薩派の權兵衛が惜しい所で退隱した後は、松方は薩派を代表して立つてる様なものだ。そこで、屢政友會や、薩派の連中から突つき立てられ、推し立てられて、氣焰を吐く。國家の元老と云ふので、宮中にも信任がある。公山縣ほどの勢力は無いが、山縣並に現内閣に横槍の一本位は突ツ込む事が出来るのである。今度も其の一本を突ツ込んだので、首相大隈も尠からず面喰つたやうだ。

元來は大隈の後輩だが、今日では却て大隈を目八分に見て居る。

▼西園寺も久しく遠勅の廉で謹慎して、政界に顔を出さないで居たか、政友會では最う大抵擔ぎ出しても可い時分だらうと、都合よくは後繼内閣の首相に擔ぎ兼ねまじき氣勢である。第三次桂内閣の最後に際し、政友會總裁として彼れの取れる行動は、遠勅でも有らうが、實は官僚一派に陥れられたやうなものだ。曾ては侯大隈も隈板内閣瓦解の際に天聽を欺罔し奉つたやうな事があつて、政界から失脚するの餘儀なきに至つた。が、今日は宮中の信任を新に得て、首相の印綬を佩びて居る。或は其の御信任が公山縣の上にあるとさへ傳へられて居る。西園寺は御信任を失したのでは無く、遠勅の汚名を受けて、自ら相濟まぬ事をしたと謹慎した程度にあるのだから、政界に復活の望の無い事はないのである。首相的人物の拂底な今日、彼れを埋木とするも惜しい事には相違ないが、果して彼れが政友會の註文通り出慮するや否やは疑問である。今次の上京も、政争關係ぢやなく、避暑序に立寄つたので、別に深い意味は無からうと思ふ。

二

▼一時下火になり掛けた政局展開運動は、首相大隈が湘南の別墅に公山縣を屢訪した時分から再び熾烈となり、伯寺内や内相一木までが鳩首凝議するに至つた。さあ政權授受の私議が始まつたと云ふので、政界の遊星、惑星等が、一時に運動を始めた。到頭公山縣が病後の老軀を起して歸京し、參内する事となつた。表面は病氣御見舞の御禮言上の爲めと云ふ事であつたが、單に夫れのみでは無く、深い意味が含まれて居たのである。伯寺内も公山縣より稍遅れて參内した。世間は最う政權授受の話で持ち切り、伯寺内の尖頭が首相の椅子を占めるも、間の無い事のやうに思はれた。併し政局展開運動は時機を待つより仕方無いもので、機運の未だ熟さない内に無理矢理に寺内を推し立てやうとした所で、然う旨く行くもので無い。結局は侯大隈に背負投を喰はされた容となつて、有耶無耶の裡に葬られて了つた。へん、どんなもんだい——斯う云つて、侯大隈が笑つた事であらう。

▼内相一木は山縣系の人物で、子大浦の後釜を狙つて、首尾よく内相の椅子に据つたのも、公山縣の御聲掛りで、首相大隈も亦元老山縣の御機嫌を損ねぬ爲めの用心であつたさうだ。つまり彼れは、現内閣の心張棒であり、用心棒である。上院の操縦は、子大浦のやうに旨くは行かないにしても、先輩には子平田東助が居る。子は公の腰巾着である。子に泣き付けば、何とか都合し、考慮して呉れる。一木は夫れを唯一の頼りにして居る。大隈は好まぬ乍らも、彼れを要樞に据ゑて、上院に當らせて居る。あれ程内相の地位を望んで居た大石正巳を排し去つて、彼れを迎へたのは、元老迎合と上院操縦との二個の便利から打算したのである。一木も亦飽迄大隈と死生を共にするの意氣は無いが、山縣系の勢力を支持する爲めに現内閣に割込んで居るのだから、何時でも尻に帆かけて逃げ出す覺悟はして居る。大隈が獅噛み付くやうな執著は無い。寺内内閣でも、平田内閣でも、官僚内閣さへ出来れば、夫れに飛び込めるから、辭職に未練は無いのである。で、政界が變調を呈すると、公の許に早速馳け付ける。實に重寶な、併し大隈には餘り頼みにならぬ用心棒である。

▼寺内内閣が出来ると、割り込みさうな顔觸の中には、安廣伴一郎が居る。都筑馨六

なども、一度は大臣になりたいであらうが、侯井上と云ふ後援者が無いから問題になるか何うか分らぬ。安廣は公山縣の寵愛が多少有るだらうから、一花咲かせる事も出来よう。彼れは今次の變調を嗅ぎ付けるや、矢張公を訪問して居る。小松原英太郎は再び大臣にならうとも思ふまいが、裏面にあつては可なり運動をやつて居る。長閑の爲めとあれば、彼等は何事に依らず結束して活動する。安廣や小松原も亦、其の結束中の一人で、比較的鼻息の荒い方である。安廣は龍峰と號し、漢詩を作つて得意がるが、曾て安伴と云ふ綽名を附されて輕んぜられて居た。吏才に富んで、伶俐な人物であるが、器局の大きくないのが短所である。

▼官僚系の策士となると、頭の白い所では何と云つても子平田である。一見君子風で、學者肌のやうだが、奇策縦横と云つた風な切れ味の好い剃刀を持つて居る。上院でも可なり幅が利いて居る。反隈感情を煽つて、現内閣に肉迫させる位の藝當は朝飯前で、操縦振は巧妙なものである。蒲柳の質ではあるが、一旦事に當れば却々根氣よく活動する。少しも輕卒な點はなく、策を運用するに周到な注意を以てするから然う見苦し

い失敗は無い。伯寺内と反りが合はぬやうに云ふ者もあるが、伯と權勢を争つて、反噬するやうな無謀は敢てしないのみならず、恐らく寺内が内閣を組織する場合には、必ず之を助ける事と思ふ。首相としては或は伯に勝るが、陸軍を抑へるだけの勢力は持つて居ない。互に一長一短が有るから、相援助し合ふ事が無ければ、長閑の調和が旨く取れまいと思ふ。

▼男後藤の狂奔も久しいものだが、今以て諦められぬと見えて、政局の變調を呈する毎に出頭没頭する。餘り色氣が多過ぎるので、飛んだ所で味噌を付ける。仲小路廉、有松英義等は、一廉の政情通を以て任じて居る。有松は樞府輪長で、却々の腕利きである。併し彼れが如何に奔走した所で、公山縣が動きさうにも思はれぬ。公を動かす者は、若い所では、矢張田中義一とか、一木とか比較的毛の生へた連中である。有松などは、まだほんの小走り役位に過ぎぬ。仲小路も演説をやらせれば旨いが、運動の方は拙い。餘り頭がよすぎるので高く止まるのか、高く止まるので毛嫌されるのか、餘り通りが善く無いやうである。一騎打の鬪將としては、男後藤も及ばぬ程の精悍を

發揮する。子三浦は様子を見る爲めに、方々を歴訪したやうに云つて居るが、滿更夫れのみでは無さうだ。彼は大隈内閣の永續を好まず、さればとて元老を後援とする寺内内閣も歓迎せぬ。乃公出ですんば蒼生を如何せんと云ふ概が、其の片言隻句の裡に仄見えるやうである。

三

▼首相大隈は破裂せぬ爆裂彈を投げ付けられたり、天下の攻撃を一身に受けて、出入の道筋は警官の警衛に待たねばならぬやうになつて居るが、彼れの下僚や實業界には極めて受が好いさうだ。其の原因はと云へば、呉れる物を惜まないからである。其の呉れ方は、夫の御大典の關係官吏に與へた慰勞金でも分る。高等官一等位の處で、何千圓と云ふ金を貰つて居る。彼れ自身も一萬何千圓と云ふ大金を受けた筈である。濫賞の傾向はあるが、少額より多額の賞與を得て喜ぶは、普通の人情である。此の徒が大隈の懐合の大きいのに敬服するは、如何にも尤な次第である。實業界も亦然りて、殆んど總花主義の優遇を受け、男爵を授けられた者、位階勳等を與へられた者、一寸

數へ切れぬ程澤山であつた。斯うして商人輩の機嫌まで取つて居るのだから、彼等が現内閣の永續を希望するは、打算上當然の事である。

▼濫賞と云へば、日獨戰役の論功行賞の如きも亦濫賞の傾向がある。一體ならば歐洲戰がまだ終了しないのであるから、行賞には尙早の氣味がある。然るに首相大隈は、そんな事には一向頓著なく、論功行賞を奏請した。加之、日露戰役に淮じてやると云ふ、大袈裟な事をやつて居る。今次の日獨戰役と、日露戰役とは殆んど比較にならぬ程小さい。其の兵を動かす事に於て、其の日數に於て、其の面積に於て——而も賞を受ける者の數は、可なり多いのである。殊に衆議院議員に至つては、日露戰役の當時に比し、其の數も多く、其の勳等も高いのである。即ち解散前の議員も、新選の議員も共に其の賞に預り、初叙の者は勳四等に、既授の者は勳三等に陞叙された。御大禮當込で議員になつた者も有るのだから、此の行賞を喜ぶ者が定めて多い事であらう。議員操縦の政略としては誠に結構であらうが、心ある者は之を聞いて慨嘆した。現に前代議士某氏の如き、身に寸功なくして勳三等を受くるを愧ぢ、辭退する積りだと云

つて居た。

▼日獨戦役と日露新協約締結の關係者の授爵、又は陸爵の申請を、首相大隈が宮相波多野の許に提出した時、他の授爵又は陸爵の人々の氏名の上に爵位を大書してあつたが、自分のは氏名を書いただけで、侯爵とも何とも書かず、唯其處だけ明けて置いたさうだ。陸爵とあれば二階飛んで公爵ともなる譯で無からうから、寧ろ麗々しく書くか、然うでなければ全然自分の氏名を書かずとも可かつたらうが、其處が大隈式で面白い所だと云ふ人もある。宮相は協議の上、其の明けて置いた場所に然るべく書き入れたさうだが、少しはくすくつたい様な思をしたであらう。

▼侯大隈に付いて離れない人間は、水産翁村田保である。彼れは海軍瀆職事件勃發の際、上院に於て當時の首相樺田兵衛の彈劾演説を試み、萬斛の熱涙を注いだが、夫れを終へると直ちに辭表を提出した。而して彼れは勅選議員の地位を棄てた。其の痛快なる行動は、萬人の賞賛を惜まなかつた所であるが、大隈が首相になると、莫迦に大隈の提灯を持ち、太鼓を叩くやうな氣味があるので、老爺も近頃は何うかして居るとの

風評が立つた。今次の騒ぎの際にも、大隈を訪ねて、其の奔走振を見せて居る。最う政界を高踏勇退した老爺が、再び色氣を出して、運動がましい事をする、以前にやつた痛快事までか廣告のやうに見えるものである。彼れが眞に國家を思ふの熱誠あらば、此際大隈を涙を以て説き、餘りに政界に對して權變を弄せぬやうに忠告したら可いぢや無いか。侯の法螺に吹き捲られて、到底太刀打が出来ぬと云ふなら、先づ大人しく引込んで所るが可からう。

▼大隈が、適當な後任者を得て勇退すると云ひ觸らすは、まだ勇退するの時機に達せずと矜つてるやうなものだ。家督を譲りたくない親爺が、倅さへ一人前になれば早速家督を譲つて隠居するのだがと、口癖のやうに人に云ふと同然である。一度居据りの味を嘗めた彼れは、大抵はこんな事で誤魔化して行けるものと多寡を括つて居る。上院が反抗すれば、公山縣を引出して鎮撫させる。山縣は國家の爲めとさへ云へば、何でも吾輩の云ふ事を聽いて呉れるに相違ないと思つて居る。目白の大御所も、老獺な大隈に會つては、巧みに誤魔化されて了ふ。一たび大隈の手に乗せられた公は、二三

度位乗らなければ目を剃き出すまいと思ふ。佛の顔も三度と云ふ事があるから、三度以上は保證の限りでないが、三度までは引掛けられるだらう。侯の辭意が確固ならば、辭表を提出すれば夫れで可いのである。後繼者に就て御下問あらば、其の時適任と思惟する人物を推薦して奉答すれば、夫れで済むのである。時々民意の瀕路をする様な人騒がせは、遣つて貰ひますまい。

四

▼特に政界の注意人物ともなつてないが、政局の變調を敏感するのは、上院の男目賀田種太郎である。彼れは宮内省の要樞人物と往復して居るので、其の邊の事情が手に取るやうに分明するものと見える。彼れも順調に行けば疾に臧相になつた人物だが、韓國財政顧問以來下り坂の氣味で、餘り羽振が利かなくなつた。暫く雌伏して時機を窺つて居たが、近年其の雄心を抑へ兼ねてか、不平で溜らない爲めか、上院の論戰で火花を散し、盛んにメートルを上げて居る。彼れの得意とするは財政問題であるが、現内閣に肉迫するは單に之のみならず、諸有問題を捉へて、其の辛辣なる舌鋒に掛け

て居る。時に脱線するやうな事もあるが、議政壇上の闘士としては、目ざましい活動振を見せる。も少し貫祿が付けば、好個の闘將として、上院を震撼するであらう。

▼今次の政權授受の私議以來、政府側でも與黨三派の結束を固くするの必要ありと觀て取り、頻りに三派合同談を進めて居る。先般三黨首領會商の際は、中正會や公友俱樂部を除外して事を運んだが、今度は子三浦を肝煎役とした會商よりは與黨三派の結束が喫緊事だと云ふので、同志會乃至大隈系の人々が、必死の運動をやつて居る。而して、其の運動の中心は、文相高田早苗である。彼れは少壯時から政黨に關係し、改進黨の組織などには随分骨を折つたものである。一時退いて教育界に隠れたが、然うした閱歷關係を持つて居る彼れ、黨人を殺活擒縱するの手腕を持つて居る彼れは、三派を打して一丸となし、新政黨を創立しようとするには適當な人物である。子加藤は素より此の舉に反對せず、或時機までは高所から觀て居るのである。總裁には無論侯大隈を迎へ、若し侯が出馬せぬ時は暫く總務制でやらうと云ふのだが、加藤・高田・尾崎の三頭政治で旨くやつて行く積りなのであらう。が、尾崎が這入つては何うかと成立

前から懸念する者もあるやうだ。

▼三派合同の交渉に當つてゐるのは、同志會は安達謙藏に濱口雄幸で、中正會は早速整爾に橋本太吉、公友俱樂部は下岡忠治に戸叶薫雄で、其の主動的地位に立つは、安達及び濱口の二人者である。安達は黨内を纏める事は可いが、黨外に對しては夫れほどの魔力を發揮し得ようとも思はれぬ。濱口は一寸豪傑風に出來て居るから、安達のやうに悪感を挑發する様なこともなく、其の缺を補ふには善いが、黨人の懐柔には不馴れな所がある。早速は敏腕、橋本は無能だが、合同には異論のあらう筈なく、之を纏める事に極力盡瘁する者と見る事が出来る。夫れに早速は大隈系の人物で、現内閣の存続を欲する一人だから——。唯下岡、戸叶の兩人は主義に於て賛成するが、公友俱樂部は實業家出身の團體たるだけ其の嚮背が考へ物だと云つて居る。けれども、彼等自身は合同に對して大に奔走するであらう。

▼此の三派合同の目的は、下院に三百名以上の大多數を有する新政黨を樹立するにあるのだが、公友俱樂部は下岡等の懸念したやうに、合同に反旗を掲ぐる者は二十名近くもある。其の中には、横山章、大木喬命、平沼亮三等の大隈迎合者流も居るのだから、天候頗る險惡なりと見ねばならぬ。或は彼等が一團となつて、實業黨を組織するのでは無いかと傳へられて居る。併し愈よ侯大隈が出馬する事ともならば、高田の勸誘に動いて、合同に賛成するかも知れぬ。兎に角新政黨の組織までには、尙幾多の曲折がある事と思ふが、今回は機運も何程か熟して居るから、流産に終るやうなことも無からう。果して之が出來上るものとするに、現内閣官僚の接戦が佳境に入るのである。(大正五、八、二〇)

首相としての寺内元帥

公山縣の寵兒伯寺内、遂に出でて内閣を組織す。稱して超然内閣と謂ふ。是れ大正政變史上に特記さるべき事實なり。

侯大隈の挂冠するや、後繼内閣の首相として、多數黨の總裁なる子加藤を奏薦せり。

而も大命は直ちに子に降らず、元老會議に諮詢の結果、伯寺内に降下せり。政界は其の意外に驚けり。世人は始め侯大隈が後繼者を奏薦するに於ては、大命の必ず其の奏薦せる後繼者に降るべきを豫想せり。然るに大命は、其の豫想外に出で、元老の推薦せる元帥陸軍大將伯爵に降下せり。是に於て、折角首相を豫期して嬉喜せる富豪の愛婿子は、軍閥の寵兒伯の爲めに一蹴されたり。侯大隈の開いた口の塞がらざるは勿論、三派合同劇中の人々も、其の當の外れたるを愁歎せり。之に引き換へ、盾を敲いて凱歌を奏せるは、公山縣及び伯寺内の周圍者なり。殊に參謀本部の如きに至りては、伯の首相就任と同時に俄かに活氣づけり。

侯大隈の元老の不快を買へる、一にして足らずと雖も、其の主因は、對支外交の失敗と、多數黨擁護後に於ける傍若無人の態度なり。侯は表面元老に聽從するが如く見せ掛くるも、内心之を反撥して相容れず。暗に元老の勢威を削ぐの方策を講じたり。侯は黨閥——政友會の絶對多數——を打破せる以上、進んで藩閥を打破せざるべからずと爲し、著々と其の計畫を進行せり。公山縣等は老獺なる侯の術策に翻弄され、日

に其の勢威の盛まるを慨し、隈閥倒壞の運動を開始せり。上院の減債基金還元問題に就て衝突せる、其の名義の如何に拘らず、隈閥倒壞の火の手なり。公山縣の急遽上京して消し止めたるに由りて大事に至らざりしも、若し之を放任せんか、隈閥の運命は既に斯の時に決したるやも測るべからず。當時公侯の間に、政權讓渡の默契成れりと噂あり。斯くて難關を切り抜けたる侯は、二たび第二の難關に遇ひて内閣の一部改造を成し、恬然居据りの戯劇を演じたり。更に今秋辭職を内奏し、寺内加藤聯立内閣を目論めるも思ふやうに行かず、二度の居据りを敢てせり。斯の秋に際して、公山縣及び伯寺内等は、徒らに老獺侯の翻弄する所となりて又如何ともする能はず。私かに時機の到來を待てり。侯は頻りに老後の計を成し、三派合同の黨勢を以て元老を威嚇し、子加藤を後繼者となすか、能はずんば三たび居据りを演ずるかの二途、其の一を擇ばんとせり。早くも之を豫知せる反隈派は、侯が術策の裏を掻き、侯の辭表を捧呈するや、咄嗟元老會議を開きて伯寺内の推薦を決議し、隈派をして策を施すの餘地なからしめたり。三寸の怪舌を以て公伯を魅了し得べしと多寡を括れる侯は、却て彼等

の術中に陥りて、詰腹を切るの餘儀なきに至れり。人或は伯寺内の出處を好まざりしが如くに傳ふるも、盛夏を悠々と青山白水の間に送りて任地に赴かず、機を熟するを待ちて猛然驟起せるの武者振を見れば、伯の心既に決せるものあるや明かなり。

惟ふに元老の伯寺内を推薦せるは、軍閥の擁護素より其の考慮の中にあること論無きも、先づ對支外交の緊張を圖りて、彼等の所謂國家の前途の爲めに深憂を除かんとするにあり。元老の考慮茲にある以上、縦令侯の術策に反感を持たざるも、對支外交の失敗者たる子加藤を推すを肯んずる者に非ず。黨人の憲政の爲めを高唱し、元老の國家の爲めを力説する所に尠からざる懸隔あり。元老は唯一に國家の爲めなりと稱し、憲政の逆轉と否とは敢て齒牙に懸けざるに似たり。そは兎もあれ、元老の伯寺内を推薦せる、殊更に憲政の逆轉を敢てせんとは非ず、國運の進轉を期せんとするにありとするも、時代思想と逆行して、超然内閣の成立を助成せるは遺憾なき能はず。然れども、伯寺内は元老の擁立する所となりて首相となれる以上、自ら信する所あり、成竹あるに相違なしと雖も、何等政黨の後援なき彼れが、如何にして今期の議會を通過

せんとするや聊か疑問なき能はず。從來の超然内閣の組織者は、政黨間に於ける蟻蚌の争に乗じて、巧みに之を利用し、若くは買収し、妥協して以て一時の難を免れたり。斯の如きは古く公山縣の試み、近くは公桂の一再ならず用ゐたる姑息策にして、眞個憲政を運用する者の採るべき手段に非ず。彼の公伊藤の政友會を、公桂の同志會を組織せるに見るも、買収乃至妥協を以てしては、自家の政策を行ふに不都合なるを知るべきなり。然るに伯寺内は、上院に多數の後援あるを頼みとし、蟻蚌の争に乗せんとするは、餘りに舊套の手段ならざるやを思はざるを得ず。尤も彼れの初志は、侯大隈の理想内閣の向うを張りて、舉國一致内閣を組織するにありしも、其の顔觸を見るに至りて、其の名實相副はざるの觀なくんば非ず。尠くとも舉國一致内閣と云ふ以上、政國兩黨位は藥籠中の者とせざるべからず。然るに、彼れは三大政黨の黨首に一應の挨拶せるのみにて、敢て之に手を觸れず、唯男後藤をこほして彼が子分を操縦し、政友會の妥協辯を利用して、暗契默會の態度を持せんとするに過ぎず。而して其の豫算の加きも大體に於て前内閣の方針を踏襲するを以て、新政黨の如きも大に反對せざる

べしと多寡を括り居るに似たり。現内閣は未だ其の政策を發表せざるが故に、如何の新しい内容の盛られあるやを知らずと雖も、前内閣の政策を其儘踏襲するにせば、其の更迭は全く無意義のものとならざるべからず。斯の如くんば、彼等は國家の爲めなる美名を以て、政權を握らんが爲めに、倒壊せんが爲めに倒壊せりとの誹を免るゝ事能はざるなり。

二

現内閣は舉國一致内閣に非ずして、超然内閣なり。政黨を基礎とせず、同系の人材を網羅せるが故に、若し、超然内閣以外の稱呼を以てすれば、所謂人材内閣なり。前内閣が政界の骨董的人物を擧げたるに反し、これは新進の事務家を拔擢せり。新進と云ふと雖も五十臺六十臺の人物なれば、舊進中の比較的新進人物なり。大臣の器と稱せんよりは寧ろ事務官の材なれば、實務の擧がるべきは改めて裏書するの要を見ず。斯の人物選任の標準より見るも、伯寺内は大言壯語の徒を排して事務的手腕家を擧げ、事實に國政を料理し、實務の進捗を圖らんと期するや明かなり。其の遣り口の華やか

ならざる、前内閣の大風呂敷に鑑みる所ありて然るに非ずして、彼れが性格の然らしむる所なり。閣僚中にありて稍毛色を異にせるは男後藤なるも、伯の之を拔擢して内務の要樞に据ゑ、鐵道院總裁の椅子を與へたるは、又深き考慮の存する所なり。伯は生彩煥發の男をして政黨操縦の任に當らしめ、併せて議會解散の萬一に備へたる也。現内閣の如き着實なる事務家揃の内閣には、男の如く突飛なる、而して如才なき、活動的人物を配するも、亦一種の色彩たるを失はず。現内閣も見やうに依りては、形を換へたる清浦流産内閣なるも、子清浦の大命を拜して、其の組織に着手しながら、海相其人を得る能はずして流産の止むなきに至れるに比すれば、伯寺内の短時日に組織を了せるの手腕は認めざるを得ず。尤も子清浦が内閣組織の際には、公山縣の盡力足らざるものあり、今次の組織には其の力瘤の入れ方の違ふ所あるに由ると雖も、亦伯寺内の何程か人氣を有するものと見ざるべからず。

世人が超然内閣の非を鳴し、排閣を呼號しながらも、伯に期待する所は外交政策の統一にあり。由來我が外交には外務省の外交と參謀本部の外交との二ありて、其の成

す所多くの場合に相背馳す。宛然兩頭蛇の首尾相牽制して進退自由ならざるが如く、我が兩頭外交の不振と失敗との外何等贏ち得る所なし。偶ま其の外交の成功を收め得るは、其の兩者の方針の相一致せる際のみ。人多く外交の失敗を以て外務の無能に歸するも、參謀本部の外務を牽制するの有能をも責めざる可からず。最近對支外交の失敗の如きは、一に此の兩頭蛇が首尾相牽制せるに因す。是に於てか元老等は舉國一致の必要を説き、外交の刷新を叫び、外相の更迭を迫れり。然れども此の根本の禍因にして解決せられざる以上、外相加藤を追ひ、外相石井を迎ふるも、依然として振はざるは當然のみ。公山縣の一派が、隈閣の倒壊を企てたるは、軍閥擁護以外、此の外交の刷新を剩下の急務とせるなり。而して外交の刷新を圖らんには、彼等の主張する如く、陸軍の權威者たる巨頭を首相に擔がざるべからず。何となれば陸軍の勢威は、外務の無能を嗤笑しつゝあるが故に、陸軍をして外務と同一行動に出でしむべく、其の命令を徹底せしめ得べき有力者たらざるべからざればなり。是れ元老等が頻りに伯寺内の厥起を促し、以て外交の緊張を圖らんとする所以なり。今次外相を物色するや、

目星を駐露大使本野に着け、參謀本部をして其の就任の交渉に當らしめ、早速其の承諾を得たるが如き、其の機敏の活動は、陸軍ならざれば到底必期し得べきに非ず。以て陸軍網の如何に密に海外に勢力を張り、外務省の外交官を壓倒しつつあるかを知るべきなり。伯寺内既に首相となり、子本野近く外相に就任するに於ては、兩頭外交茲に始めて一致の行動を採り、外交界の刷新を期するを得ん乎。吾人は武斷的外交を謳歌する者に非すと雖も、少くとも外交界の刷新を圖らんには、兩頭外交背馳の積弊を根絶せざるべからず。此の意味に於て、現下の對支外交の如きは、寺内式積極味を加味するの要あり。徒らに親善主義を唱へて、優柔不斷、昨是今非、朝變暮改、一定の外交策を遂行する能はざるは、國家の面目を失すること極めて大なり。對支外交の確立、滿蒙問題の解決は、伯寺内の當然成さざるべからざる所のものなりとす。若し之をしも遂行し能はずんば、彼れが時勢に逆行せる超然内閣を建立してまで首相となれる意義の大半は、滅却し了するものならずんば非ず。

三

伯寺内は明治四年八月陸軍少尉に任せられ、其の十一月進んで中尉となり、翌年五月大尉に陞進せり。其の進級の速かなる、到底今日に見ること能はず。是れ、彼れが材幹の秀拔なるに由るべしと雖も、併し乍ら長州の出身なるが故なり。公山縣は此の頃より彼れの材幹を愛し、公の官邸なる一戸を貸與し、以て彼れの用に供せり。彼れが今日、公山縣の寵兒として時めき、長州系の間に隠然たる勢力を有する、又所縁なきに非ず。

彼れ大尉に陞進後幾許もなくして、陸軍士官學校生徒隊長副官となれり。明治十年西南戦争起るや、彼れは中隊長として出征せしが、田原坂の役、右腕に貫通銃創を負ひて骨碎せり。されば右腕は纔かに筋肉と表皮との接續さるゝのみ。骨折れたれば全然用を成さず。彼れが常に右腕をだらりと垂れ、左手以て敬禮を行ふは之が爲めなり。同じく不具と云ふと雖も、前首相大隈の脚部を切断せるの不具とは異なれり。一は軍人なるが故に銃彈に呪はれ、一は政治家なるが故に爆裂彈に襲はれたるも、其の職務の爲めなるは一なり。雙脚侯に次で、雙手元帥の首相となれる、大正政界の變調を語るものならずんば非ず。

彼れ寺内にして、若し長州出身ならざりせば、疾うの昔に廢兵となりて、恩給年金に衣食せるや知るべからず。然るに、彼れは公山縣に愛されたるが故に、廢兵の運命より脱して少佐となれるも、如何せん不具の身なるを以て實戰に立つこと能はず。是に於てか彼れは軍政乃至教育の方面に向はんと欲し、軍事視察の爲め佛國に留學するの念禁する能はず、夫れとなく公山縣に諷せり。當時留學生は大尉以下より派すべき制度なるが故に、如何に親分の最員を以てするも、少佐たる彼れを留學生に選拔する能はず。さりて前途有望の子分を埋木となすに忍びず、考慮の末遂に彼れを公使館附武官となし、以て佛國留學の志望を達せしめたり。時に明治十五年なり。彼れが今日佛語を操るは、全く此の留學の遺蔭なり。留學中既に中佐に進み、明治二十年歸朝後大佐に陞進せり。後年非立憲の綽名を頂戴せる彼れも、當時は陸軍部内の新智識として持て囃され、第一師團參謀長に補せられたり。

彼れ任に赴くや、直ちに第一師團の積弊に斧鉞を加へ、未だ一年ならざるに其の面

目を一新せり。爾後益々公山縣の重用する所となり、參謀本部第一部長の要職に就くに至れり。當時兒玉源太郎は陸軍次官たり。長州の俊髦を以て稱され、陸軍省を切つて廻せり。偶々議會開會中腦溢血に罹りて事務を見る能はず、彼れ乃ち代りて其の職務を執行せり。一は豪傑肌にして才氣煥發、裁決流るゝが如く、一は事務官式にして思慮周密、一事を苟くもせず。其の肌合は異なるも、各長所特色あり。前者の豪放は時に公山縣に忌まるる所なきに非ざるも、後者の嚴格は却て其の喜ぶ所となれり。後出でて第三旅團長となり、程なく監軍部御用掛となりて中央に舞ひ戻り、明治二十七年少將に進み、日清戦役に際して運輸通信部長となり、性來の嚴格を遺憾なく發揮し、例の精力主義を以て十分の成績を挙げたり。爾來登用せられて、教育總監部長となり、參謀本部次長となり、次で陸軍大學校長を兼ねたり。

彼れが始めて陸相となれるは、明治三十五年四月にして、實に臺灣總督兒玉が陸相の兼職を退けるの時なり。彼れは兒玉の後を襲ふや、早速經理事務を再び軍人の手に收めて、公山縣の機嫌を取り直せり。之より陸相の椅子に凭ること殆んど十年、第一

次西園寺、第二次桂の諸内閣に歴任せり。其の間、三十九年十一月大將となり、四十二年六月韓國統監を兼ね、同年十月日韓併合を斷行して、朝鮮總督を兼任し、次で陸相を男石本に譲りて、總督專任となれり。彼れの陸相在任中は一意長派の勢力を扶植するに努め、漸次薩派の勢力を陸軍部内より驅逐せり。始め參謀本部の如きは、薩の子川上操六其の威を揮ひ、次で田村怡與造の手に依りて其の勢力を支持されしが、彼等相亞いで世を去るに及んで、長派の獨占する所となれり。而して參謀本部は時に長州の中心勢力たるの觀を呈し、内閣倒壞の導火線となる事すらあるに至れり。斯の勢力を作れる、公山縣の畫策に由ること勿論なりと雖も、伯寺内が其の命を受けて、頑強且執拗に遂行せるの精力に歸せずんば非ず。

四

彼れが少尉となりてより本年元帥に進むまで四十五年、軍人の生涯を以て一貫し來れり。而も一たびも逆境に立たず、宛がら順風に帆を張る船の如く、何の苦もなく陸進せり。彼れが軍人萬能を信じ、黨人などを目八分に見るは、其の境遇の然らしむる

所なりと雖も、何程か其の性格の偏狭なるに由らずや。公桂は内面陰險なるも、外面温和、能く他を懐柔するの魔力を有す。爲めに長州の先輩を掌の中に丸め、黨人を巧みに擒縦して、内閣の御用を勤めしめたり。伯寺内は外面倨傲なるも、内面重厚、詐權變を弄する程の悪智慧を有せず。生眞面目にして、几帳面なる所あり。一語以て評すれば、手固い一方の人なり。公山縣を唯一の親分と頼むが故に、其の信用を得ること勿論なるも、下僚の受は宜しからず。是れ、彼れが餘りに几帳面にして、一事苟くもせざるに由るなり。侯大隈の大風呂敷を擲げて得意がり、責任の之に伴はざるに比すれば、其の生眞面目の稱すべきものあるも、偏狭に失すれば衆望を得ること能はず。首相の器、陸相、總督の材と自ら異なる者なれば、縦令鄙吝にして富を獲たりとも、大旦那は宜しく大旦那風に振舞はざるべからず。

彼れの首相となるや、外紙は一齊に彼れを以て武斷的政治家なりと評し、頗る畏怖の状あり。彼れの生涯より觀る時は、彼れは確かに武斷的政治家なり。彼れが陸相時代に於ける、又總督時代に於ける、皆武斷を以て成功せり。武斷は彼れの生命なれば、

今後弊履の如く一擲すべしとは信せざるも、多少手心を加ふるや明かなり。彼れは對米影響の甚だ面白からざるを觀取し、外相の未だ定らざるに、早計にも柄になき愛嬌を振舞けり。米國の如き圖々しき國に對しては、無用の甘言を弄せず、多少の辛辣味を示さざるべからず。是れ、陸相時代の美に懲りて膾を吹くに類するも、彼れが親善主義を標榜するは、敢て彼れの武斷を捨てたるに非ずして、關係國の感情を融和せんとするの政略に外ならず。

然らば陸相時代の美とは何ぞ。曰く、彼れが軍備充實の計畫を樹て、其の協贊を議會に要求するに當り、倨傲尊大に構へて、不謹慎の言を弄せること、是れなり。彼れが議會に於て民力休養論者を漫罵せる放言が忽ち海外の反響を惹起し、神經過敏なる某々國の感觸を害するに至れり。流石の彼れも大に狼狽し、其の副官を窃に各新聞社に遣して記事の訂正を哀求すると同時に、速記録より内密に或事項を抹殺せしめ、以て關係國の感情を融和せんと努めたる事あり。今次の事、又海外の猜視を轉せんとし、親善主義の聲明をなしたるものなるべしと雖も、歐米の一擧一笑に神經過敏なる

が如きは、彼れの爲めに之を採らず。一片の辭令的外交は、霞ヶ關の高橋子弟尙之を能くす。彼れに期する所は、對外政策の確立にあり。

彼れが海外に畏怖さるゝは、曾て侵略的政治家なりとの印象を與へたるに由る。そは、彼れが公桂と謀りて、一氣呵成的に日韓合併を斷行せるを以てなり。斯の筆法を以てするに於ては、滿蒙の割取さるゝは云ふ迄もなく、支那本國も帳消となり、比律賓群島も亦風前の燈となる譯合なれば、米支の喫驚せるも然る事ながら、斯の如きは畢竟杞人の憂に過ぎず。彼れ如何に武斷的、侵略的なりと雖も、此の無謀を敢てする者に非ず。二十五師團増設の計畫は、彼れが陸相時代の立案に係るを以て、飽まで之が遂行を期せんとすべけんも、我が財政は未だ之を許すの時機に達せず。縦令軍備充實の美名の下に決行せらるべしとするも、侵略的政策の前驅に非ず。底には底あり、又蓋もあるなり。然れども國家の爲めに、外國より甘く見て嘗められんよりは、辛く見て畏れらるゝを可とす。現内閣の畏怖を買ふ、何程か前内閣に比し腰の強しと見られたるに由るべければ、如何にも結構なる事なり。さりながら誤解は誤解として葬る

事なく、飽まで之を辯明して、其の真相を知らしむるの必要ありと雖も、内兜を見透かさるゝが如きは、決して策の得たるものに非ず。一時は侯大隈の術中に陥りて翻弄されたる彼れ、幸に對手國の猾智に乗せられて、其の方針を誤る事無くんば可なり。

五

由來内硬外軟は歴代内閣の宿病なり。彼れは須らく此の宿病を癒すべく、其の辛辣なる隻腕を揮ふを要す。然らば彼れの採る所の方策は、内硬外剛か、内柔外剛か。總督時代の遣り口を見れば、何としても内柔外剛なりとは云ふ能はず。依然として内硬なり。夫の憲兵政治を布きて勢威を張り、極度に言論の自由を束縛せるが如き、新附の朝鮮の治安を維持し、秩序の整齊を期するに於て止むを得ずと雖も、今少しく人權の伸張を圖り、官權的高壓の手を緩うせば如何と思はれざるに非ず。然れども、こは何事も朝鮮なればと云ひて申譯の出來るやうなる者なれど、此の筆法を以て内地に臨まば果して如何。彼れは如何に武斷的なりと雖も、官權的高壓を以て政治の要諦とする程に、惡辣且愚昧にあらず。侯大隈の如く言論の自由を力説せずとも、侯大隈の言

論を抑壓せるの手段を學ばざるに於ては、世人は必ずや其の不言實行を稱揚せん。彼れが此の勇氣を發揮すると否とは、彼れが行動の公明正大なるや否やの分岐點なり。彼れが閣僚たる男後藤は廣告好きの仁なるに似もやらず、實行不可能の政綱を麗々しく表示するの愚なるを悟り、要は不言實行にありと力味返りたるを以て見れば、伯寺内の意も亦茲にあるに非ざるや。然らば現内閣は不言實行主義の下に、實行を尙んで、虚飾を去るものなるや知るべからず。其の意敢て惡しきに非ざるも、不言實行は動もすれば秘密主義に墮し易く、憲政の常道に反して專制の弊を醸し易かり。政黨操縦の必要より斯かる不徹底なる言明をなすとせば自ら別問題なるも、名を不言實行に假りて、政策發表を差控ふるが如きは、誠心誠意を以て國政を料理する所以に非ず。現内閣は前内閣の踏襲者にあらず、其の政策の異なるべきは其の所なり。彼れが尙し侯の政策其儘を踏襲すとせば、敢て内閣を倒すの要なく、子加藤と聯立内閣を組織するを可なりとせん。苟も之を倒したる以上、侯が行き詰れる政策を繼承することなく、自己の抱負と確信とを以て、一新生面を開かざるべからず。而も隈閣を倒壊せる人々

は、所謂官僚系に屬する上院の有力者なり。其の有力者を後援とする所の彼れが内閣なり。彼れが閣僚たる男加藤、男田、仲小路等が前内閣を攻撃せる減債基金問題は、彼等の主張の如く還元を實行して、其の問題の解決を附けざるを得ず。則ち減債基金の還元は、現内閣の政策の一ならざるべからず。更に彼等は國有鐵道の軌制を決定せんことを前内閣に註文せり。其の如何にして財政の遺縁をなすやを知らざるも、鐵道の廣軌改築も亦、現内閣の政策の二ならざるべからず。而して彼等は又、陸軍省が露國に軍器を賣却せんが爲めに執れる從來の會計手續の不法を鳴し、次年度の豫算編成までに之を改善せんことを前内閣に強要せり。則ち此の會計手續の改善は、現内閣の政策の三ならざるべからず。又更に彼等は、製艦費の全部を豫算に計上せんことを前内閣に迫れり。軍備充實は伯寺内年來の主張なれば、増師乃至製艦費の計上は彼れの躊躇せざる所ならんも、如何にして財政上の調和を圖らんとするか。此の軍備の充實も亦、現内閣の政策の四ならざるべからず。如上の政策の全部は、素より彼れ自身の主張し、而して前内閣を苦しめたるものに非ずと雖も、之を主張せる閣僚の多數を有

する以上、必ず之が實行を期するは當然なり。變説改論は前内閣以來の流行にして、如何に在野當時の主張に朱書を加ふるを恥とせざる世の中なりとは云へ、彼れが如く武士道を重んずる者は政治道德を無みせず、其の政策の實行を必期せざるべからず。若し國民の多數が、其の政策を是認せざらんか、潔く其の内閣を投げ出すを要す。

然れども、彼れは斯の一事に就て、或は前内閣の大員並に、當局非當局の差別見を保持するに非ざるなきやを疑ふ。何となれば、彼れは軍備の充實に關し、二枚舌を使ひたる先例あればなり。彼れが第一次西園寺内閣の陸相たるや、極力軍備擴張を主張し、閣議に於て容れられずんば、即刻冠を掛けて去りぬべき擬勢を示せり。然るに第二次桂内閣の成立するや、一般繰延政策に殉じて軍備削減を承諾せり。其の間諸種の纏綿せる情實あるべしと雖も、眞に自己の主張に殉ずるの勇あらば、西園寺内閣を威嚇せるの態度を以て、冠を掛けて去らざる可からず。或は前非を悔いて之を主張せず、陰忍して居据りを敢てせるもの乎。何にせよ、責任を重んずる者が、自個の主張の前に公明なる進退を決せざりしを惜まざるを得ず。既往は追ふべからず、彼れが今後に處

するの態度は奈何。

彼れは侯大隈の如く身振澤山の雄辯家に非ざるも、公桂が朗讀演説の比に非ず。他を目八分に見るの倨傲は子加藤に劣らざるも、彼れが如く霸氣を有せず。軍人一流の素撲なる言辭を操るも、一たび激するや、擲論、愚弄、皮肉、相次で迸出す。而も頑強に、執拗に、陣形を支持して、政敵に屈せざるなり。陸相當時、藏原に對する一場の論争の如き、其の好箇の例證なり。然れども斯の如きは首相格の論争に非ずして、聊か彌次の行動に類す。今期議會は首相としての彼れが初舞臺なるも、軍備充實問題の論戦に於ける不謹慎の言動の如き、藏原との押問答の如き愚劇を演せざるに於ては、決して其の貫録の乏しきを憂へず。

要するに、彼れは政界の未知數なり。彼れが政策の實行と、外交の刷新と、政黨の操縦とは、政界の齊しく興味、又は疑問の眼を以て凝視しつゝある所なり。本邦最初の元帥首相たる彼れの施設如何は、國家の浮沈に重大の意味を有す。彼れ伯寺内たるもの、大に振ふ所なかる可からず。(大正五、一〇、一九)

逐鹿戦の四謀士

解散後の総選挙は朝野共に氣勢の揚り、張合があつて興味のある者だが、今次の夫れは何う云ふものか氣勢が揚らず、張合抜けのして居る感がある。総選挙までまだ日数が有るので、氣勢の揚らぬのか、在野黨が意苦地が無いのか、前景氣は至つて淋しい。此の前景氣の淋しいのは、案外策戦計畫上に周密な思慮を運らすやうになつて、空騒ぎや、お祭騒ぎをせぬ様になつたのかも知れぬが、夫れにしても意氣銷沈の形跡蔽ふべからざる者がある。國民黨が憲政會を釣り出し、而して目的を達するや、之に背負投を喰はせる迄は、大した元氣であつたが、其の元氣も麥酒の栓を抜いた瞬間の沸騰のやうな、一時的亢奮に過ぎなかつたでは無からうか。然うで無ければ、超然内閣不信任の理由を徹底して、反政府の氣勢を高め、大に今次の総選挙に利用すべきであると思ふ。憲政會は前回の総選挙に、何程か後藤内相の所謂「不自然なる多數黨」と

はなつたせゐで有らうか、其の多數を保持したいと云ふ考から、消極的策戦に腐心して居る。在野黨の総選挙に莅むは、不利は不利に相違無いが、積極的策戦をなすに於ては、不利を轉じて勝利となすことが出来るものである。徒らに小智小策を弄して、大勢の指導を怠るやうな事では、到底國民信望の上に勝算を必期し得るもので無い。少しはお祭騒ぎの嫌はあらうとも、旗鼓堂々と超然内閣の非を痛撃して、民論を喚起する事で無ければならぬと思ふ。然らば政友會は何うかと云ふに、是れ又政府の手心を期待するやうな風で、一向に氣勢が揚らぬ。寺内黨の策源地と稱される櫻田俱樂部は盛んに裏面的運動をやつてるやうだが、憲政會を向うに廻して、如何程勇悍に接戦の火花を散し得るだらうか。恐らく新聞紙上の活字などで想像する様な、華麗さは無からうと思ふ。

政黨の氣勢斯の如く揚らざるに反し、政府者は多少の逆上氣味も有らうが、藁塚を敵と見て頻りに矢を放つてるやうな爲體である。彼の地方長官會議の席上に於ける寺内首相の武裝的訓令及び後藤内相の挑戰的訓令は、之を證して餘りある。彼等の斷行

せる解散は、反政府黨に對する挑戦であつた如く、今次の總選舉に對しても挑戦的態度を以て臨んで居るやうに見える。所謂不自然なる多數黨を撲滅する爲めに、武装せる鐵腕を下さうとして居るかに見える。苟も彼等が謂はれなく、無意味に、解散を妄斷せるに非ざる以上、政府黨の選出を期するは當然である。而して、其の政府黨の選出を期する爲めに選舉干渉の辣手を試みるの非なるは云ふ迄もないが、如何なる公平無私を標榜し、森嚴なる取締を厲行すと稱する内閣でも、多少の手心を加へるのは、勢ひ免れないことであらう。で、憲政會が先づ武装的訓令や、挑戦的訓令を非難する前に、民論を喚起し、大に反政府の氣勢を揚げねばならぬでは無いか。超然内閣は必ずしも舉國一致内閣でもなく、模範内閣でもなく、何をやり出すか解らぬと云ふ危険な素質を含んでるか位は、先刻御承知の事であらう。

前置は餘りに長くなつたが、之より愈よ來るべき逐鹿戰の謀士と目される憲政會の安達謙藏、政友會の江藤哲藏、國民黨の古島一雄、寺内黨の臼井哲夫の四人四様の智囊、策戦、性格、手腕を紹介する事とする。

二

安達の選舉上手と云ふことは、政界の通り相場になつて居る。が、以前は、彼れが是れ程の手腕ある人物なる事は餘り知られなかつた。唯穢多村の頭領として、政界から指揮され、徒らに冷笑の標的となるに過ぎなかつた。夫れが同志會の總務となつて男をあげ、前回の總選舉に會して豫期以上の成功を収めたので、彼れの眼の高く、彼れの腕の冴えてる所が、一般に知らるゝに至つた。けれども、彼れを貶す者は、彼れの成功は、彼れが選舉上手なるが故でなく、彼れが當時政府黨と云ふ便宜な地位に居て、官權の威力を利用したからである云つた。之も確かに彼れの一面を觀て居る説ではあるが、彼れが遣り口から察すれば、官權の威力を利用したにせよ、しないにせよ、選舉上手と云ふ事は争ふを得ぬ。其後の補缺選舉で、非政府黨の時代にも矢張強敵を斃して居る。詰り彼れの選舉上手と云ふ事は、策戦計畫が旨いのである。何うすれば敵を斃し得るかを攻究し、夫れに順應した陣を張り、形勢を按じて、歩武を進める。其の裏面には縦合陰險な策略が隠されてあるにしても、同志の反噬や、勢力争ひ

を排して、必勝の計畫を樹てるに遺算なきを期する。其處に彼れの打算の精確と、他を懐柔する或物とがある。彼れに若し争氣なり覇氣なりがあり過ぎて、他を壓迫するやうな傲慢があれば、彼れの懐柔策に破綻を生ずるのであるが、彼れは無口で、秘密主義で、對者に快感を與へる人物では無いが、其の生彩煥發せぬ所に、一種の調和性を持つて居るから、何とか纏めて行く事が出来るのである。然らば包容力が大きいかと云ふに、決して然うでは無い。随分彼れに反感を持つ者もあれば、彼れも亦自己の好まざる者を極力排斥する。一種の調和性を裏切るやうな、敵にも味方にも強いと云ふ性格を持つて居るが、其處が彼れの黨派心に強い所以である。其の黨派心に強い所が、味方として頼母しく、敵として怖るべく、味方の親愛を得る代りに、敵黨から陰險な人物と指斥されて、深く交友されない原因である。彼れ自身も亦廣く政界の士と交る風もなく、殆んど朝から晩まで憲政會本部に詰り切つて、黨務を見て居る。彼れには何の風流も、享樂もなく、政治を唯一の道樂、否生命として居るやうに見える。従つて家庭の和樂も、狹斜の歌舞も、彼れの心耳に微妙の響を傳ふるに足らぬ。冷たい

勇圍氣が冷酷な人間を作るものとすれば、彼れの無味乾燥な私的生活が彼れの如き人物を作つたのかも知れぬ。彼れは自ら奉ずること極めて薄く、居常邊幅を飾らずの石碑文句其儘の質素で、夜具なども下女の著るやうな煎餅薄團を用ひて平氣で居ると云ふ事である。

私人としては相應に長所美點を持つて居るが、黨外の人々からは蟻のやうに厭がられて居る。夫れは、彼れが陰險な、冷酷な人物だと云ふ事と、曾て穢多村の首領で有つたと云ふ事である。彼れは殆んど十年一日の如く、穢多村と指斥された官僚黨を率ゐて藩閥の御用を承り、他の政黨とは多くの場合逆行し來つたのであつた。が、善かれ悪かれ幾十かの頭數を結束して下院の一角に據り、其の黨勢を支持して來たのは、馬鹿や懶け者では出來ない仕事である。國民黨の犬養は天下の名士となり、其の清節を唄はれて居るが、彼れが吠えれば吠えるほど黨員が減ずる。今後更に大に吠えるに於ては、腹心の徒兩三人になるでは無いかとの掛念もある。政界が腐敗し、黨人が餘りに物質的になつたからだ云へば、夫れ迄であるが、安達が天下の非名士を以てし